松山市文化財調査報告書27

来住(キシ)・久米(クメ)地区の遺跡

鷹ノ子町１次・久米窪田古屋敷Ｃ
来住町１・３次・久米高畑８次

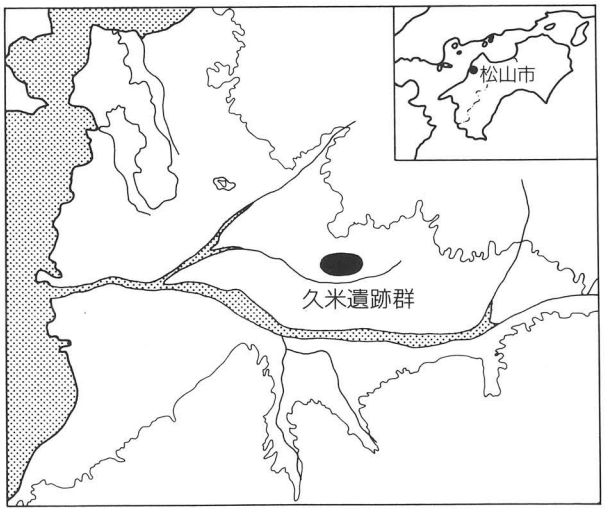
１９９２

(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書 27

来住・久米地区の遺跡

鷹ノ子町１次・久米窪田古屋敷Ｃ
来住町１・３次・久米高畑８次



１９９２

㈶松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版　鷹ノ子町遺跡１次調査出土の八稜鏡

序

瀬戸内海沿岸に面する松山市は、温暖な気候、風土に恵まれ、西瀬戸最大規模の平野を有するとともに、市域には先人の培った文化遺産が多数残されています。

近年、著しく進む諸開発事業に伴って埋蔵文化財の緊急調査が激増を来すなか、当市域からは全国的にも屈指の重要遺跡が相次いで発見されております。特に、来住、久米地区に該当する来住台地の遺跡からは、白鳳期造営の国指定史跡・来住廃寺をはじめ、同寺院に隣接する方一町規模の回廊状遺構、大規模の官衙遺跡、木簡、久米評を線刻する土器など著名な遺跡の発見をするなど、古代久米郡（評）にまつわる政治的中枢地域として大きく脚光を浴びているところであります。

本書掲載の五遺跡の調査は、いづれも同一台地上からのもので、古屋敷Ｃ遺跡からは弥生時代の濠を検出し、来住Ｖ遺跡と併せ同時代の生活を知る上で大きな手掛かりを得た発見であります。官衙遺跡の中枢地域に当たる来住１・３次及び久米高畑８次の両調査からは、古墳～歴史時代にかけての掘立柱建物を検出する新知見を得、鷹子遺跡では中世墓からの和鏡が発見される成果を得るなど、五遺跡の発掘からは遺跡の広がりを含め、先駆発掘遺跡との関係や背景など、今回の調査からはその他多くの貴重な成果を得ました。

このような貴重な成果が得られましたのも事業者及び地権関係者の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力の賜であります。また調査指導をいただいた愛媛大学下條信行教授の外、協力いただきました関係各位の皆様に厚くお礼申し上げる次第であります。本書が広く文化財の保護、学術研究、さらに教育文化の向上に役立つことを願っております。

平成４年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会（松山市埋蔵文化財センター）が昭和63年11月～平成元年12月20日に鷹ノ子町94-3、久米窪田町844-1 、来住町519 、来住町534-1 、南久米町官有地で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、梅木謙一の責任のもと、宮内慎一が中心に行い、愛媛大学、松山大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は梅木謙一、宮内慎一が行った。

3．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：ＳＢ、溝：ＳＤ、土壙：ＳＫ、自然流路：ＳＲ、棚列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：ＳＸである。

4．遺物の実測・製図、遺構の製図は、梅木謙一、宮内慎一、水口あをい、高橋恒、越智美代子、栗林千恵、立木佳代、西野貴子、藤沢真美、森田晶子が行った。

5．遺構図、遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位はすべて磁北である。

7．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

8．本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、山之内志郎、重松佳久（松山市教育委員会文化教育課）、藤原敏秀（新潟県二日市町教育委員会）が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ文末にも記載した。関連資料の調査は、宮内慎一、高橋恒が行った。浄書は、水口あをい、高橋恒が担当した。

9．写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。

10．本書の編集は梅木謙一が行い、宮内慎一、水口あをいの協力を得た。

本文目次

第1章　はじめに ……（梅木謙一）……2
1　調査に至る経緯
2　調査組織

第2章　遺跡の概要 ……（山之内志郎）……5
1　地理的環境
2　歴史的環境

第3章　鷹ノ子町遺跡1次調査 ……（宮内慎一）……19
1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第4章　久米窪田古屋敷C遺跡 ……（梅木謙一・宮内慎一）…37
1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第5章　来住町遺跡1次調査 ……（梅木謙一・宮内慎一）…51
1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第6章　来住町遺跡3次調査 ……（藤原敏秀）……61
1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第7章　久米高畑遺跡8次調査 ……（宮内慎一）……71
1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第8章　小野川水系における旧石器文化 ……（重松佳久）……87

第9章　来住台地周辺遺跡の調査成果と課題 ……（梅木謙一）……95

挿図目次

第１図　国指定史跡来住廃寺跡…… 2
第２図　石手川扇状地及び周辺の地形分類図…… 5
第３図　松山平野の主要遺跡分布図（縮分１／５０，０００）…… 7
第４図　久米地区の遺跡分布図（縮尺１／１０，０００）……10

鷹ノ子町遺跡１次調査

第５図　調査区位置図（縮尺１／５，０００）……20
第６図　調査地測量図（縮尺１／４００）……21
第７図　基本層位図（縮尺１／２０）……21
第８図　遺構配置図（縮尺１／１００）……23
第９図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１／４０・１／４・１／３）……24
第10図　掘立１測量図（縮尺１／６０）……26
第11図　掘立２～５測量図（縮尺１／６０）……27
第12図　包含層出土遺物実測図①（縮尺１／３）……28
第13図　包含層出土遺物実測図②（縮尺１／２）……29

久米窪田古屋敷Ｃ遺跡

第14図　調査区位置図（縮尺１／５，０００）……38
第15図　調査地区割図（縮尺１／６００）……39
第16図　基本層位図（縮尺１／４０）……39
第17図　遺構配置図（縮尺１／２００）……41
第18図　ＳＤ４出土遺物実測図①（縮尺１／４）……42
第19図　ＳＤ４出土遺物実測図②（縮尺１／４）……43

来住町遺跡１次調査

第20図　調査区位置図（縮尺１／５，０００）……52
第21図　調査地測量図（縮尺１／６００）……53
第22図　基本層位図（縮尺１／２０）……53
第23図　第Ⅳ・Ⅴ層上面遺構配置図（縮尺１／１００）……55
第24図　第Ⅳ層上面遺構配置図（縮尺１／１００）……55
第25図　包含層出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）……57

来住町遺跡３次調査

第26図　東壁土層図（縮尺１／４０）……63
第27図　遺構配置図（縮尺１／１２０）……64
第28図　出土遺物実測図①（縮尺１／３）……65

第29図　出土遺物実測図②（縮尺１／３）……66
久米高畑遺跡８次調査
第30図　調査区位置図（縮尺１／５，０００）……72
第31図　調査地測量図（縮尺１／１，０００）……73
第32図　基本層位図（縮尺１／２０）……73
第33図　遺構配置図（縮尺１／２００）……75
第34図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１／２０・１／４）……77
第35図　掘立１・２測量図（縮尺１／６０）……79
第36図　ＳＤ１・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……80
第37図　包含層出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）……81
第８章　小野川水系における旧石器文化
第38図　松山平野の旧石器時代遺跡（縮尺１／１４０，０００）……88
第39図　樽味四反地・樽味遺跡ＡＴ検出状況（縮尺１／４０）……89
第40図　松山平野の旧石器時代遺物(1)（縮尺３／４）……91
第41図　松山平野の旧石器時代遺物(2)（縮尺３／４）……93
第42図　松山平野の旧石器時代遺物(3)（縮尺３／４）……94

図版目次

巻頭図版　鷹ノ子町遺跡１次調査地出土の八稜鏡
鷹ノ子町遺跡１次調査
図版１．　１　調査地全景［調査前］（南東より）
　　２　調査地全景［現在］（南東より）
図版２．　１　北東隅土層（南より）
　　２　北西隅土層（南より）
図版３．　１　西半区遺構検出状況（東より）
　　２　東半区遺構検出状況（西より）
図版４．　１　ＳＫ３遺物出土状況（南西より）
　　２　ＳＫ３（南西より）
図版５．　１　掘立柱建物１，２号（南東より）
　　２　土師器小皿出土状況（南より）
図版６．　１　ＳＫ３出土遺物（1）
　　２　包含層出土遺物（８・14・21・31・37）
久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
図版７．　１　調査地全景［現在］（南東より）

2　北壁土層［基本層位］（南より）
図版８．　1　遺構検出状況①（北より）
2　遺構検出状況②（東北より）
図版９．　1　ＳＤ４（北西より）
2　ＳＤ４土層（北西より）
図版10．　1　ＳＤ４遺物出土状況（南より）
2　ＳＤ４溝床出土品（南より）
図版11．　1　ＳＤ２断面（南より）
2　作業状況（西より）
図版12．　1　ＳＤ４出土遺物
来住町遺跡１次調査
図版13．　1　調査地全景［調査前］（南西より）
2　調査地全景［調査後］（南西より）
図版14．　1　南東隅土層（北より）
2　第Ⅳ層遺物出土状況（北より）
図版15．　1　第Ⅴ層遺物出土状況（西より）
2　作業状況（西より）
図版16．　1　出土遺物
来住町遺跡３次調査
図版17．　1　遺構プラン確認状況（南東より）
2　西壁土層（東より）
図版18．　1　遺構検出状況①（北より）
2　遺構検出状況②（北より）
図版19．　1　ＳＸ１（東より）
2　ＳＰ３（南より）
図版20．　1　出土遺物
久米高畑遺跡８次調査
図版21．　1　東調査区遺構検出状況（東より）
2　調査地全景［現在］（南より）
図版22．　1　ＳＫ４（北より）
2　ＳＤ１・ＳＫ６（西より）
図版23．　1　東調査区西端土器溜り［遠景］（北東より）
2　東調査区西端土器溜り［近景］（北東より）
図版24．　1　西調査区遺構検出状況（北より）

図版25.　1　ＳＫ９（西より）
　　2　ＳＫ７（西より）
図版26.　1　ＳＫ４出土遺物（１～５）
　　2　包含層出土遺物（31～34）

表　目　次

表１．　調査地一覧……2
表２．　来住・久米地区の発掘調査一覧……12
表３．　来住・久米地区の試掘一覧……16
鷹ノ子町遺跡１次調査
表４．　溝一覧……31
表５．　土壙一覧……31
表６．　掘立柱建物址一覧……31
表７．　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）……32
表８．　出土遺物観察表（土製品）……32
久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
表９．　溝一覧……45
表10．　ＳＤ４出土遺物観察表（土製品）……46
来住町遺跡１次調査
表11．　包含層出土遺物観察表（土製品）……58
表12．　自然流路一覧……58
表13．　土壙一覧……58
来住町遺跡３次調査
表14．　出土遺物観察表（土製品）……67
表15．　出土遺物観察表（土製品）……68
久米高畑遺跡８次調査
表16．　溝一覧……83
表17．　土壙一覧……83
表18．　掘立柱建物址一覧……83
表19．　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）……84
表20．　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）……84
表21．　包含層出土遺物観察表（土製品）……84
表22．　包含層出土遺物観察表（石製品）……86

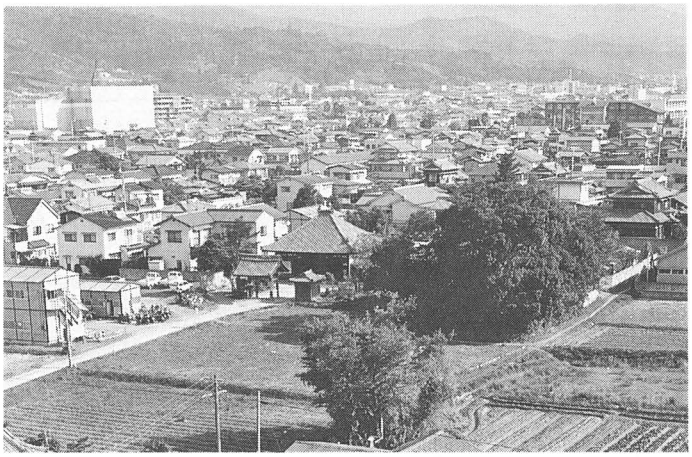
第1章　はじめに

1．調査に至る経過

松山市来住町一帯の舌状台地では、昭和53年に国の史跡に指定された来住廃寺（白鳳時代寺院）、縄文時代後期の一括資料が出土した久米窪田森元遺跡、弥生時代前期末の環濠とされる来住Ⅴ遺跡、古代の官衙関連遺構と推定される久米高畑遺跡等、縄文時代～中世・近世に至るまでの集落関連遺構と遺物が数多く確認されている。特に、久米高畑遺跡では現在までに（平成３年12月）２回の調査が実施され、来住廃寺跡寺域調査成果を加え遺構の検討を行うと、７世紀代の官衙に関連すると推定される遺構が多数存在することが明かとなってきた。本刊で報告する５遺跡は、この遺構が確認された地点の周縁部にあたり、さらには市指定の包蔵地内に位置する。５遺跡の調査は、いずれも官衙関連遺構と来住廃寺域の遺跡としての広がりとその内容を明らかにすることを主目的として行われた。各遺跡の調査経緯及び目的は各報告のなかで記述する。以下、今回調査報告する５遺跡の所在地、調査期間について記す。

表１　調査地一覧

遺　跡　名	所　在	調　査　期　間
鷹ノ子町遺跡１次調査	松山市鷹ノ子町94－３	平成元年４月10日～同年５月13日
久米窪田古屋敷Ｃ遺跡	松山市久米窪田町 844 －１	平成元年６月５日～同年８月10日
来住町遺跡１次調査	松山市来住町519	昭和63年11月16日～同年11月23日
来住町遺跡３次調査	松山市来住町 534 －１	平成元年11月14日～同年12月20日
久米高畑遺跡８次調査	松山市南久米町官有地	平成元年２月９日～同年３月15日



2．調査組織

〔昭和63年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井　亀雄
	参　事	松原　重勝
	教育次長	井手　治己
	教育次長	古本　　克
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課　長	渡部　忠平
	第二係長	菅野　治之
	主任	西尾　幸則
	主事	重松　佳久

〔平成元年度調査組織〕

（平成元年４月１日～平成元年10月30日）

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井　亀雄
	参　事	井手　治己
	教育次長	古本　　克
	教育次長	井上　量公
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課　長	渡部　忠平
	第二係長	西　　伸二
	調査係長	西尾　幸則
	主事	重松　佳久
	主事	栗田　正芳

（平成元年10月31日～平成２年３月31日）

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井　亀雄
	参　事	井手　治己
	教育次長	古本　　克
	教育次長	井上　量公
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課　長	渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター	所　長	森脇　　將
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳

〔平成２年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
	参事	古本　克
	教育次長	井上　量公
	教育次長	一色　正士
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課長	渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター	所長	森脇　將
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳

〔平成３年度調査組織〕

（平成３年４月１日～同年９月30日）

調査主体／松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
	参事	古本　克（～５月19日）
	参事	池田　秀雄（５月20日～）
	教育次長	西森　寛彦
	教育次長	一色　正士（～５月19日）
	教育次長	渡部　泰輔（５月20日～）
	教育次長	日野　正寛（５月20日～）
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課	課長	渡部　忠平（～５月19日）
	課長	岩本　一夫（５月20日～）
松山市立埋蔵文化財センター	所長	和田祐三郎
	次長	田所　延行
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳

〔平成３年度刊行組織〕

（平成３年10月１日～）

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	池田　秀雄
埋蔵文化財センター	所長	和田祐三郎
	次長	田所　延行
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	田城　武志
	調査主事	栗田　正芳（文化教育課職員）

第２章　遺跡の概要

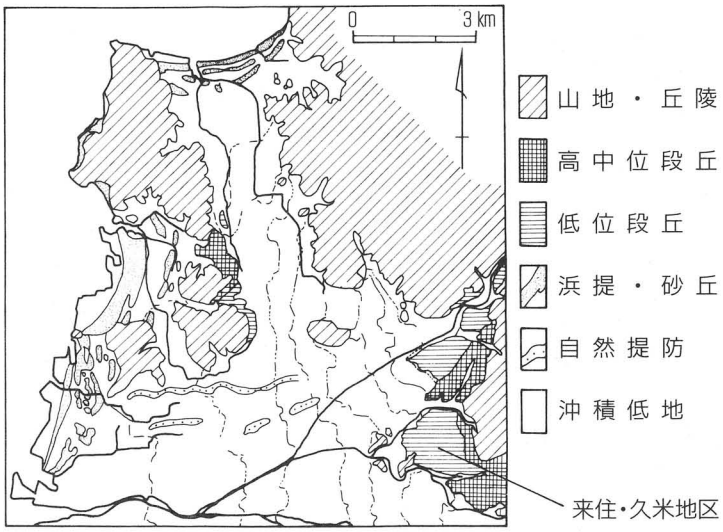
１．地理的環境

東を高縄山地に囲まれ、西方を伊予灘に向けて開かれた松山平野は、二大河川の解析活動により形成された沖積平野である。その石手川と重信川は、高縄山地と石鎚山に各々水源を発し、途中石手川が重信川に合流した後伊予灘へ流出する。各々の河川は、解析谷を形成しながら平野部へ流れ出し、その流れ出す地域において扇状地を形成する。

来住周辺には、内川、小野川、前川、川付川などの大小河川が流れている。そのうち小野川は、平井谷に水源を発し、星ノ岡、東山などを蛇行しながら石手川に合流する。また平井町付近で扇状地を形成しながら、標高30～50ｍの洪積台地を覆うように広がっている。

この台地の北辺を、平井谷に水源を発する堀越川が東から西に向かって流れ、また南辺を小野川が東から西に向かって流れた後、北西へ向きを変え、堀越川と合流する。この二河川に挟まれた地域が、舌状に形成されていることから来住舌状台地とも呼ばれ、地味の肥沃な農耕地となっている。また小野川が蛇行しながら、長い年月の中で台地を舌状に形成していった名残が、現在も小野川周辺に残存している。

地質学的には、段丘堆積物で形成される洪積台地に、小野川の扇状地堆積物が覆いかぶさるように形成されている。その境界線は不明とされている。来住周縁の遺跡は、鷹子付近の地形面である「鷹子面」の上に立地している〔平井幸弘　1989〕。



第２図　　石手川扇状地及び周辺の地形分類図

2．歴史的環境

当地域は、国道11号バイパス工事の際に、帯状に遺跡が発掘されたほか、昭和54年来住廃寺跡が国指定史跡に指定されるにともなって、その周辺が詳細に調査されている。今回報告される遺跡もまた、小野川と堀越川に挟まれた重要な地域である。

(1) 旧石器時代

当地域に於ける旧石器時代の遺物は、五郎兵衛谷古墳の封土中からサヌカイト製の角錐状石器１点（全長6.2cm、幅2.0cm）のほか、久米山田池遺跡からサヌカイト製ナイフ形石器１点（全長5.3cm、幅1.3cm）、久米窪田Ⅴ遺跡からサヌカイト製ナイフ形石器１点（全長8.8cm、幅2.2cm）、平井町今吉からサヌカイト製ナイフ形石器２点（全長4.0cm、幅1.8cm，全長3.3cm、幅1.3cm）とサヌカイト製掻器１点（全長3.4cm、幅1.4cm）、北久米からサヌカイト製ナイフ形石器１点（全長5.8cm、幅1.3cm）などが採集されているが、いずれも遺構にともなったものではない〔長井数秋　1986〕。

(2) 縄文時代

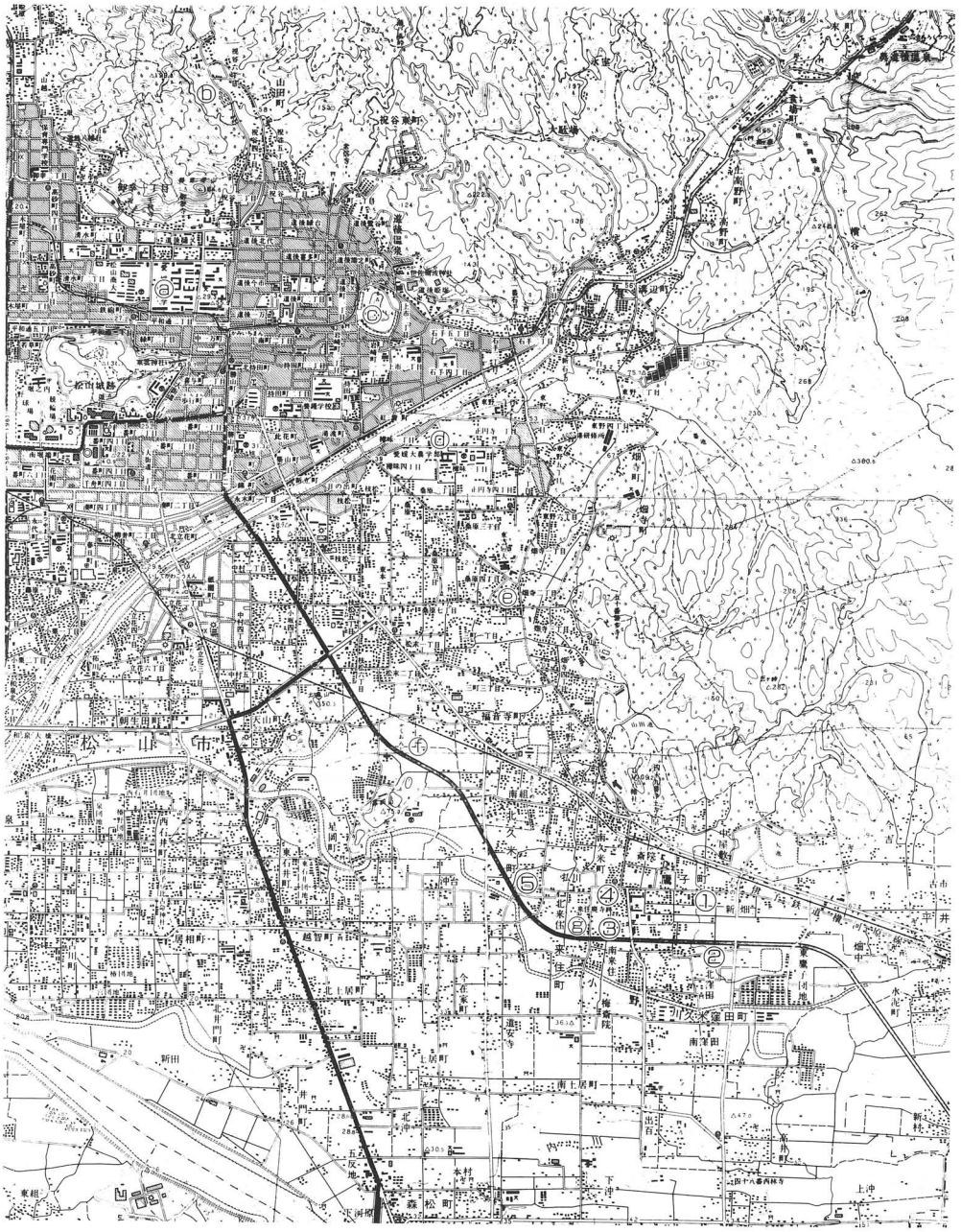
縄文時代の遺跡は、現在までのところ後・晩期に限られている。久米山田池周辺では、後・晩期の土器が採集され、久米窪田Ⅰ遺跡においても、後期と推定される土器が出土している。また、久米窪田森元遺跡では、後期後葉の約40点の破片が土壙から出土しており、数少ないこの時期の一括資料として貴重なものである〔栗田茂敏　1989〕。

(3) 弥生時代

弥生時代は、来住遺跡，来住Ⅴ遺跡，久米窪田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡などがあげられる。まず来住遺跡は、白鳳時代の来住廃寺の寺域内で検出された弥生時代の遺構で、後期を中心とした竪穴式住居址や土壙，土壙墓などが確認されている〔小笠原他　1979〕。来住Ⅴ遺跡では、環濠状遺構が２条検出されたほかに、前期後半を中心にした土器が多数出土している。久米窪田Ⅲ遺跡では、中期の竪穴式住居址や土壙墓などが検出されている〔吉本他　1981〕。同Ⅳ遺跡は、弥生・古墳・中世の複合遺跡であったが、前・中期の竪穴式住居址や土壙状遺構，土壙墓などが確認されている。同Ⅴ遺跡もまた複合遺跡であり、弥生時代の遺構としては、竪穴式住居址や土壙状遺構，竪穴状遺構などがある。いずれにしても、弥生時代全般にわたって生活に伴う遺構が検出されていることと、来住Ⅴ遺跡の環濠状遺構などを考え合わせると、この周辺における集落の存在が自ずから推測される〔阪本他　1981〕。

(4) 古墳時代

古墳時代中期には、帆立貝式前方後円墳と推定される観音山古墳が平井町今吉に存在する。正式な調査が実施されていないため正確ではないが、盾形・家形埴輪が出土したとされている〔西田　栄　1986〕。後期には、二ツ塚古墳（推定全長約48m）・波賀部神社古墳（全長62m）・タンチ山古墳などの大規模な前方後円墳が、平野部において出現する。そのほか、一



ⓐ 文京遺跡(愛媛大学)　ⓑ 祝谷六丁場遺跡　ⓒ 道後湯月遺跡　ⓓ 樽味立添遺跡
ⓔ 三島神社古墳　ⓕ 福音寺遺跡　ⓖ 来住廃寺遺跡　① 鷹ノ子町遺跡１次調査
② 古屋敷C遺跡　③ 来住町遺跡１次調査　④ 来住町遺跡３次調査　⑤ 久米高畑遺跡８次調査

第３図　松山平野の主要遺跡公布図　(S＝１：50,000)

墳丘二石室を有する芝ヶ峠１号墳（円墳・径約12m）や、王冠や長鎖付耳飾一対が出土したと伝えられる桜塚古墳（方墳）などは特筆すべきものである。

また群集墳は、当地域の丘陵部に来目部小楯の墓と伝えられる播磨塚古墳群や芝ヶ峠古墳群などが数多く存在する〔森　光晴　1986，西田・森　1980〕。

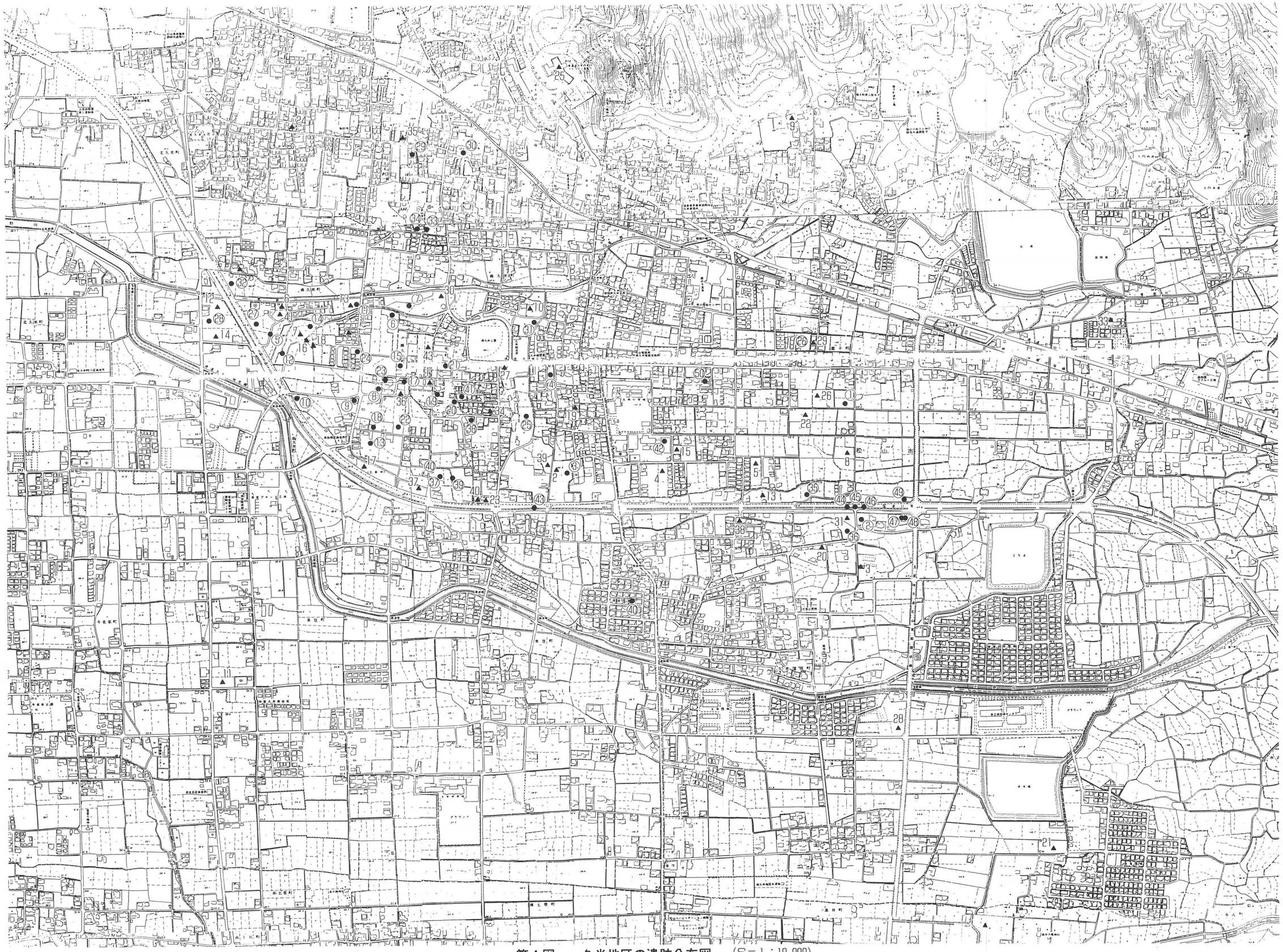
このように松山平野内部で、大規模な古墳が集中する地域は他にはなく、当地域を支配していた豪族の存在が考えられるが、その大集落を擁するだけの生活遺構がこの地域からは未だ発見されていない。

(5)　古代・中世

この地域から福音寺周辺にかけての地域には、歴史時代の遺跡が数多く存在する。前述した通り、国道11号バイパス工事の際に、生活関連遺構及び官衙に関係すると思われる遺物が出土している。前川Ⅰ・Ⅱ遺跡は、堀越川を挟んで両河岸で発見された遺跡である。Ⅰ遺跡では掘立柱建物６棟、Ⅱ遺跡では掘立柱建物２棟が検出されている。また、干支の「甲」の文字を底部外面に墨書した土師器の皿や人形が出土している〔森　光晴　1981〕。久米窪田Ⅱ遺跡では、２時期に大別される３間×２間の掘立柱建物７棟が検出され、おびただしい量の遺物が出土している。特に「上」「ノ」を墨書された須恵器や、人形代・削り掛け・木簡などは官衙の可能性を窺わせるものである。また土器製作用の木製あて道具・叩き板等が出土している〔吉本他　1981〕。

前川Ⅰ・Ⅱ遺跡から西へ300mの久米高畑遺跡第１、11次調査においては、久米評の評衛関連遺構の可能性が高い大規模な掘立柱建物を含め20棟以上検出されている。また同遺跡第７次調査において「久米評」線刻須恵器が発見され、この地域が久米評に関係した政治的中心地であったことを裏付ける資料となった〔西尾幸則　1989〕。

松山平野に於ける白鳳時代の寺院としては、７寺院があげられる。その中でも、久米郡に属していたと推定されるのは、中ノ子・来住廃寺に次いで、朝生田・千軒廃寺がある。いずれかが久米氏の氏寺の久米寺であろう。来住廃寺は、昭和52年以降断続的に発掘調査を行った結果、現在のところ法隆寺式の伽藍配置を持つ７世紀後半の寺院であるという。昭和62年には、隣接して検出された東西の掘立柱列が、当所に来住廃寺に伴うものと考えられていた南北の掘立柱列とともに、方１町規模で回廊状に巡る遺構であることが明確になった。その後の回廊状遺構内における調査の進展にともなって、７世紀中葉の瓦類が出土し、また正殿的な建物が検出されるなど、今後久米評・久米郡の謎解明に向けて貴重な遺跡であることは疑いのない事実であるといえよう〔西尾幸則　1989，1991〕。なお、この回廊状遺構の性格については、斉明女帝が朝鮮出兵に際して立ち寄った仮宮ではないかという説が有力である〔松原　1991〕。



第４図　　久米地区の遺跡分布図　（S＝１：10,000）

〔文献〕

平井幸弘	1989	「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室
長井数秋	1986	「先土器時代　松山平野の遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会
栗田茂敏	1989	「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会
小笠原好彦・森　光晴	1979	『来住廃寺』　松山市教育委員会
吉本拡・阪本安光	1981	「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
阪本安光・小林一郎	1981	「久米窪田Ⅳ・Ⅴ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』　愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
西田　栄	1986	「観音山古墳」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会
森　光晴	1986	「波賀部神社古墳」「二ツ塚古墳」「播磨塚古墳群」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会
西田　栄・森　光晴	1980	『松山市史料集　第１巻　考古編』　松山市
森　光晴	1981	「前川Ⅰ・Ⅱ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』　愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
西尾幸則	1991	「久米高畑第11次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
	1989	「久米高畑第７次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会
松原弘宣	1991	［熟田津と古代伊予国～久米地域を中心に～」　松山市考古館第１回講演会『熟田津と来住台地～７世紀における西瀬戸内海地域～』資料

来住台地周辺の遺跡一覧（資料調査・表作成　宮内慎一・高橋　恒）

－凡例－

(1)　一覧表に使用した資料は、1990年12月時点のものである。

(2)　試掘調査については、松山市教育委員会が実施したものに限った。

(3)　試掘調査・本格調査の面積は申請（対象）面積である。

(4)　遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。

遺構欄＝竪穴：竪穴式住居址、周溝：周溝状遺構、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴址。

遺物欄＝縄：縄文土器、弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器。

(5)　実施及び期間は調査の開始時の年・月を示す。

(6)　主体欄の略記は以下である。県教委：愛媛県教育委員会、県埋文：㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター、市教委：松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

(7)　番号欄のナンバーは、「第４図」中のものを指す。

表２　来住・久米地区の発掘調査一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	遺　構
1	鷹ノ子町遺跡１次調査	鷹ノ子町943	古～中	掘立・溝・土壙・柱・木棺墓
2	古屋敷Ｃ遺跡	久米窪田町 844 － 1	弥～中	溝
3	来住町遺跡１次調査	来住町519	弥～古	溝・柱
4	来住町遺跡３次調査	来住町 534 － 1	弥～古	掘立・溝・柱
5	久米高畑遺跡８次調査	南久米町	弥～古	掘立・溝・土壙・柱
6	久米高畑遺跡	来住町883	中代	掘立・柱
7	〃　２次調査	南久米町 577 －13	弥～中	河川・溝・土壙・柱・井戸
8	〃　３次調査	来住町898	弥～古	竪穴・土壙・柱
9	〃　４次調査	来住町1149	弥～古	溝・土壙・柱
10	〃　５次調査	南久米町795	弥～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
11	〃　６次調査	来住町1159，1160	弥～古	土壙・柱
12	〃　７次調査	南久米町569	弥～中	溝・土壙・柱
13	〃　９次調査	来住町918	弥～古	掘立・竪穴・柱
14	〃　10次調査	南久米町 782 － 1	弥～古	掘立・溝・土壙・柱・周溝・壺棺
15	〃　11次調査	南久米町758	弥～中	掘立・竪穴・溝・土壙・柵・柱
16	〃　12次調査	南久米町	古～中	掘立・溝・柵・柱
17	〃　13次調査	南久米町864	弥～中	土壙・井戸
18	〃　14次調査	来住町846	弥～中	竪穴・溝
19	〃　15次調査	来住町867	弥～古	土壙・柱
20	〃　16次調査	南久米町727	古～中	柱
21	〃　17次調査	南久米町723	古～中	掘立・溝・柱
22	〃　18次調査	来住町909	古～中	柱
23	〃　19次調査	来住町 891 － 1	古～中	掘立・溝・柱
24	〃　20次調査	来住町1156－ 5	弥～中	掘立・溝・土壙・柱
25	来住町遺跡２次調査	来住町535	弥～古	溝・土壙・井戸
26	鷹ノ子新畑遺跡	鷹ノ子町 646 － 1	弥～中	掘立・溝・柱
27	南久米片廻り遺跡	南久米町564	弥～古	竪穴・柱
28	南久米片廻り遺跡２次調査	南久米町 534 － 1	縄～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
29	南久米北野遺跡	南久米町 411 － 3	古～中	掘立・柱
30	南久米北野遺跡２次調査	南久米町 195 － 1	古～中	土壙・井戸

遺　　物	面積(㎡)	期　　間	主　体	文　献	番号
土・鏡	289	′89. 4	市教委	⑥	1
弥・土・須・石庖丁	1,035	′89. 6	〃	⑥	2
弥・土・須	1,632	′89. 11	〃	⑤	3
弥・土・須・石斧・石鏃	773	′89. 11	〃	⑥	4
弥・土・須・石庖丁	240	′89. 2	〃	⑥	5
土・須	1,300	′85. 12	〃	④	6
弥・土・須・陶器・石庖丁・石鏃・石斧・石剣・木器	700	′87. 6	〃	⑤	7
弥・土・須	1,000	′87. 12	〃	⑤	8
弥・土・須・馬具・鉄器・石器	210	′88. 7	〃	⑤	9
弥・土・須・石斧・石鏃・鉄器・臼玉	1,707	′88. 10	〃	⑤	10
弥・土	40	′88. 11	〃	⑤	11
弥・土・須	148	′89. 1	〃	⑤	12
弥・土・須	560	′89. 2	〃	⑥	13
土・須	1,118	′89. 4	〃	⑥	14
弥・土・須	1,904	′89. 4	〃	⑥	15
弥・土・須	394	′89. 7	〃	⑥	16
弥・土・須	1,454	′89. 7	〃	⑥	17
弥・土・須	332	′89. 9	〃		18
弥・土・須	532	′89. 5	〃		19
弥・土・須	68	′89. 8	〃		20
弥・土・須	4,905	′89. 10	〃		21
須・瓦	137	′89. 12	〃		22
弥・土・須	511	′90. 1	〃		23
須	340	′90. 2	〃	⑥	24
弥・土・須・瓦・石庖丁・石斧	1,666	′89. 7	〃	⑥	25
弥・土・須	330	′89. 10	〃	⑥	26
弥・土・石庖丁・鉄鏃	920	′85. 5	〃	②・④	27
縄・弥・土・須・瓦・石庖丁・石鏃	901	′89. 2	〃	⑥	28
須・宋銭	1,020	′89. 5	〃		29
弥・土・須	386	′89. 8	〃		30

遺跡の概要

番号	遺　　跡　　名	所　在　地	時　代	遺　　構
31	南久米斎院遺跡	南久米町 635 － 2	弥～古	柱
32	南久米才歩行遺跡	南久米町 503 － 1	弥～中	溝・土壙・柱
33	沖台遺跡Ａ区	南久米町 438 － 1	中世	溝
34	沖台遺跡Ｂ区	南久米町 438 － 2	古～中	掘立・溝・柱
35	久米窪田森元遺跡	久米窪田町853,854-1	弥～古	掘立・溝・土壙・柱
36	久米窪田森元遺跡２次調査	久米窪田町861	古～中	溝・河川
37	来住廃寺跡寺域調査	来住町	弥～古	官衙関連遺構
38	来住廃寺８次調査	来住町 568 － 1	弥～古	掘立・竪穴・土壙・柱
39	〃　９次調査	来住町 582，583	弥～中	掘立・柱・石器工房址
40	〃　10～12次調査	来住町181	奈良	正殿的建物址・掘立・溝・柱
41	〃　13次調査	来住町557	古～中	竪穴・柱
42	久米小学校遺跡	鷹ノ子町20番地	古～中	掘立・土壙・柱
43	来住Ⅴ遺跡	来住町	弥～古	環濠状遺構・掘立・土壙・柱
44	久米窪田遺跡Ⅰ次調査	久米窪田町	縄～古	掘立・竪穴・土壙・柱
45	〃　Ⅱ次調査	久米窪田町	弥～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
46	〃　Ⅲ次調査	久米窪田町	弥生	竪穴・土壙墓
47	〃　Ⅳ次調査	久米窪田町834	弥～中	掘立・竪穴・柱・土壙墓
48	〃　Ⅴ次調査	久米窪田町	縄～中	掘立・竪穴・土壙・柱
49	久米窪田古屋敷遺跡Ａ・Ｂ区	久米窪田町 837 － 1	弥～古	土壙・柱
50	鷹ノ子遺跡	鷹ノ子町40番地	弥～中	溝・土壙・柱

参考文献

① 『松山市史料集　第１巻　考古編』松山市 1980
② 『松山市史料集　第２巻　考古編Ⅱ』松山市 1986
③ 『愛媛県史資料編　考古』愛媛県 1986
④ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会 1987
⑤ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989
⑥ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会 1991
⑦ 『鷹ノ子・樽味遺跡の調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
⑧ 『来住廃寺』松山市文化財調査報告書12　松山市教育委員会 1979

遺　　物	面積(㎡)	期　　間	主　体	文　献	番号
弥・須	318	′90. 1	〃		31
弥・土・須・瓦器・磁器・石器・鉄器・木器	679	′88. 10	〃	⑤	32
土・須	343	′89. 6	〃		33
土・須	230	′90. 8	〃		34
縄・弥・土・須	1,600	′87. 10	〃	⑤	35
須	1,223	′90. 10	〃		36
弥・土・須・瓦		′88. 11	〃	①：③ ⑤：⑧	37
弥・土・須	698	′89. 4	〃	⑥	38
弥・土・須・瓦・石鏃	520	′89. 10	〃	⑥	39
土・須・瓦			〃	⑥	40
須	103	′92. 2	〃		41
土・須	700	′78. 3	〃	②・③	42
弥・石剣・砥石・石棒	1,700	′76.	県教委	②・③	43
縄・弥・土	150	′77.	〃	②・③	44
土・須・硯・瓦・木簡	1,250	′77.	〃	②・③	45
弥	200	′77.	〃	②・③	46
弥・土・須・石庖丁・石斧・石鏃・砥石・鉄斧	1,400	′79.	〃	②・③	47
縄・弥・土・須・石庖丁・石斧・石鏃・砥石	1,800	′80.	〃	②・③	48
弥・土・須	2,000	′87. 1	市教委	⑤	49
弥・土・須・石庖丁・石斧・石鏃	962	′87. 7	愛媛大	⑦	50

表3　来住・久米地区の試掘一覧

番号	所在地	面積(㎡)	標高(m)	包含層	遺構	遺物	実施	主体	備考
1	来住町866	1,525	39,3				′87. 9	〃	
2	来住町518	872	40,2				′87. 9	〃	
3	久米窪田町792－4	409	45,0				′87. 9	〃	
4	鷹ノ子町65－2，3	985	42,5				′87. 10	〃	
5	鷹ノ子町141－3	499	40,0				′87. 11	〃	
6	南久米町567－1	509	32,5				′88. 3	〃	
7	南久米町551－1	737	33,5				′88. 3	〃	
8	鷹ノ子町154－3	495	50,0				′88. 5	〃	
9	鷹ノ子町1003－4	880	59,7			土・須	′88. 7	〃	
10	南久米町608－2	686	36,8		柱	土	′88. 7	〃	
11	来住町1394－1	1,216	33,5				′88. 7	〃	
12	南久米町531－1，2	1,697	32,0				′88. 8	〃	
13	久米窪田町873－1他	1,817	45,0				′89. 11	〃	
14	南久米町534－1	872	30,0	○	土壙・柱	土・須	′88. 11	〃	
15	鷹ノ子町60－1	463	43,0				′88. 12	〃	
16	南久米町781，783	651	34,0	○	溝・柱		′88. 12	〃	
17	来住町928他	826	36,1			土・須	′88. 12	〃	
18	南久米町782－1	1,118	34,0	○	土壙・柱	弥	′88. 12	〃	
19	南久米町661－8	10	40,3				′88. 12	〃	
20	久米窪田町920－1	279	42,6				′89. 1	〃	
21	久米窪田町330－3	429	48,8			土・須	′89. 7	〃	
22	鷹ノ子町180－1	821	48,8				′89. 7	〃	
23	来住町603－9	340	41,0	○	溝・柱	土・須	′89. 8	〃	
24	南久米町373－1他	1,584	38,5		溝・土壙		′89. 8	〃	
25	南久米町3－1，2	8,866	51,5				′89. 8	〃	
26	鷹ノ子町186－2	396	47,3		溝・柱	弥	′89. 9	〃	
27	南久米町686－1，2，9	900	40,0				′89. 9	〃	
28	久米窪田町475－1	1,178	44,3			土	′89. 9	〃	
29	鷹ノ子町648－1他	477	46,5	○	溝・土壙	弥・土・須	′89. 11	〃	
30	南久米町578－3他	2,355	34,0			土	′89. 11	〃	
31	久米窪田町859－1他	497	46,5	○	溝・土壙	土・須	′89. 11	〃	
32	南久米町534－1	872	30,0	○	土壙・柱	土・須	′89. 11	〃	
33	鷹ノ子町426－5，6	265	57,2				′90. 1	〃	
34	来住町557	102	39,9				′90. 1	〃	
35	南久米町182－2	454	37,2				′90. 2	〃	
36	来住町864	1,454	39,0				′90. 3	〃	
37	来住町798－1他	600	37,0	○	柱	弥・土・須	′90. 8	〃	
38	久米窪田町897－3	400	44,6			土・須	′90. 8	〃	
39	来住町517－1他	600	40,5	○	柱	土・須	′90. 8	〃	
40	来住町603－2	600	40,0		柱	土・須	′90. 8	〃	
41	南久米町567－2，4	830	33,0		土壙	弥・土・須	′90. 11	〃	
42	南久米町533－1他	4,563	30,0	○	土壙	弥・土・須	′90. 11	〃	
43	南久米町750，751	901	34,5		土壙・柱	土・須	′90. 11	〃	

第３章

鷹ノ子町遺跡

タカノコチョウ

－１次調査－

1．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1988（昭和63）年12月、太陽ホーム株式会社（伊藤詳正）より、松山市鷹ノ子町94－3番地における宅地開発に当たって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『129　鷹ノ子遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、これまでに縄文時代後期の久米窪田森元遺跡〔栗田茂敏　1989〕、弥生時代から古墳時代にかけての久米窪田遺跡〔阪本安光　1980〕、弥生時代から中世にかけての鷹ノ子遺跡〔宮本一夫　1990〕など、縄文時代後期～中世までの集落関連遺構が確認されている。

鷹ノ子遺物包含地は、周辺の遺跡に歴史時代に関連する遺跡が多く、来住廃寺（白鳳期創建）〔小笠原好彦他　1979〕や、来住遺跡、久米高畑遺跡（官衙関連遺構の可能性高い）〔西尾他　1989〕などがあり、同地域が古代の松山平野に於て、主要な集落地帯として存在していたことが近年の調査で明らかになっている。このように本遺跡周辺は、弥生時代から古墳時代にかけて集落が存在し、それをひき続いた形で、古代には官衙跡や来住廃寺が建造されたものと解釈される。これらのことなどから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、1989（平成元）年2月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層（1層）と柱穴を検出し、当該地に弥生時代から中世に至る集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・太陽ホーム株式会社二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世の当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、太陽ホーム株式会社の協力のもと1989（平成元）年4月10日に開始した。

(2) 調査組織

調 査 地　　松山市鷹ノ子町94－3

遺 跡 名　　鷹ノ子町遺跡1次調査

調査期間　　野外調査　1989（平成元）年4月10日～同年5月13日

調査面積　　289㎡

調査委託　　太陽ホーム株式会社　伊藤詳正

調査担当　　調　査　員　梅木　謙一

　　調査補助員　宮内　慎一・木下　公一・谷久　広之

作 業 員　古屋　明寿、扶川　博、吉田　智広、宮脇　和人、梅本　正則、提中　健仁
森永　純司、横山　茂、藤村　英樹、工藤　賢稔、亀山　泰昌、森田　利恵
藤沢　真美、西野　貴子、立木　佳代、越智美代子、他

２．層　位〔第７図〕

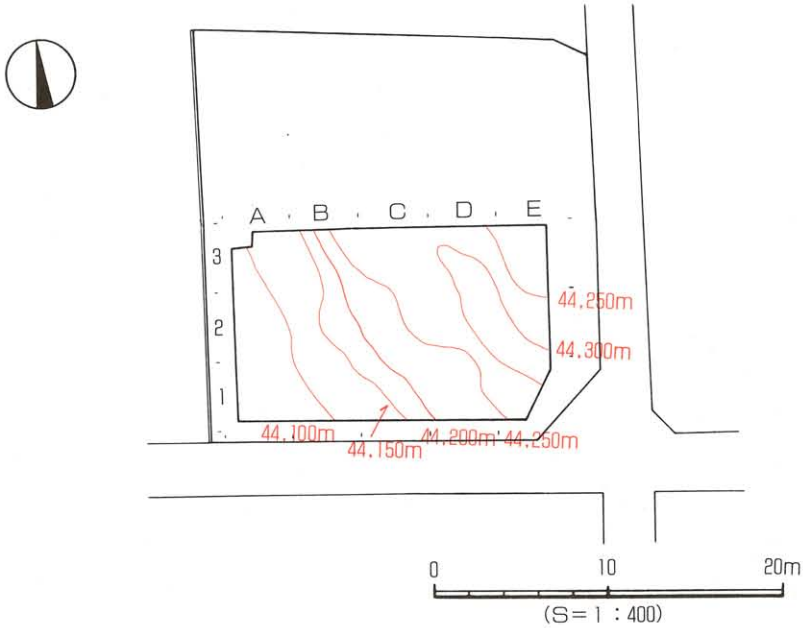
本遺跡は、松山平野南西部にそびえる分岐山塊の南麓、小野川右岸の中位段丘上、来住舌状台地東縁部（標高44.5m）に立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黄褐色土、第Ⅴ層灰白色粘土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～25cmの厚さを測る。第Ⅲ層は調査区北東部を除きほぼ全域でみられ、北東から南西に向けて緩やかな傾斜をなして堆積し、厚さは20～25cmである。弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第Ⅳ層（地山）、第Ⅴ層は無遺物層である。第Ⅳ層地山面は測量の結果、調査区北東部が最も高く、漸次東側と南西側に向けて低くなっている。

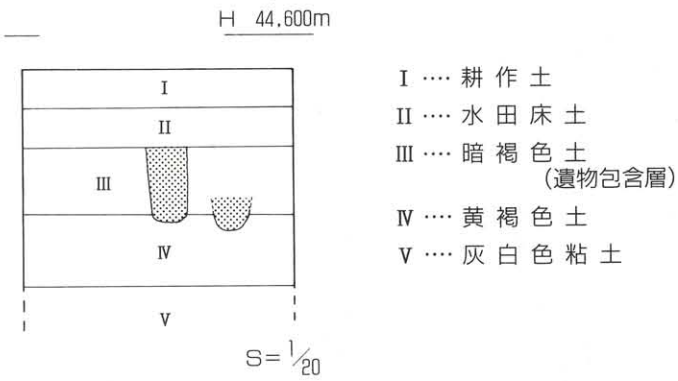
遺構はすべて第Ⅳ層上面で検出した。掘立柱建物５基（中世）、木棺墓１基（古代）、溝状遺構３条（中世１条，時期不明２条）、土壙５基（中世３基，時期不明２基）、柱穴277基（掘立柱建物を含む）他を確認した。ただし、検出遺構の深さから考えると、本来は第Ⅲ層以上から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。

なお、調査にあたり調査区内を４m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、南から北へ１・２・３とし、第６図に示すようにＡ１・Ａ２・・・Ｅ３とグリット名を呼称した。調査は廃土置場の都合上、まずＡ区・Ｂ区・Ｃ区西半部を対象に行い（調査作業上仮に西調査区）、つづいてＣ区東半部・Ｄ区・Ｅ区（仮に東調査区）について調査を実施した。

第５図　調査区位置図　（S＝１：5,000）



第 6 図　　調査地測量図



第 7 図　　基本層位図

３．調査の概要（遺構と遺物）

本調査では、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。弥生時代の遺構は検出されなかったものの、第Ⅲ層包含層中より弥生土器片が数点出土している。古代の遺構は木棺墓（ＳＫ３）を検出した。また中世の遺構は掘立柱建物址５棟、土壙３基、溝状遺構１条を検出した。

(1)　古代の遺構と遺物

本調査における古代の遺構は、土壙（ＳＫ３）があげられる。

ＳＫ３（第９図）　調査区内において地山面の最も高い北東隅Ｅ３区に位置する。平面形は東西に長い隅丸長方形でやや西側に広がっている。規模は床面で長さ185cm、幅70～80cm、深さは西側で約12cmを測る（上部は削平）。床面は西側から東側へ傾斜をなし、その比高差は約５cmである。近現代の造成工事等のため遺構上部は削平されてはいたが、床面の東側にてわずかではあるが木口痕跡を確認した。覆土は上層部では褐色土（黄色土混り）が、床面直上では黒色粘質土がみられた。

遺物は黒色粘質土より和鏡一面、褐色土（黄色土混り）より土師器の鍋１点、土師器の坏１点、釘６点が出土した。和鏡は遺構ほぼ中央部の床面直上の位置でこなごなに割れた状態で出土した。また土師器の鍋は遺構西端でその一部を欠いた状況で、土師器の坏はほぼ完形の状況で出土した。釘は遺構の東西主軸を中心にほぼ左右対称の位置で出土した。和鏡は八陵鏡で直径約7.4cm、厚さ２mmであり鏡背に草文をもっている。

時期：本土壙は出土遺物より10世紀代の木棺墓と考えられる。

古代の遺物　包含層中より、須恵器・土師器が出土している。身受けのかえりを有する坏蓋（第12図８・11・12）、口唇部を折り曲げ、身受けのかえりを有さない坏蓋（第12図10）、高台を有する須恵器の坏身（第12図15～17）、壺、甕、土師器の坏身他である。

(2)　中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物址５棟、溝１条、土壙３基を確認した。

１）掘立柱建物址　５棟：１～５号建物（第10・11図　表６）

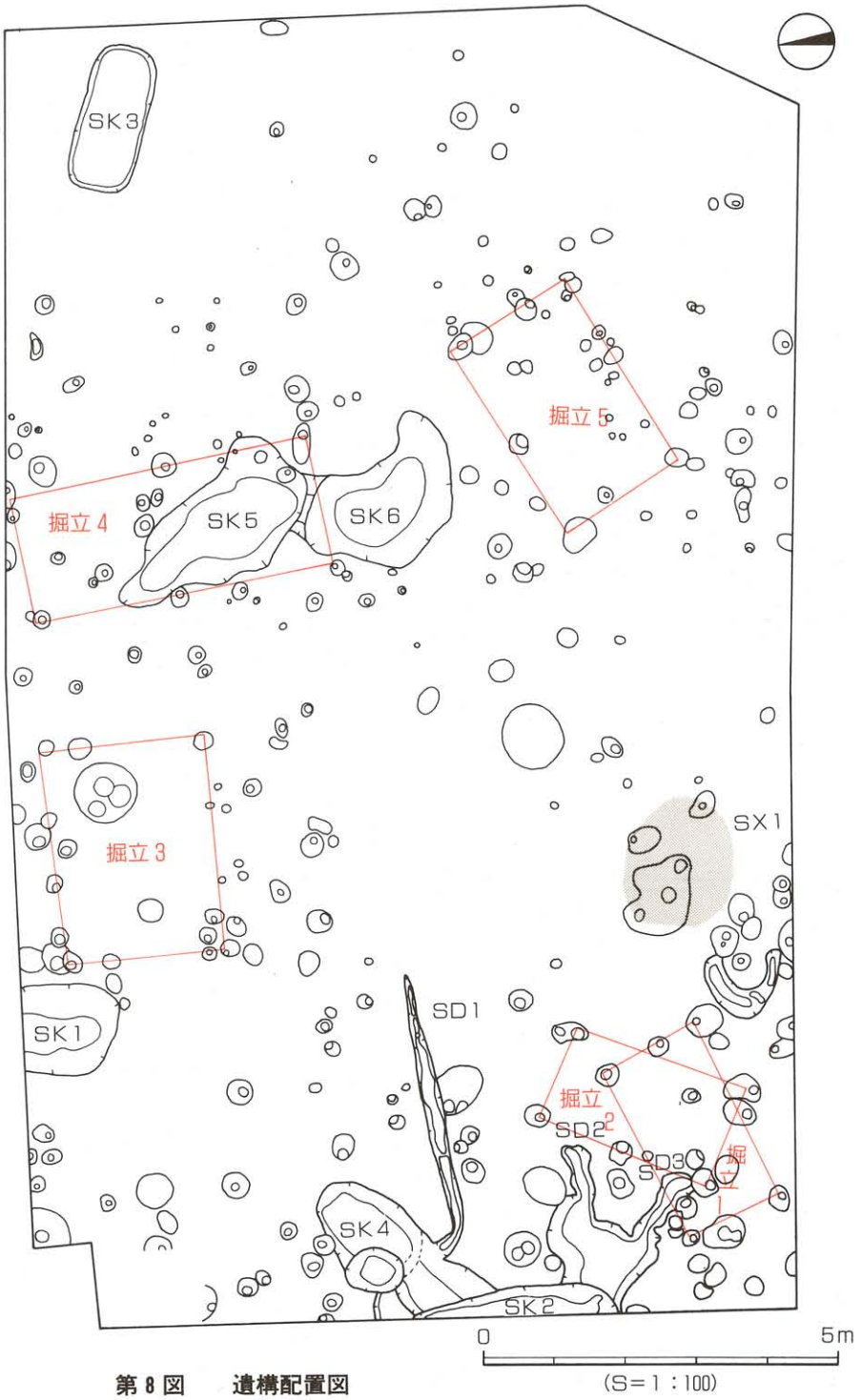
１間×２間、１間×３間の規模で、方位・覆土により三つのグループに分類される。

Ａ類　東西棟で、覆土が褐色土であるもの……２号

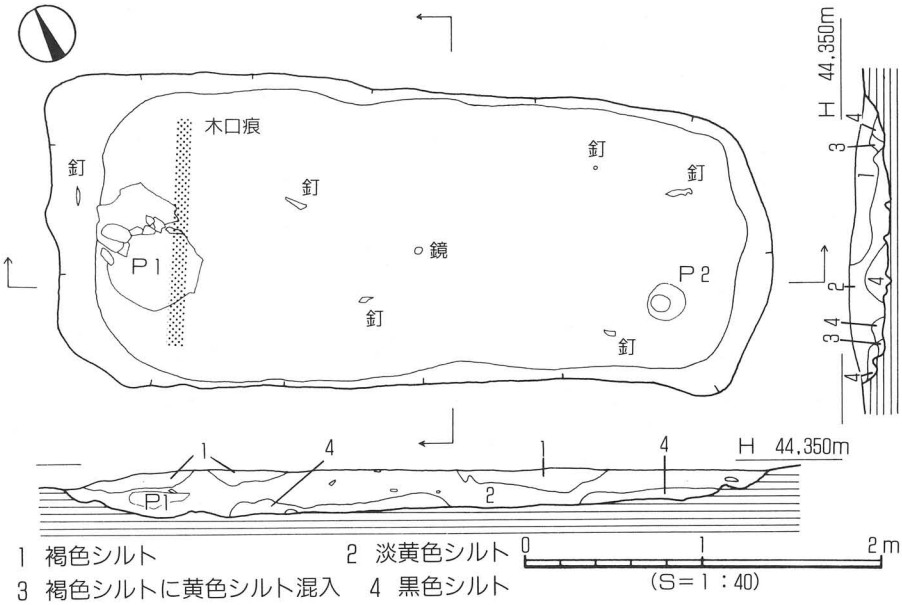
Ｂ類　東西棟で、覆土が暗褐色土であるもの……１，３，４号

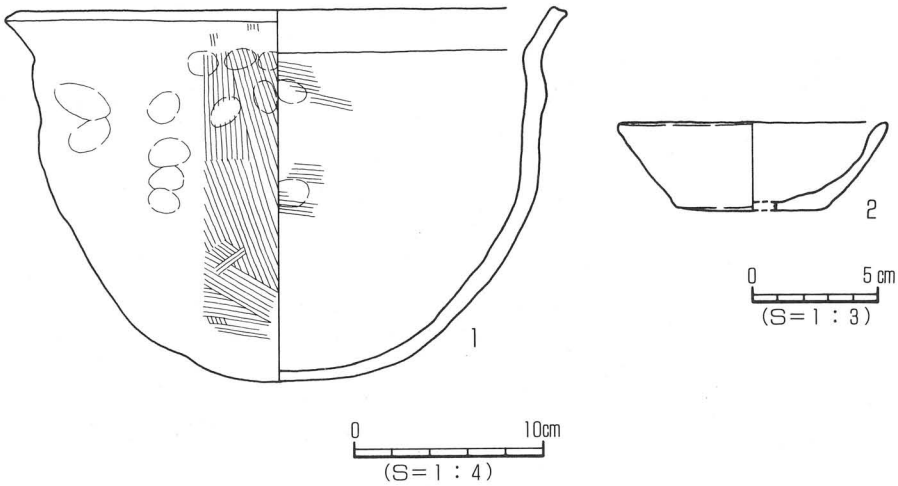
Ｃ類　南北棟で、覆土が暗褐色土であるもの……５号

１号建物と２号建物は、柱穴の切り合いより、２号建物が１号建物に先行することを確認した。ただし、その時期差は両建物址柱穴から明確に時期決定できる遺物の出土がないため


SK3
掘立5
掘立4
SK5
SK6
SX1
掘立3
SK1
SD1
掘立
SD2
SD3
掘立
SK4
SK2
0
5m
(S=1：100)

第 8 図　　遺構配置図





第９図　　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図

判断できなかった。C類の5号建物址は、ＳＫ５，６と重複するが、前後関係は判断できなかった。

5号建物址は、柱穴の平面形は楕円～隅丸方形をなし、規模は40×35cm、深さ35cmを測る。他の4棟と比較すると、柱穴間が長く、柱穴掘り方も深いこと等より、異なった時期及び性格をもつ建物である可能性が考えられる。

本調査検出の掘立柱建物址の時期は、柱穴内より中世の土師器片がわずかに出土していることより中世期ないし中世以降に造営されたものであろう。

各建物に関する詳細は表6で示す。

2）溝状遺構　1条：ＳＤＩ　（第8図　表4）

ＳＤＩ　調査区西端Ａ２～Ｂ２区に位置する。西端は土壙ＳＫ４の一部と思われる部分に接し、東端は途中で消失している。規模は、幅約20cm、深さ8cm（西端）を測る。断面は「U」字状を呈している。埋土は褐色土の単一層である。基底面は東から西に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差は約3cmである。遺物はごくわずかであり時期特定は難しいが出土遺物より中世の溝と考えられる。しかしながら、その性格は不明である。

3）土　壙　3基：ＳＫ１・２・４　（第8図　表5）

土壙は、平面形態・覆土により2分類できる。

a類　楕円形で、覆土が褐色土であるもの……ＳＫ１，４

b類　楕円～隅丸方形で、覆土が暗褐色土であるもの……ＳＫ２

ＳＫ１　調査区北東部Ｂ３区に位置し北壁は調査区外へ続く。南北幅及び東西現存幅120cmを測るが、遺構の検出状況から南北に長い楕円形を呈するものと考えられる。断面は舟底状を呈し深さは20cmを測る。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

ＳＫ４　調査区西端Ａ２区に位置し、長短140×120cmを測る楕円形土壙である。断面舟底状を呈し深さは20cmを測る。ＳＫ１，ＳＫ４とも覆土が褐色土で、規模もほぼ同じである点から、その性格は不明であるが、同じ目的で使用されたものと考えられる。

ＳＫ２　調査区西端中央部Ａ２区に位置する。溝ＳＤ２，ＳＤ３の合流した部分と切り合うが、その前後関係は明確にできなかった。西壁は調査区外へ続き現存幅南北280cm、東西50cmを測る。遺構の状況から平面形は楕円形もしくは隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは南端で15cmを測り、床面はわずかに南側に向かって低くなっている。規模や埋土の違いにより、ＳＫ１，ＳＫ４とは性格を異にするものであろうと推測される。出土遺物や覆土が包含層と同じ暗褐色土であることから中世の遺構と考える。

(3) その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は277基である。いずれも第Ⅳ層上面での検出である。埋土の違いにより少なくとも３分類される。

ⓐ類　覆土が黒褐色土であるもの……７基

ⓑ類　覆土が褐色土であるもの……２基

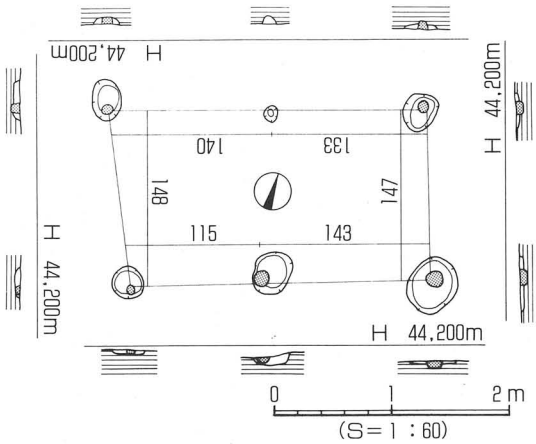
ⓒ類　覆土が暗褐色土であるもの……198基

ⓐ類は調査区全体に散在し、ⓑ類は調査区南西部に多く、ⓒ類は調査区全面にみられた。

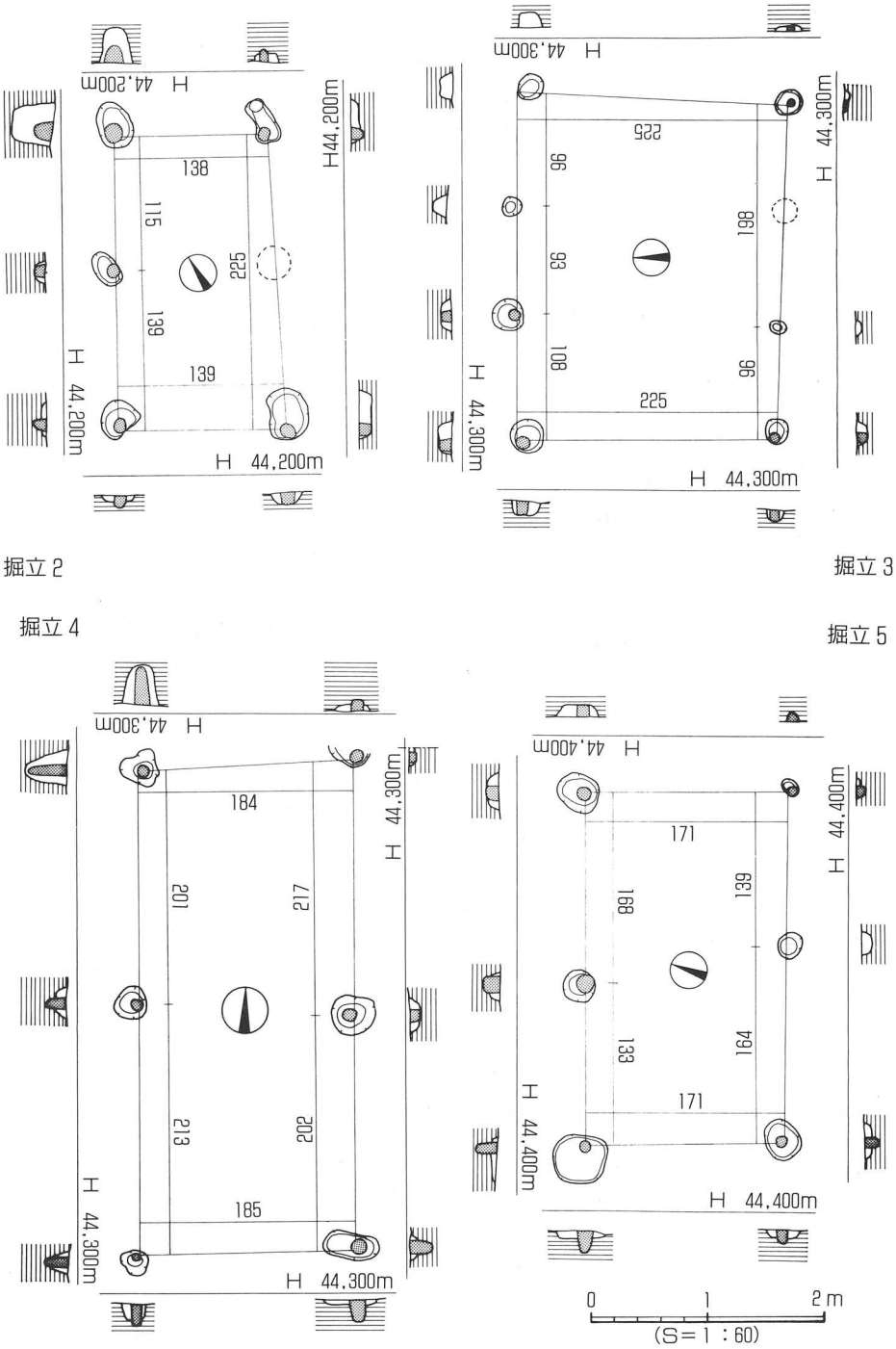
各々の柱穴の造営に時期差がうかがわれるが、柱穴内からの遺物の出土はわずかであり、明確には判断しえない。

ＳＸ１　調査区南壁中央部Ｂ１区の包含層中及び第Ⅳ層（地山）上面にて多量の土師器が出土した。調査区全域を通じて、この地区にのみ遺物の集中がみられた。土師皿は幾つかのものが重なった状況で出土している。出土品は完形にちかいものが多い。また、出土状況より調査区南外には、この土器溜りの延長がある可能性が高い。遺物（第13図）

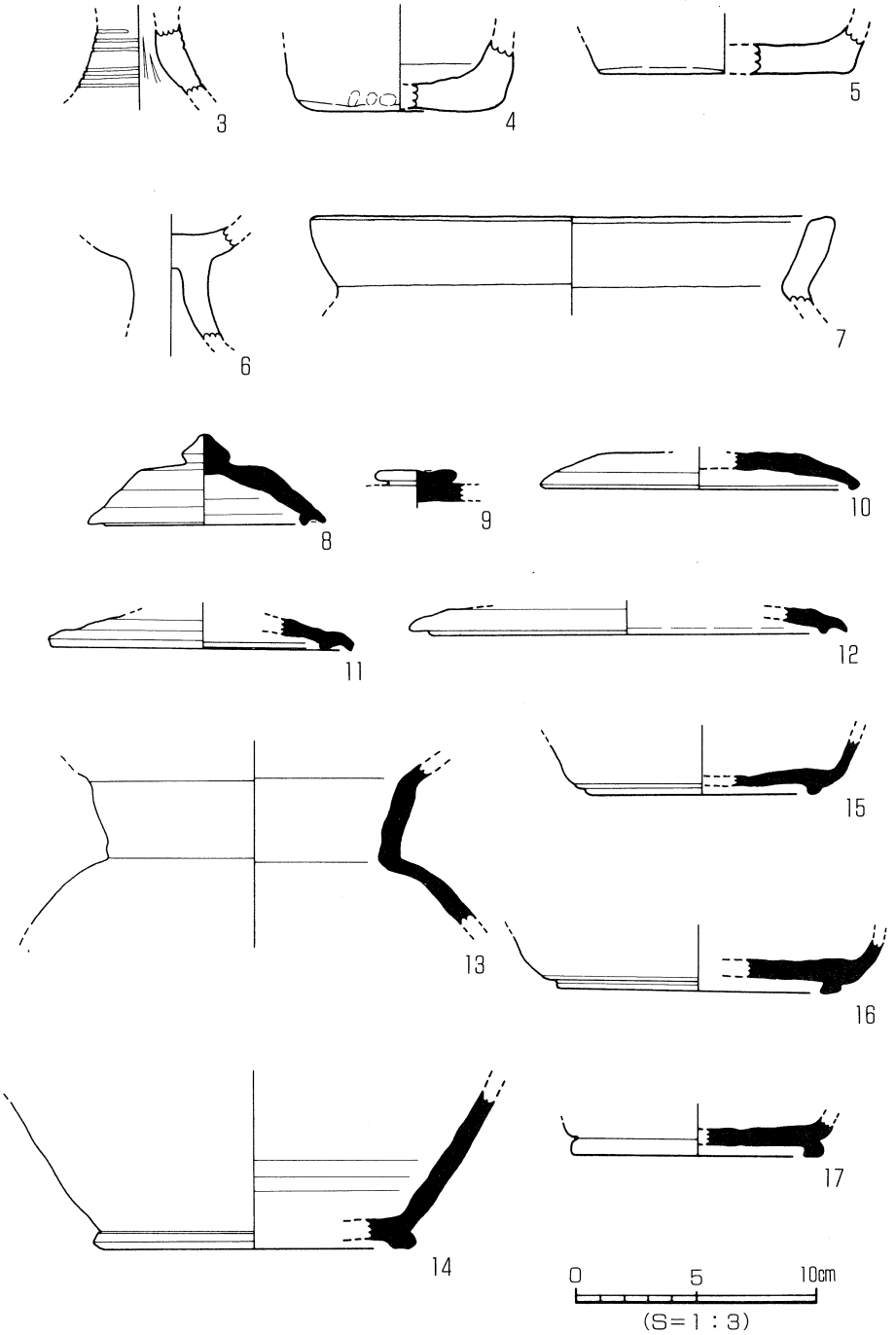
その他　溝ＳＤ２，ＳＤ３、土壙ＳＫ５，ＳＫ６などの遺構が検出されたが、その時期や性格は不明である。各遺構に関する詳細は表４・５に記す。



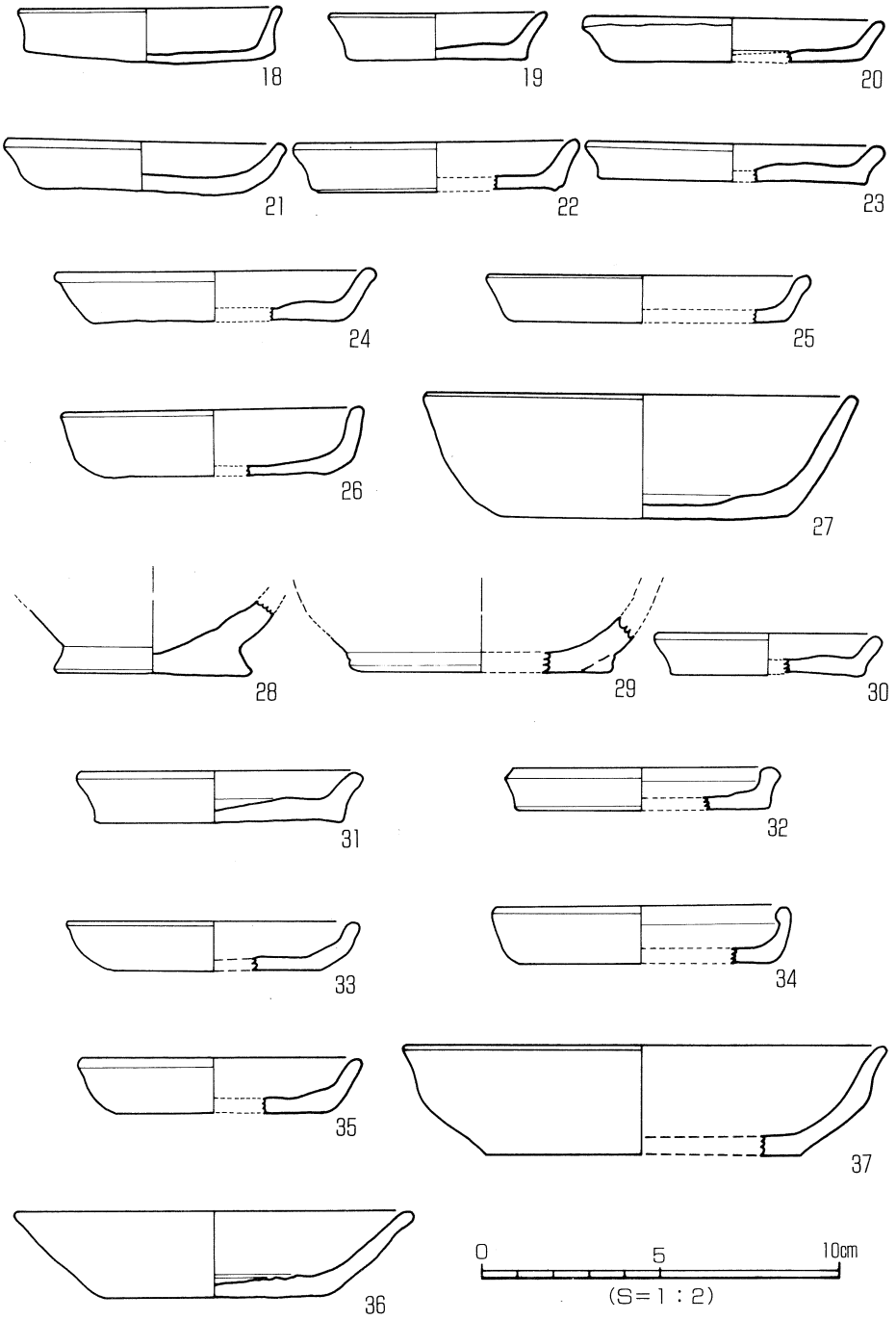
第10図　掘立１測量図



第11図　　掘立 2 ～ 5 測量図



第12図　　包含層出土遺物実測図①



第13図　　包含層出土遺物実測図②

４．小　　結

今回の調査においては、弥生時代・古代・中世の遺構と遺物を確認することができた。

弥生時代　遺構は検出されず、包含層中より弥生土器片の出土が数点みられただけである。

古代　遺構・遺物が認められる。遺構は土壙ＳＫ３（木棺墓）の検出であり、遺物は包含層中及び遺構内より須恵器（坏蓋，坏身，壺，甕）・土師器（鍋，坏身）等が出土している。今回の調査で特筆すべきは木棺墓（ＳＫ３）の検出である。和鏡一面と数点の遺物の出土がありその造営時期は平安時代後期（10世紀代）と考えられる。松山平野においては古代の木棺墓の検出は例が少ない。本例は松山平野の古代墓研究の基礎的資料となるものであり、かつ重要な資料といえるだろう。

古代には、本遺跡周辺において白鳳期創建の来住廃寺や、官衙関連遺構である来住遺跡、久米高畑遺跡などが知られている。今回の調査で古代の墓や遺物が確認されたことは、来住周辺が古代の松山平野の中心的位置を占めていた時期、本遺跡を含む、来住台地東部地域は土地利用が活発化したことを想定させるものである。

中世　掘立柱建物址５棟、土壙３基及び安定した包含層が確認されている。特に掘立柱建物址は、方位の異なる建物や、同規模の建物による建て替えなどがみられ、中世を通して長期にわたる建物の存続が考えられる。また、包含層中及び土器溜りから多量の土師器片が出土しており、今後周辺地域の調査が進んだ時点で、当地及び周辺地域の土師器編年における参考資料となるであろう。

今回の調査で、鷹ノ子地区（来住台地北東部地域）における古代から中世の集落構造の一端を解明することができた。古代における木棺墓の存在や、長期にわたる中世集落の存在である。これらのことは、当地域における古代から中世の集落構造を考えるうえで好資料となるものである。

〔文献〕

小笠原好彦・森　光晴他　1979　『来住廃寺』　松山市教育委員会

栗田茂敏　1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

阪本安光　1980　『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　愛媛県教育委員会　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

西尾幸則・池田　学　1979　「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

西尾幸則・池田　学　1991　「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会

宮本一夫　1990　『樽味・鷹子遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例） 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法 量 欄 （ ）：復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良、△→不良。

表4 溝 一 覧

溝(SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ（m）	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A2～B2	U字状	4.0× 0.2×0.08	褐 色 土	土師		中 世
2	A1	皿 状	0.6× 0.2×0.10	褐 色 土			不 明
3	A1	皿 状	1.0× 0.2×0.12	褐 色 土			不 明

表5 土 壙 一 覧

土壙(SK)	地区	平面形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	B3	楕 円 形	舟 底 状	1.25×1.25×0.20	褐 色 土	土師		中 世
2	A2	楕 円 形	舟 底 状	2.80×0.50×0.15	暗褐色土	土師・須恵		中 世
3	E3	隅丸長方形	皿 状	1.85×0.80×0.12	褐 色 土	鏡・土師・釘	木棺墓	10 C
4	A2	楕 円 形	皿 状	1.40×1.20×0.20	褐 色 土	土師		中 世
5	C3	不 定 形	逆台形状	2.40×1.20×0.26	暗褐色土			不 明
6	D2	不 定 形	逆台形状	3.00×1.30×0.25	暗褐色土			不 明

表6 掘立柱建物址一覧

建物番号	規 模 (間)	桁 行 実 長(cm)	桁 行 柱間寸法(尺)	梁 行 実 長(cm)	梁 行 柱間寸法(尺)	床面積 (㎡)	時 期	備考
1	2×1	260(8.7)	4.7・4.0	150(5.0)	5.0	3.9	中世以降	
2	2×1	250(8.3)	4.7・4.4	140(4.6)	4.6	3.5	中世以降	
3	3×1	305(10.2)	3.7・3.1 ・3.4	220(7.3)	7.3	6.7	中世以降	
4	2×1	420(14.0)	7.4・6.6	190(6.3)	6.3	7.9	中世以降	
5	2×1	300(10.0)	4.7・5.3	176(5.8)	5.8	5.3	中世以降	

表７　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態 施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	鉢	口径 28.8 器高 19.6 底径 2.0	口縁部ゆるやかに折り曲げる。 口縁内面に　をもつ。	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ(6本/1cm)	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ→ヨコナデ 胴下—ナデ	・砂粒 ・◎	煤	6
2	坏	口径 10.6 器高 3.5 底径 5.9		ヨコナデ	㊐—ヨコナデ 他ナデ	・密 ・◎		

表８　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態 施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
3	高坏	残高 4.0	脚柱上部に体の細沈線を施す。 脚柱内面にシボリ痕あり。	ヨコナデ→施文		・砂粒 ・◎	Ⅲ層	
4	壺	底径(7.5)	平底の底部。外面に指頭痕あり。内面の調整雑。	ナデ	磨滅の為不明	・砂粒 ・◎	SP 185	
5	壺	底径(10.0)	平底の底部。底部外面凹凸が著しい。	磨滅の為不明	ナデ	・砂粒 ・◎	Ⅲ層	
6	高坏	残高 4.8	組み合せ技法。坏部充塡法。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎	Ⅲ層	
7	甕	口径(26.0)	内湾してたちあがる口縁部。 口頸部境に稜をもつ。	口端—ヨコナデ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒 ・◎	Ⅲ層	
8	坏蓋	口径(8.0) 器高(3.8)	小形の坏蓋。かえりは口縁端部より下方にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	6
9	蓋	残高 1.3	扁平のつまみ。つまみ上部はわずかに凹みをもつ。	ヨコナデ	ナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
10	坏蓋	口径(10.2)	口縁端部は内側にわずかに突出する。	天　回転ヘラケズリ ㊐　ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒 ・◎	Ⅲ層	
11	坏蓋	口径(12.4)	かえりのつく坏蓋。かえりは口縁端部と同じ高さ。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層 自然釉	
12	坏蓋	口径(16.2)	かえりのつく坏蓋。かえりは口縁端部よわずかに下方にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
13	壺	頸径(12.0)	頸部内面には自然釉が付着。	ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒 ・◎	Ⅲ層	
14	壺	底径(11.9)	高台付長頸壺の底部脚端部わずかに外傾	胴—回転ヘラケズリ 底—ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	6
15	坏身	底径(9.6)	高台付の坏身。底部外面回転ヘラ切り痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	

出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態 施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
16	坏身	底径(11.6)	高台付。坏身。	ヨコナデ	ナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
17	坏身	底径(10.2)	高台付坏身か脚端面は垂平。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
18	Ⅲ	口径 7.2 器高 1.5 底径 7.0	不安定な平底。外反してたち上がる口縁部。口縁部丸い。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	
19	Ⅲ	口径(11.2) 器高 2.4 底径(6.4)	安定した平底。外反してたち上がる口縁部。口縁端部細く丸い。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・○	Ⅲ層	
20	Ⅲ	口径 8.5 器高 1.2 底径 7.0	不安定な平底。わずに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	
21	Ⅲ	口径(7.9) 器高 1.4 底径(6.8)	不安定な平底。底部に糸切り痕と板目痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り→板目	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	6
22	Ⅲ	口径(8.0) 器高 1.4 底径(6.6)	平底。糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	SX1	
23	Ⅲ	口径 8.4 器高 1.0 底径 7.5	やや凹みぎみの平底糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	
24	Ⅲ	口径(9.0) 器高 1.4 底径(7.0)	やや凹みぎみの平底糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り→板目	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	
25	Ⅲ	口径(9.0) 器高 1.3 底径(7.7)	丸みのある平底。糸切り痕あり。口縁内面にやや面をもつ。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	SX1	
26	Ⅲ	口径(8.5) 器高 1.8 底径(6.2)	不安定な平底。糸切り痕と板目痕あり。	㊞—板目 磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎	SX1	
27	坏	口径 12.2 器高 3.5 底径 8.0	不安定な平底。糸切り痕あり。底部内面は凹凸状。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	SX1	
28	坏	底径(5.6)	高台付。	ヨコナデ	ナデ	・密 ・◎	SX1	
29	坏	底径(7.2)	直立に立ち上がる高台。板かきか(?)。	調整不明	調整不明	・密 ・◎	Ⅲ層	
30	Ⅲ	口径(6.0) 器高 1.2 底径(5.4)	やや凹みぎみの平底糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	調整不明	・密 ・◎	Ⅲ層	
31	Ⅲ	口径(7.6) 器高 1.4 底径(7.0)	平底。糸切り痕と板目痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕→板目	㊐—ヨコナデ ㊞—ナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	6
32	Ⅲ	口径(7.2) 器高 1.2 底径(7.0)	やや凹む平底。糸切り痕と板目痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕→板目	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	

出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態 施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
33	Ⅲ	口径(8.0) 器高 1.4 底径(9.0)	やや凹む平底。糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
34	Ⅲ	口径(8.2) 器高 1.6 底径(7.0)	平底。内湾してたち上がる口縁部。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
35	Ⅲ	口径(7.2) 器高 1.5 底径(6.6)	やや凹む平底。糸切り痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	
36	坏	口径(11.2) 器高 2.4 底径(6.4)	平底。ゆるやかに外傾する口縁部。底部内面は凹凸状。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	㊐—ヨコナデ ㊞—板目痕	・密 ・◎	Ⅲ層	
37	坏	口径(13.2) 器高 3.0 底径(8.6)	平底。糸切り痕。体部外面にゆるやかな屈曲部をもつ。	㊐—ヨコナデ ㊞—回転糸切り痕	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	6

第４章

久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
（クメクボタフルヤシキ）

1．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1988（昭和63）年９月、近藤正親氏より、松山市久米窪田町844－１における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『129鷹ノ子遺物包含地』内にあたり、これまでにも周辺地域で多くの調査が実施され周知の遺跡として知られている。同包含地内では、縄文時代後期の久米窪田森元遺跡〔栗田茂敏　1989〕、弥生時代から古墳時代の久米窪田遺跡〔阪本安光　1980〕、弥生時代から中世にかけての鷹ノ子遺跡〔宮本一夫　1990〕など、縄文時代後期から中世にかけての集落関連遺構が確認されている。

鷹ノ子遺物包含地のある来住舌状台地は、松山平野において有数の遺跡地帯であり、来住Ｖ遺跡（弥生時代前期～中期初頭の環濠）〔吉本拡　1981〕、来住廃寺跡（白鳳期創建）〔小笠原好彦　1989〕や、久米高畑遺跡（官衙関連遺構）〔西尾幸則・池田学　1989・1991〕等が知られている。特に同地域は古代の松山平野に於て、主要な集落地帯として存在していたことが近年の調査で明らかになっている。

これ等のことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1988（昭和63）年11月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・須恵器・瓦器を含む遺物包含層（二層）と、落ち込みを検出し、当該地に弥生時代～中世の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・近藤正親氏二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世の当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、大和ハウス工業株式会社の協力のもと1989（平成元）年６月５日に開始した。

(2) 調査組織

調 査 地　松山市久米窪田町844－１

遺 跡 名　久米窪田古屋敷Ｃ遺跡

調査期間　野外調査　1989（平成元）年６月５日～同年８月10日

調査面積　1,035.99㎡

調査委託　近藤　正親　　調査協力　大和ハウス工業株式会社

調査担当　松山市教育委員会文化教育課　　調　査　員　梅木　謙一

調査補助員　宮内　慎一

木下　公一

作業員　宮脇　和人、工藤　賢稔、扶川　　博、亀山　健一、亀山　泰昌、森永　純司
志賀　夏行、原田　英則、鎌田　譲二、山本　　圭、藤村　英樹、高橋　　恒
渡部　竜二、松田　　光、梅本　正則、田坂　嘉則、松岡　忠仁、森田　利恵
黒田　令子、立木　佳代、森田　晶子、栗林　千恵、立木　久恵

２．層　位（第16図）

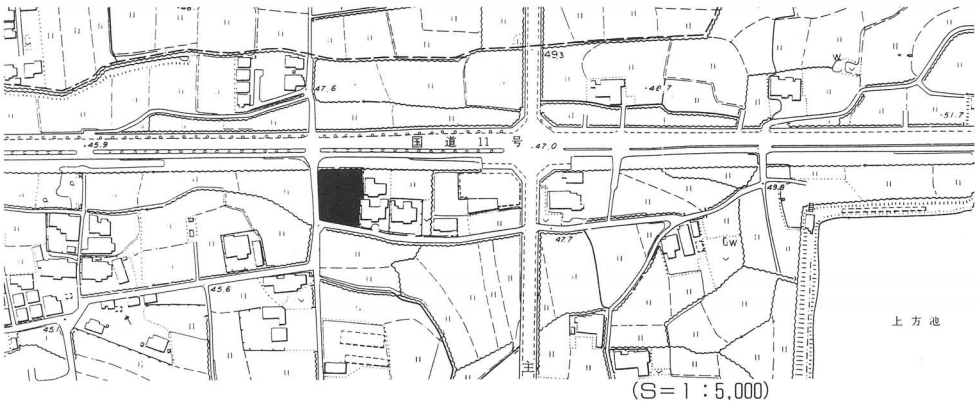
本遺跡は、松山平野北東部の低位段丘上、来住舌状台地南東縁部（標高47ｍ）に立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層明灰褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は地表下30～35cmまで開発が行われている。第Ⅲ層明灰褐色土は調査区全域でみられ、厚さ10～20cmの堆積で土師器・須恵器など古墳時代から中世の遺物を包含する。第Ⅳ層暗褐色土は調査区南西部を除いた地点でみられ、厚さ10～25cmの堆積で弥生時代の遺物を包含する。第Ⅴ層は無遺物層であり地山と呼ばれるものである。地山面はその標高を測量すると、調査区南東部が高く、漸次北西部に向けて低くなっている。

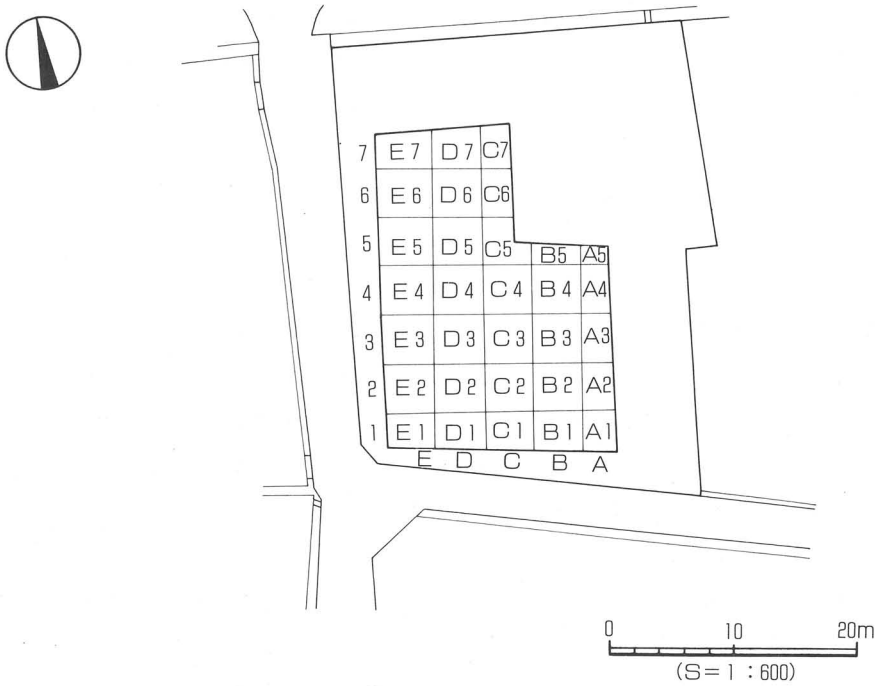
遺構は第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面での検出である。第Ⅲ層上面では中世の溝３条（ＳＤ１，２，３）を、第Ⅳ層上面では弥生時代の溝１条（ＳＤ４）を検出した。出土遺物、検出遺構から判断すると、第Ⅲ層は中世、第Ⅳ層は弥生時代以降に堆積したものと判断される。

また、調査区南西部では、第Ⅳ層が検出されず、第Ⅴ層上に第Ⅲ層が堆積しており、さらに、第Ⅲ層下面の標高を測量すると、調査区内においてほぼ同レベルを測ることから、第Ⅲ層堆積前、即ち中世以前に当地において何らかの耕地整備が行われた可能性を考える。

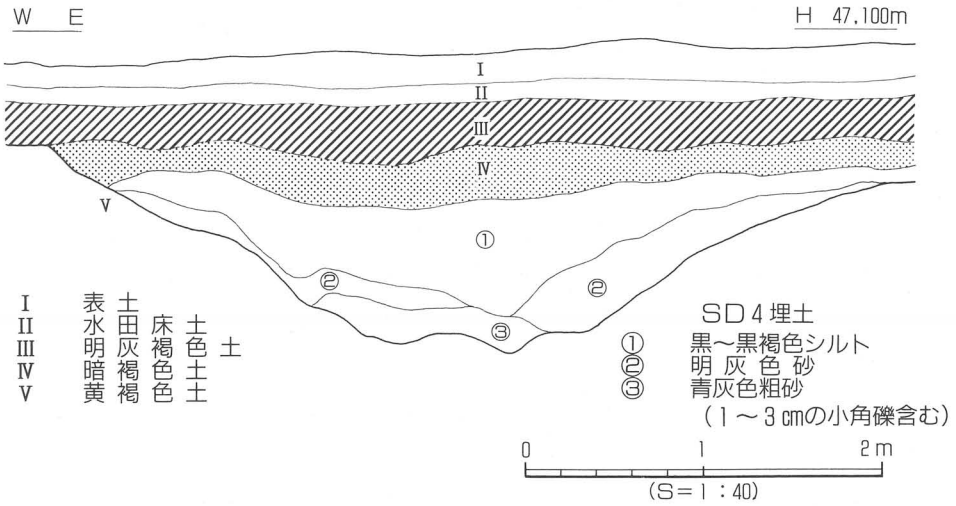
なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。４ｍグリットは東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅとし、南から北へ１・２・・・７として第15図に示すようにＡ１・Ａ２・・・Ｅといったグリット名を称した。



第14図　　調査区位置図



第15図　　調査地区割図



第16図　　基本層位図

３．調査の概要（遺構と遺物）

本調査における検出遺構は溝状遺構４条である。弥生時代の溝１条（ＳＤ４）、古墳時代の溝３条（ＳＤ１，２，３）である。遺物は遺構中及び包含層からの出土であり、第Ⅲ層明灰褐色土からは土師器・須恵器が、第Ⅳ層暗褐色土からは弥生土器他が出土している。

(1) 弥生時代の遺物と遺構

弥生時代の遺構は溝ＳＤ４が検出されている。

１）ＳＤ４（第17図）　調査区の南東～北西に位置し、南西部でほぼ直角に屈曲する。試掘トレンチのため南東隅の状況は明確ではない。断面はゆるやかなＵ字状を呈し、上場最大幅5.7m、深さ80cm、検出長34mを測る。埋土は、上層が黒色～黒褐色シルト、中層が明灰色砂層、下層が青灰色粗砂層であり三分層される。下層の青灰色粗砂層は１～３cm大の小角礫を含んでおり溝ＳＤ４が水利に関連する遺構であることを示す。また、上層と中層の境目に厚さ２～３cmの炭化物層が全面にみられた。残存する木片を観察したが、加工痕などはなく、自然木でありおそらく流木が炭化して形成されたものと考えられる。

出土遺物（第18・19図）　出土遺物は、遺物南側中央部の上層にて、2.8×1.6mの範囲で弥生時代前期後半の土器片（細片）が出土し、遺構北西部の下層下部にて1.0×6.0mの範囲で弥生時代中期末～後期初頭の土器が集中して出土した。この２地点以外では遺構北西隅部の下層にて石庖丁が１点出土しているが、その他の地点での遺物の出土はみられない。弥生時代前期後半の遺物は、そのほとんどが細片で散乱した状態で出土しており流れ込みの様相が強い。また、弥生時代中期末～後期初頭の遺物は土器片が大きく、あまり磨滅もみられず、群集して出土していることなどから破損品の一括投棄である可能性が高い。

時期：溝ＳＤ４は、出土遺物より弥生時代中期末～後期初頭の遺構と考えられる。

(2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は溝状遺構３条（ＳＤ１，ＳＤ２，ＳＤ３）が検出されている。同時期に併存していた可能性が高いが、出土遺物がわずかであるため確証はできない。

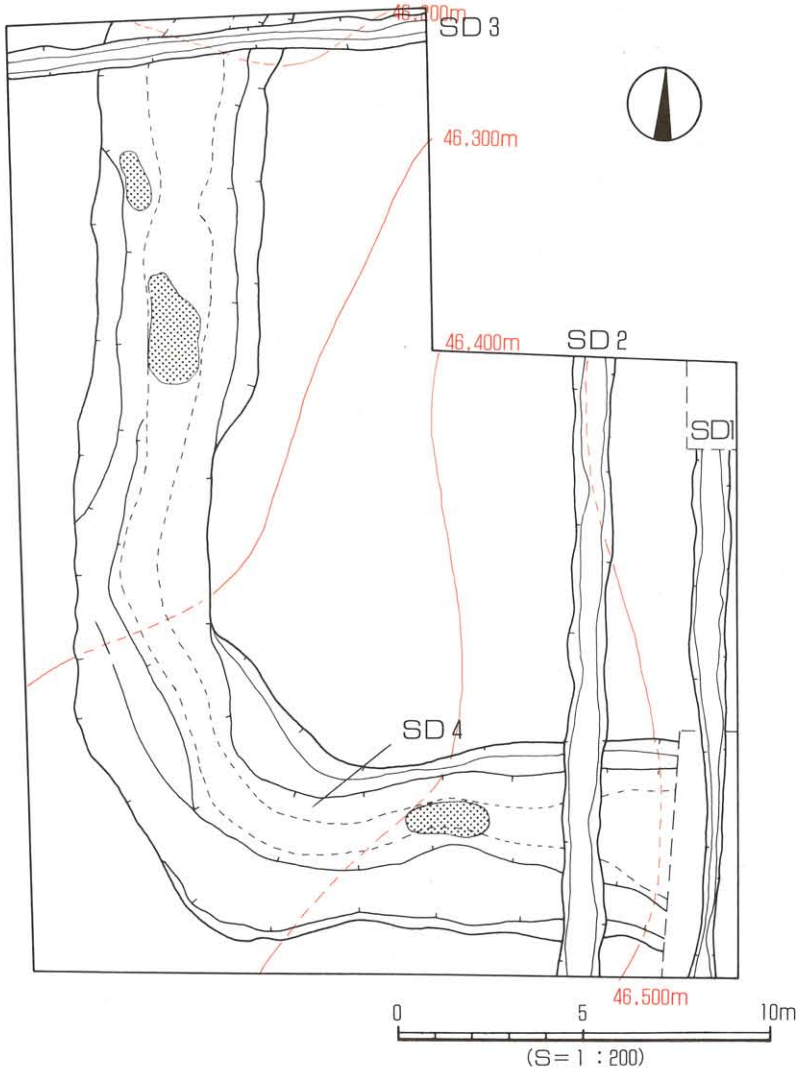
１）ＳＤ１　調査区東端Ａ１～Ａ５区に位置し、溝ＳＤ４を切っている。断面Ｕ字状を呈し、上場幅80cm、深さ20cm、検出長14mを測る。床面は平坦で、南から北に向けて傾斜しており、その比高差は14cmである。遺物はなく、年代の特定は難しいが、遺物包含層である明灰褐色土と同様な堆積土をなしており中世のものと判断される。ただし、その性格は不明である。

２）ＳＤ２　溝ＳＤ１の西約2.5m、Ｂ１～Ｂ５区に位置する。溝ＳＤ４を切り、溝ＳＤ１に対してほぼ平行である。断面はやや舟底状を呈し、上場幅80cm、深さ12cm、検出長

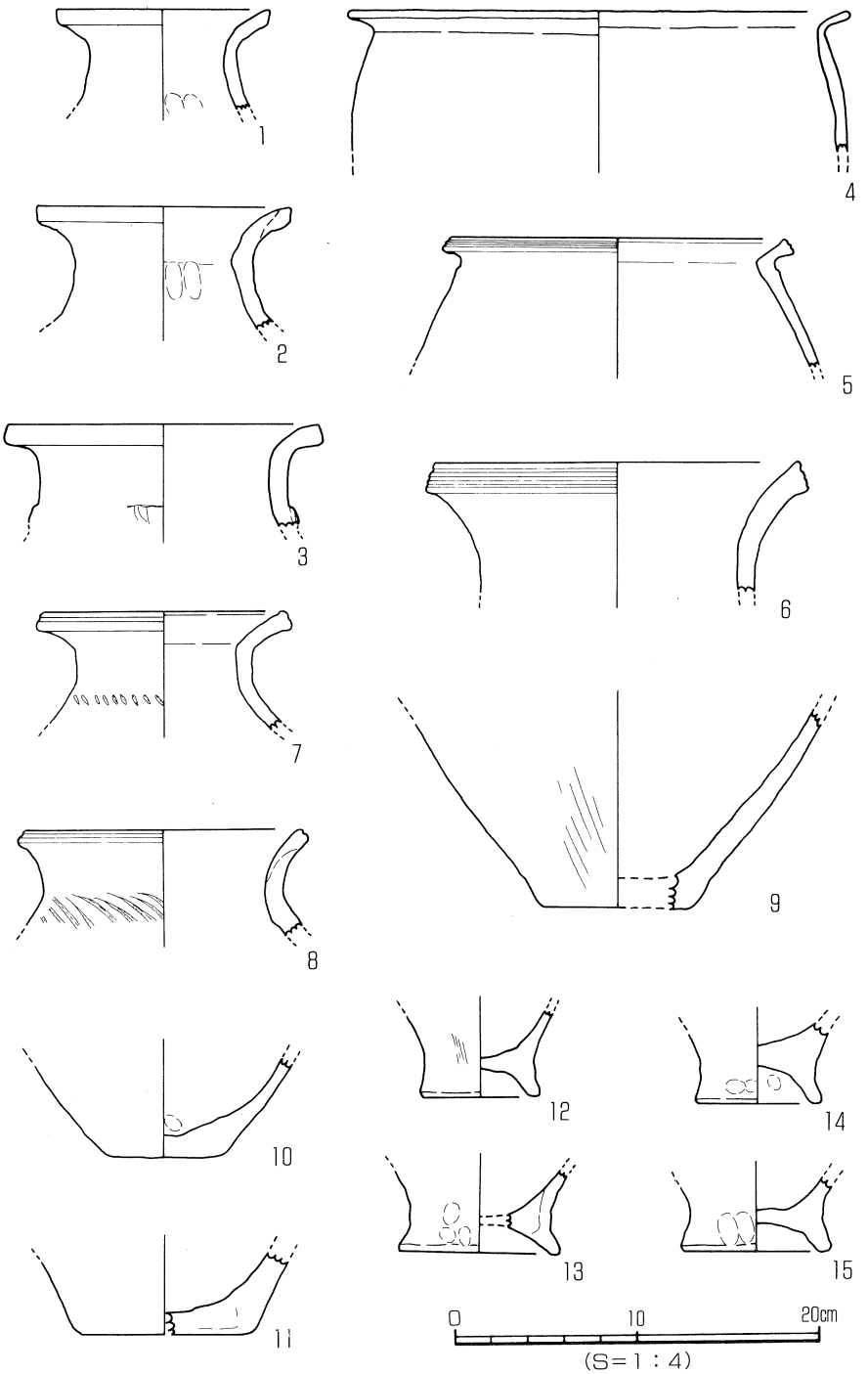
16.5mを測る。床面は、中央部がややへこんでおり、南から北に向けて緩傾斜をなし、その比高差は9㎝である。覆土は明灰褐色土である。遺物は床面付近の覆土中より土師器坏の破片が少量出土している。

3）ＳＤ３　調査区北端Ｃ７～Ｅ７区に位置し、溝ＳＤ４を切っている。断面Ｕ字状を呈し、上場幅80㎝、深さ12㎝、検出長11.5mを測る。床面は比較的平坦で、東から西に向けて緩傾斜をなしその比高差は8㎝である。覆土は明灰褐色土である。遺物は覆土中より土師器の細片が数点出土している。

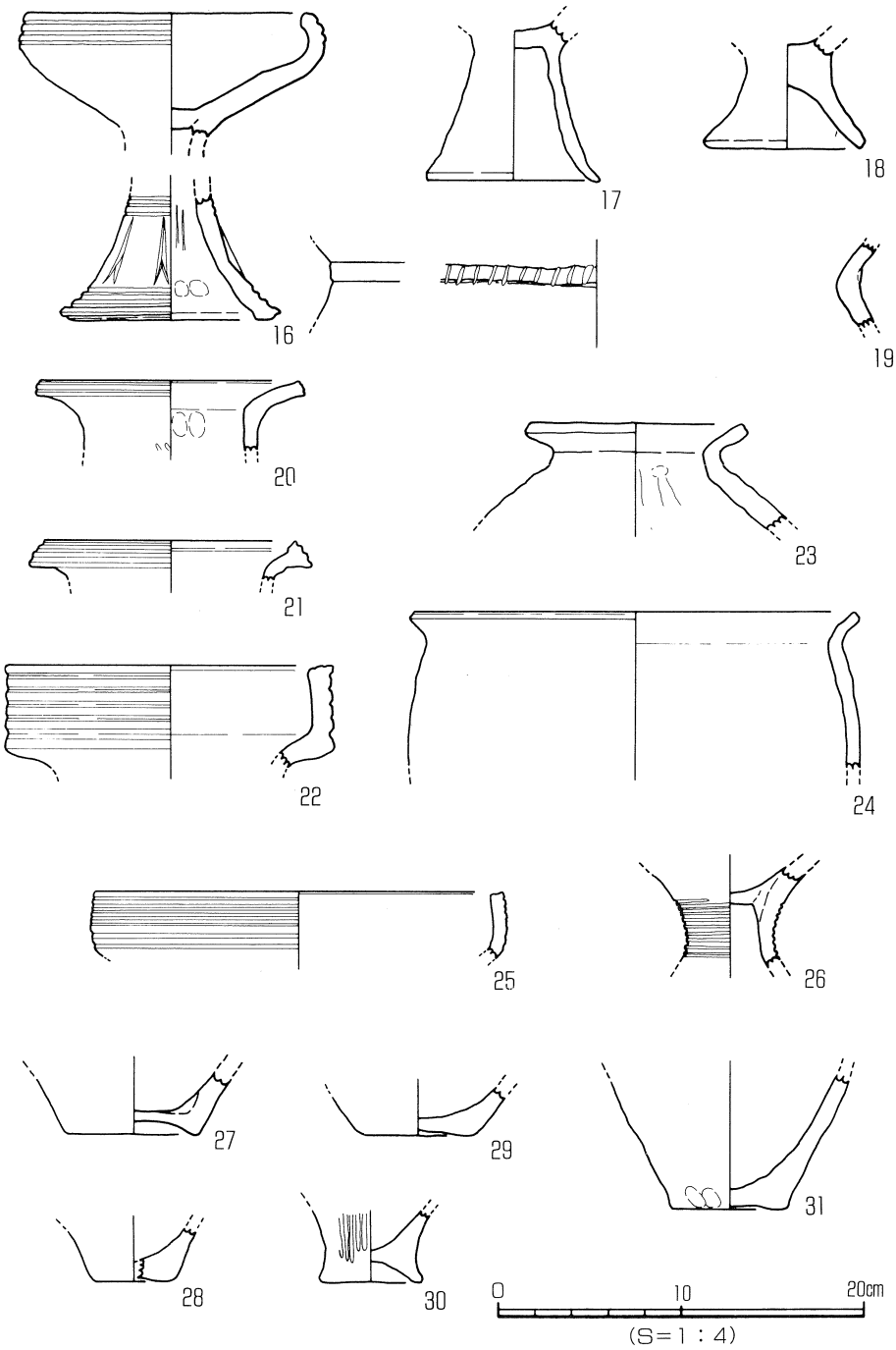
遺構の性格は不明であるが、形状・規模・埋土から判断するとＳＤ１、ＳＤ２と同様な使用目的を有する遺構ではないかと推測される。



第17図　　遺構配置図



第18図　　ＳＤ４出土遺物実測図①



第19図　　ＳＤ４出土遺物実測図②

４．小　　結

本調査においては、弥生時代と中世の遺構と遺物を確認することができた。

弥生時代は、中期後半の資料がまとまって出土した溝ＳＤ４が特筆すべき遺構である。弥生時代の小野川の低位段丘（来住舌状台地）上には、来住遺跡や久米窪田遺跡において、弥生時代前期から後期にかけての遺構や遺物が検出されており、弥生時代を通じて集落が継続的に営まれていたものと考えられる。今回の調査では、住居址は確認されなかったが、ＳＤ４の検出により、周辺地に住居址が存在することが推定される。弥生時代中期後半の集落関連遺構は、鷹ノ子遺跡において不定形状土壙２基（ＳＫ１，ＳＫ15）が報告されているだけであり、本例の溝ＳＤ４は当地域の弥生時代中期後半の集落研究にとっては貴重な資料となるものである。さらには、溝ＳＤ４が低位段丘（来住舌状台地）東縁部に位置することや、最大幅5.7ｍもの規模を有することから環濠である可能性が考えられないだろうか。松山平野における弥生時代中期後半の溝（環濠）は祝谷六丁場遺跡で確認されているだけであり、この点においても溝ＳＤ４はきわめて貴重な資料といえよう。今後、特に本調査区の北及び東側地域の調査が進めば溝ＳＤ４の全様が明かとなり来住台地の弥生集落の研究に大いに寄与するものであろう。

中世では溝状遺構３条（ＳＤ１～３）を確認した。ＳＤ１～３は、いずれも規模・埋土が酷似しており、同様な使用目的を有する遺構と考える。ただし、その性格は明確にできなかったものの、磁北に平衡していることは注目された。本調査周辺では鷹ノ子遺跡、久米小学校遺跡〔西尾幸則　1986〕、平井遺跡〔横山賢・重松佳久　1982〕等で中世の集落関連遺構が検出されている。本調査の遺構とそれらの遺跡・遺構との関係は現時点においては判断しがたいが、今後、本調査地周辺を含め調査が進めば、中世の景観が具体的に明らかになることは間違いないだろう。

〔文献〕

小笠原好彦・森　光晴他　1979　『来住廃寺』　松山市教育委員会

栗田茂敏　1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

阪本安光　1980　『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　愛媛県教育委員会　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

西尾幸則　1986　「久米小学校遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会

西尾幸則・池田　学　1979　「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

西尾幸則・池田　学　1991　「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会

宮本一夫　1990　『樽味・鷹子遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

横山　賢・重松佳久　1982　『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

吉本　拡　1981　『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　愛媛県

教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

遺構・遺物一覧

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）　縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3)　遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良、△→不良。

表９　溝　一　覧

溝(SD)	地　区　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	Ａ１～Ａ５	U字状	14.00×0.80×0.20	明灰褐色土		ＳＤ４を切る	中　世
2	Ｂ１～Ｂ５	舟底状	16.50×0.80×0.12	明灰褐色土	土師	ＳＤ４を切る	中　世
3	Ｃ７～Ｅ７	U字状	11.50×0.80×0.12	明灰褐色土	土師	ＳＤ４を切る	中　世
4	Ａ１～Ｅ７	U字状	34.00×5.70×0.80	黒褐色土	弥生・石庖丁		弥生中～後　初

表10　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(㎝)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径(11.6)	口縁端はナデによりわずかに拡張される。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○		
2	壺	口径(13.8)	口縁端面はナデにより面をとる。	口端—ナデ 頸—ヨコナデ	磨滅の為不明	・石・長(1～2) ・○		
3	壺	口径(16.8)	頸部に指頭圧痕をもつ凸帯を施す。口縁端に凹線文か？。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○		
4	甕	口径(27.4)	口縁部器壁は体部に比べ薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎		
5	甕	口径(18.4)	口縁部に２条の凹線文。口縁下はナデにより凹む。	口端—ヨコナデ→施文 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 胴—ナデ	・砂粒 ・◎		12
6	壺	口径(20.0)	口縁端面に２～３条の凹線文を施す。	口端—ヨコナデ→施文 頸—磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○		
7	壺	口径(12.8)	口縁端面に一条の凹線文。頸部にヘラによる「ノ」字状文。	口端—ヨコナデ→施文 磨滅の為不明	口—ヨコナデ 頸—ナデ	・石・長(1～3) ・○		12
8	壺	口径(15.0)	口縁端は拡張せずに擬凹線文を施す。施文は貝殻か板状工具。	口端—ヨコナデ→施文 頸—磨滅・施文あり	磨滅の為不明	・砂粒 ・◎		12
9	壺	底径(8.0)	やや凸レンズ状の平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○	黒斑	
10	壺	底径(5.4)	やや丸みのある平底。内面は指頭痕著しい。	磨滅の為不明	ナデ上げ	・砂粒 ・◎		
11	壺	底径(9.0)	やや凹みのある平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～4) ・○	黒斑	
12	甕	底径 6.4	直立ぎみに立ち上がる上げ底。体部の器壁は薄い。	胴—ハケ→ナデ 底—ナデ	ナデ	・密（石長・1) ・○	煤 黒斑	
13	甕	底径 8.8	くびれの上げ底。	胴—ミガキかナデ 底—ナデ	ナデ	・石・長(1～2) ・◎	黒斑	
14	甕	底径(6.8)	くびれの上げ底。器壁が厚い。	胴—ナデ・ヨコナデ 底—ナデ	磨滅の為不明	・砂粒 ・○		
15	甕	底径 7.4	くびれの上げ底。器壁が厚い。	胴—ナデ 底—ナデ	不明	・石・長(1～3) 金 ・◎	煤	
16	高坏	口径 10.1 底径(10.8)	脚端部に凹線文１条。柱上部細沈線３条。矢羽根透し。凹線３条。充塡。	坏—ミガキ 脚—ナデかミガキ→施文	坏—ナデ・ミガキ 脚—ナデ	・石・長(1～2) ・◎	黒斑	12
17	高坏	底径(9.3)	充塡技法。器壁が薄い。無文。脚端部は拡張せず	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒 ・○		12

ＳＤ４出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(㎝)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
18	台付鉢	底径 8.0	さし込み技法。器壁が厚い。脚端部は拡張せず。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～5) ・○		12
19	甕	頸径(25.8)	頸部に貼り付け凸帯を施す。凸帯は扁平で、凸帯上に指頭痕あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～2) ・○		12
20	壺	口径(13.8)	口縁端部に二条の凹線文。口頸部内面に、ゆるやかな稜をもつ。	口端—ヨコナデ→施文 頸—磨滅、施文あり	ナデ	・石・長(1～4) ・○	黒斑	
21	壺	口径(13.5)	口縁端部は上下に拡張する。口縁端面に3条の凹線文。	口端—施文 頸—ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒 黒ウンモ ・◎		
22	壺	口径(17.6)	複合口縁か。外面に5条の凹線文。口縁端面に2条の擬凹線文。	口端—ヨコナデ 口—施文	ヨコナデ	・砂粒 ・◎	黒斑	12
23	壺	口径(11.4)	短頸壺。口縁端部は拡張せず。体部内面にシボリ痕。	口端—ヨコナデによる凹み 胴—ナデ	口—磨滅の為不明 胴—ナデ	・密 ・○		
24	甕	口径(24.0)	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部は短かく、丸みがある。	口端—ヨコナデによる凹み 頸—ヨコナデ 胴—ナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	・砂粒 ・◎	黒斑	
25	高坏	口径(22.0)	口縁外面に6条の凹線文。口縁端面はナデ凹み。	施文あり	磨滅の為不明	・砂粒 ・○		12
26	高坏	残高 5.5	円板充塡法。擬凹線文11条が施される。螺線状か。	施文あり	不明	・密 ・◎		
27	壺	底径 7.2	上げ底。底部の器壁は薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○	黒斑	
28	甕	底径(4.3)	小さい上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～4) ・○	黒斑	
29	甕	底径(5.8)	わずかに上がる上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○	黒斑	
30	甕	底径 5.3	くびれの上げ底。体部の器壁は薄い。	胴—ハケ→ヘラミガキ 底—ヨコナデ	磨滅の為不明	・密 ・◎	黒斑	
31	甕	底径 6.4	わずかに上がる上げ底。	胴—磨滅の為不明 底—ナデ	胴—板ナデ 底—ナデ	・砂粒 ・○	黒斑	

第５章

来住町（キシチョウ）遺跡

――１次調査――

1　調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1988（昭和63）年９月、大西　努氏より、松山市来住町519における共同住宅建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『127来住廃寺跡』内にあたり、これまでも多くの調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、白鳳期の創建として知られる来住廃寺〔小笠原好彦・森光晴　1989〕や、７世紀中葉の官衙跡と考えられる来住遺跡、官衙関連遺構の久米高畑遺跡〔西尾幸則・池田学　1989・1991〕などがある。

同包含地のある来住舌状台地は、近年、都市計画での市街化地域の調整もあいまって緊急調査がさかんに実施されている。縄文時代後期から中世を通じ集落関連遺構が検出され、特に、古代においては同地域が松山平野の中心的位置を占めていたことが明かになりつつあり注目される地域となっている。

これ等のことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1988（昭和63）年11月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査は、調査区の数ヶ所にトレンチを掘り、土層確認及び遺構・遺物の確認を行った。その結果、調査区北半部と西半部は昭和20～30年代の粘土採掘によるものと思われる掘り込み（瓦だめ）により遺構は破壊されていたが、調査区南半部において、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層を検出した。

この結果を受け、文化教育課・大西　努氏二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い共同住宅建設によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、遺物包含層の範囲確認と、調査地の西にある来住廃寺域及び官衙遺構の東域の状況を明らかにすることを主目的とし、文化教育課が主体となり、大西　努氏・株式会社日企設計の協力のもと1988（昭和63）年11月16日に開始した。

(2)　調査組織

調 査 地　　松山市来住町519
遺 跡 名　　来住町遺跡１次調査
調査期間　　野外調査　1988（昭和63）年11月16日～同年11月23日
調査面積　　1,632㎡
調査委託　　大西　　努
調査協力　　株式会社日企設計　　越智　　清
調査担当　　梅木　謙一　　宮内　慎一

作業員　谷久　広之、森田　真司、工藤　賢稔、亀山　健一、吉田　智広、古屋　明寿
扶川　博、武正　良浩、中村　猛彦、塚原　竜一、沼田　崇広、佐藤　嘉宣
羽田野修三、加島　次郎、久保　浩二、笠松　誠悟、藤田　信二、笠井　啓一
森田　利恵、越智美代子、他

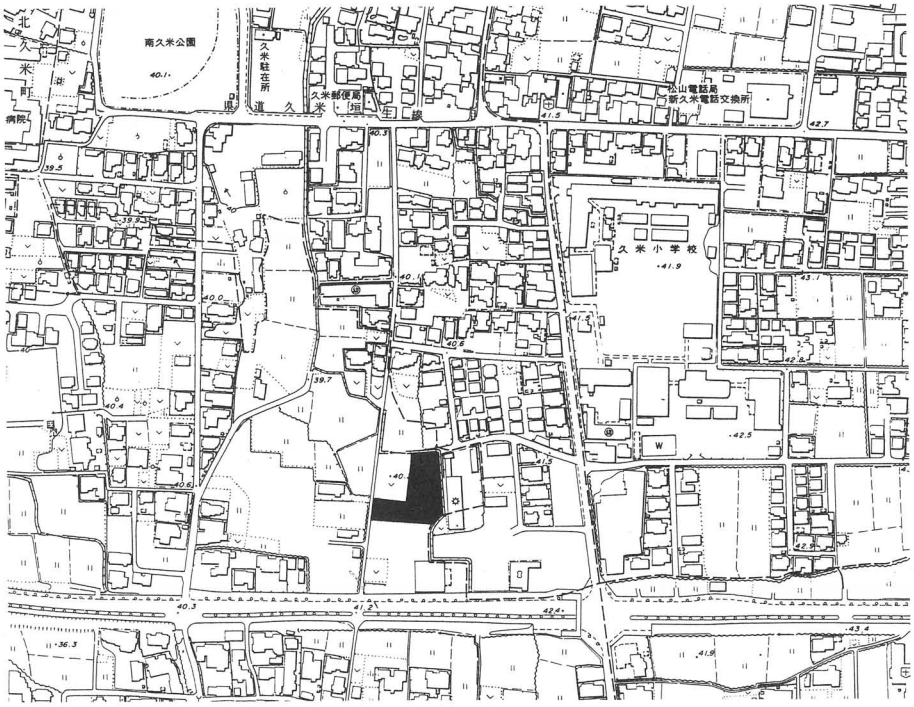
２．層　位（第22図）

本遺跡は、松山平野東部に広がる来住舌状台地の南側部の標高40.6mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黄白色粘質土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は30～35cmの厚さを測る。第Ⅲ層灰褐色土は６～10cmの堆積であり土師器・須恵器を包含する。第Ⅳ層暗褐色土は５～６cmの堆積であり、第Ⅴ層は黒褐色土は50～60cmの堆積である。共に遺物包含層であり、弥生土器・土師器・須恵器を包含するが、両層ともこれらの遺物が混在して出土した。第Ⅵ層黄白色粘質土は無遺物層であり地山と呼ばれるものである。

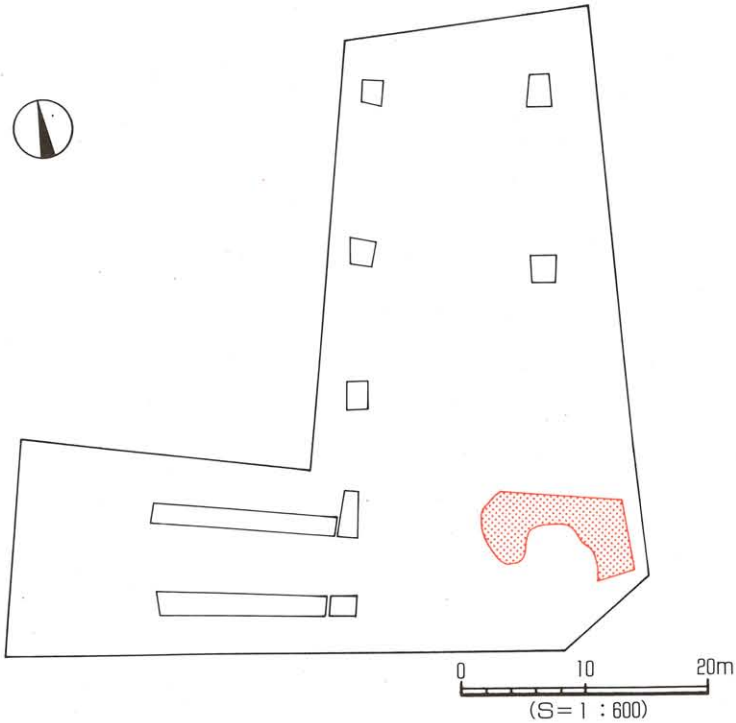
遺構は第Ⅳ層、第Ⅴ層及び第Ⅵ層での検出である（第23・24図）。

第Ⅳ層上面では土壙１基、第Ⅴ層上面では柱穴１基、第Ⅵ層上面では自然流路３条を検出した。第Ⅵ層上面の標高を測量すると、調査区南側から北側へ漸次緩傾斜をなしている。

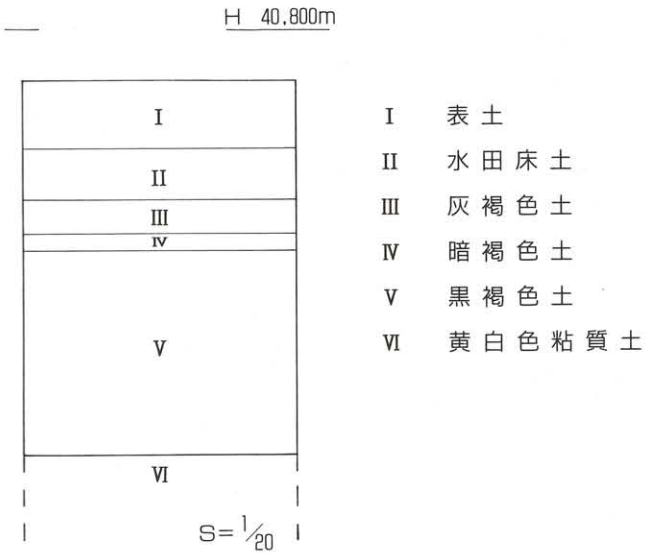


（S＝１：5,000）

第20図　　調査区位置図



第21図　　調査地測量図



第22図　　基本層位図

３．調査の概要（遺構と遺物）

本調査では、土壙１基（ＳＫ１）、自然流路３条（ＳＲ１～３）、柱穴１基（ＳＰ１）を検出した。いずれの遺構も、時期決定に有効な遺物の出土はない。ただし、調査後の整理の結果、遺物包含層が７ｃ以降に堆積しているため（下限は不明）、７ｃ以降の遺構であることは間違いないであろう。

１）土壙ＳＫ１（第23図）

第Ⅳ層上面で検出する。平面形は楕円形を呈する。規模は、90cm、100cmで、深さ６cmを測る。覆土は、灰褐色土である。遺物の出土はない。

２）柱穴ＳＰ１（第23図）

第Ⅴ層上面で検出する。平面形は円形を呈する。規模は、径40cmで、深さ10cmを測る。覆土は暗褐色土である。遺物の出土はない。

３）自然流路

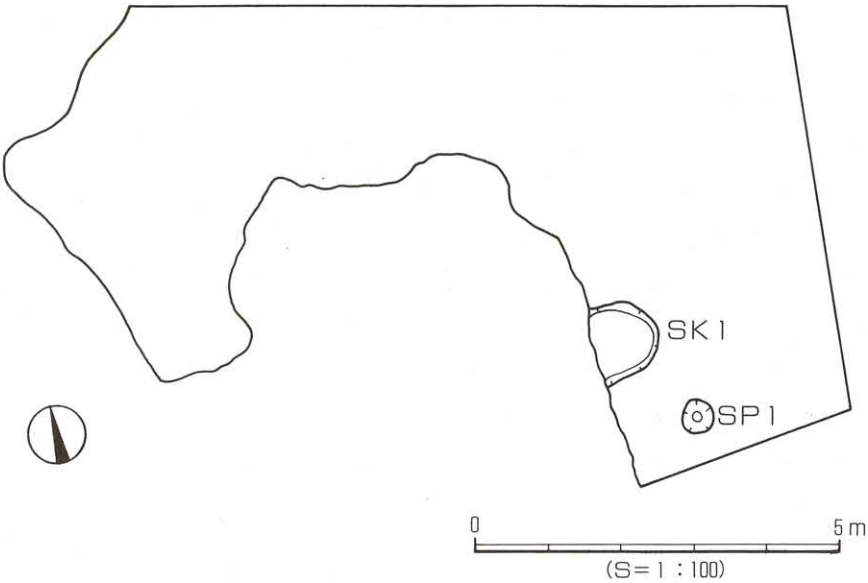
ＳＲ１（第24図）　第Ⅵ層上面で検出する。ＳＲ２，３に切られる。検出長5.4mで、上場幅50～70cm、下場幅15～25cm、深さ14cmを測る。遺物の出土はない。

ＳＲ２（第24図）　第Ⅵ層上面で検出する。ＳＲ１を切る。流路変更（最低１回）があったことを平面で確認した。検出長6.5mで、上場幅90～250cm、下場幅10～55cm、深さ20cmを測る。流路は西から東に移動している。遺物の出土はない。

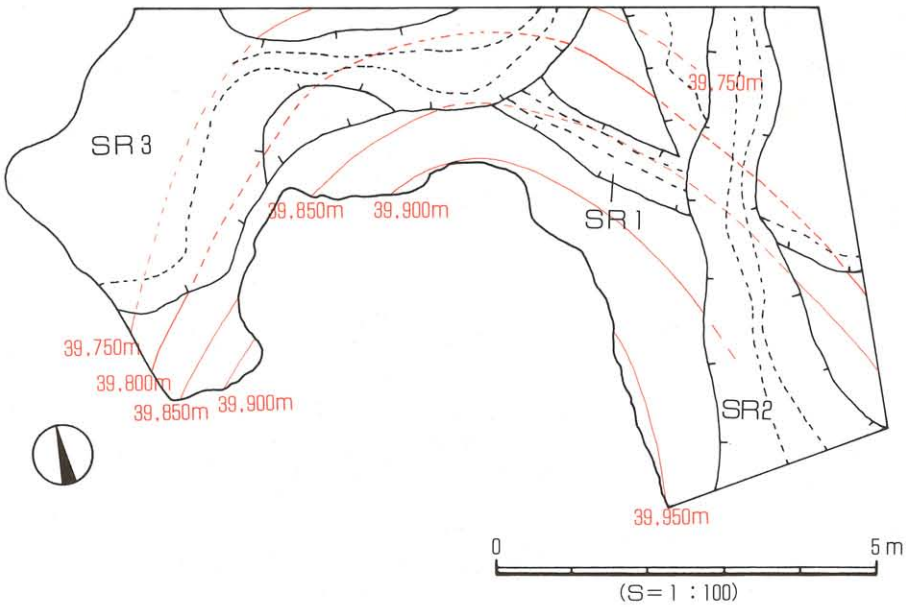
ＳＲ３（第24図）　第Ⅵ層上面で検出する。ＳＲ１を切る。西半部は、流路幅が急激に広くなり、東半部は幅狭となり北に向かって蛇行する。検出長8.2mで、東半部上場幅1.2～1.3m、下場幅15～25cm、西半部上場幅2.5＋α～5.0＋αm、下場幅3.3＋αm、深さ50cmを測る。遺物の出土はない。

４）包含層出土遺物（第25図）

弥生土器（１～３）　１は第Ⅴ層出土の甕形土器である。ゆるやかに曲がる口縁部に、頸部にはヘラ描き沈線文２条が施される。前期中～後葉。２は第Ⅴ層出土の壺形土器である。長頸壺の破片で、頸部下端内面に凸帯を１条張り付ける。凸帯上はナデを加え上下端にヘラによる刻目を施す。前期後葉。３は第Ⅴ層出土の壺形土器である。口縁端部は上下に拡張され、端面には２条の凹線文が施される。頸部には板状工具の木口による「ノ」字状文が施さ



第23図　　第Ⅳ・Ⅴ層上面遺構配置図



第24図　　第Ⅵ層上面遺構配置図

れる。中期後葉。

土師器（４，５）　４は第Ⅴ層出土の高坏形土器である。裾部の器壁は柱部に比べ薄い。中期以降。５は第Ⅲ層出土の高坏形土器である。直立ぎみの柱部に、ゆるやかに外反する裾部をもつ。裾部の器壁は厚い。中期以降。

須恵器（６～13）　６は第Ⅲ層出土の坏蓋である。わずかに内湾して垂下する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。６ｃ。７は第Ⅳ層出土の坏身である。２分の１の残存で体部は大きくひずんでいる。外反、内傾するたちあがりは、口縁端部は直立する。端面は丸い。６ｃ。８は第Ⅲ層出土の坏身小片である。小さいたちあがりと受部をもつ。７ｃ。９は第Ⅳ層出土の坏身小片である。受部は水平につく。７ｃ。10は第Ⅳ層出土の高台付の坏である。台部の端面は水平である。７ｃ。11は第Ⅴ層出土の高坏である。脚端部がナデにより上方に突出する。７ｃ。12は第Ⅴ層出土の甕である。外傾する口縁部は、端部が五角形を呈する。７ｃ。13は第Ⅲ層出土の甕である。肩部がわずかに張る。体部上半にクシによる「ノ」字状文と凹線文を施す。６ｃ。

４．小　　結

本調査では、７ｃ以降に堆積した遺物包含層と遺構を検出した。

当地の遺物包含層Ⅲ～Ⅴ層は、いずれも７ｃ代の須恵器片を主に包含する層であり、各層間に時期差を求めることはできなかった。よって当地では、７ｃ代に急速に土壌の堆積が進んだことが判る。また、各層序間で遺構が数基検出されていることより、当地が７ｃ代に生活地として使用されていたことが判る。

本調査地域は、来住廃寺跡、久米高畑遺跡の東接地域でありながら、これまでに調査が未実施であり、遺跡の様相は不明であった。今回の調査は、狭範囲かつわずかな遺構数であるが、当地域の７ｃ代の土地利用を具体的に示す資料として、今後の同地域の調査・研究の一基礎資料となるものであり、貴重な資料といえるであろう。

〔文献〕

小笠原好彦・森　光晴他　1979　『来住廃寺』　松山市教育委員会

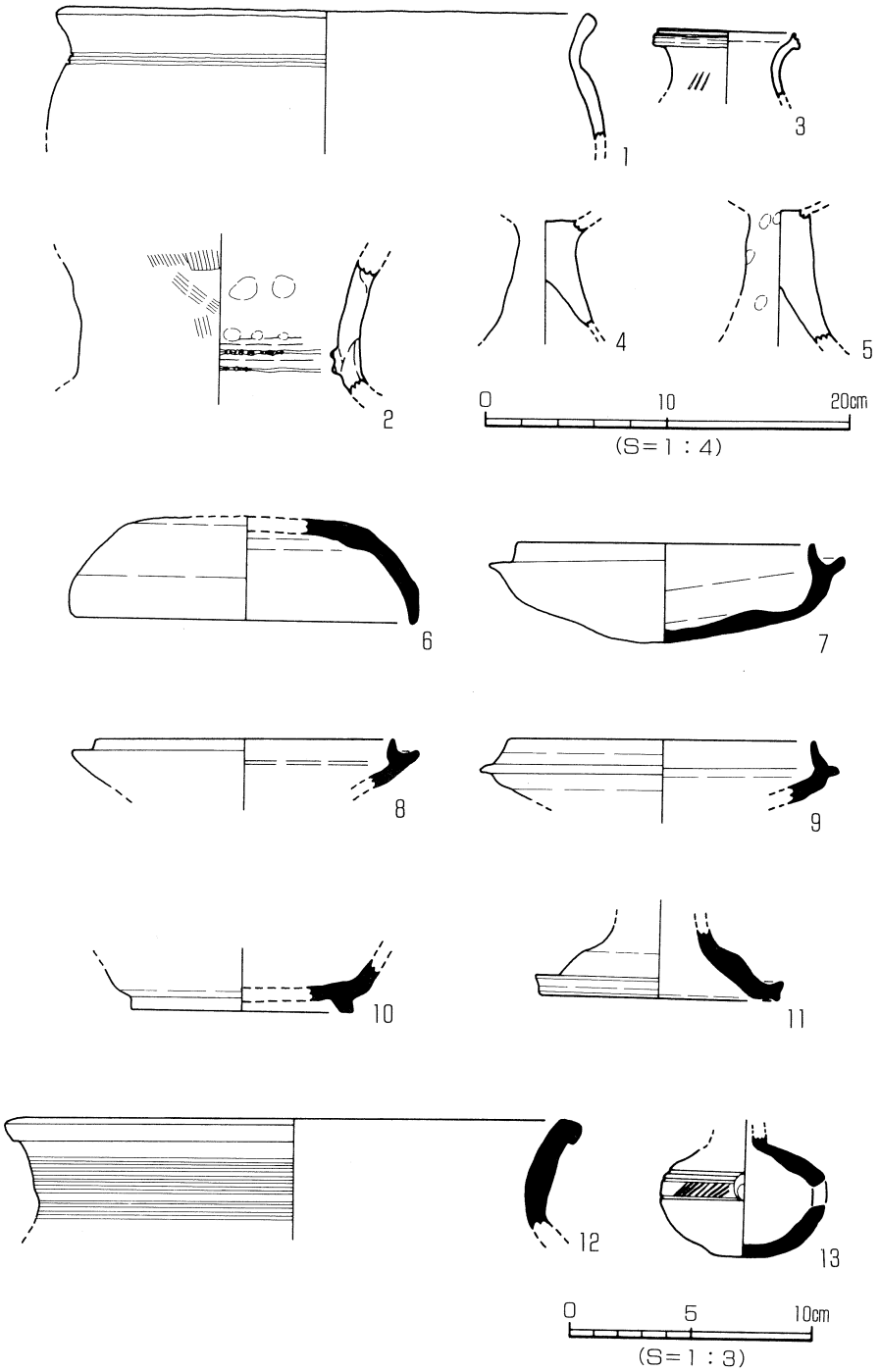
栗田茂敏　1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

阪本安光　1980　『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　愛媛県教育委員会　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

西尾幸則・池田　学　1979　「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

西尾幸則・池田　学　1991　「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会

宮本一夫　1990　『樽味・鷹子遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室



第25図　　包含層出土遺物実測図

表11　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(㎝)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(28.4)	ゆるやかな外反 頸部にヘラ描き沈線文２条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂・石 ・○	Ⅴ層	
2	壺	頸部径(16.6)	頸部内側に貼り付け凸帯。凸帯上にヘラによる刻目を施す。	タテ刷毛目	ヨコナデ	・砂・石 ・○	Ⅴ層	
3	壺	口径(7.4)	口縁部上方への拡張。 口縁端面に２条の凹線文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒 ・◎	Ⅴ層	16
4	高坏	残高 7.1	脚柱上部は、中実である。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒 ・◎	Ⅴ層	16
5	高坏	残高 7.5	さし込み式。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎	Ⅲ層	16
6	坏蓋	口径(14.0)	口縁端部は、丸く先細りする。	㊦$\frac{1}{2}$回転ヘラケズリ ㊤回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	16
7	坏身	口径(12.0) 器高 3.3	短いかえりをもつ。口縁部がやや長い感がある。	㊦$\frac{1}{3}$回転ヘラケズリ ㊤回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅳ層	16
8	坏身	口径(12.0)	短いかえりは、端部が細く、丸い。かえりは、直立ぎみに立ち上がる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	16
9	坏身	口径(12.8)	やや長いかえりをもつ。口縁部が短い。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅳ層	16
10	坏身	底径(9.0)	高台付。高台はやや傾斜し端面は水平である。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅳ層	
11	高坏	底径(9.8)	脚端面はナデによりやや拡張される。端面は、大きく凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅴ層	16
12	甕	口径(22.0)	口縁は貼り付けにより形成される。口縁内面に自然釉が付着する。	(口端)回転ヨコナデ ㊥回転カキ目	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅴ層	16
13	甕	残高 4.9	肩部に２条の凹線文。胴部中位に２条の凹線文。凹線文間にクシによる「ノ」字文。	㊧回転ヨコナデ (胴中)施文 ㊨回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅲ層	16

表12　自然流路一覧

流路(SR)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1		擂鉢状	5.40×0.70×0.15	黒褐色シルト		ＳＲ２．３に切られる	７Ｃ以降
2		舟底状	6.50×2.00×0.20	黒色		ＳＲ１を切る	７Ｃ以降
3		舟底状	8.00×1.30×0.50	黒褐色		ＳＲ１を切る	７Ｃ以降

表13　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1		楕円形	レンズ状	1.00×0.90×0.06	灰褐色土			７Ｃ以降

第6章

来住町遺跡

――3次調査――

1．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1989（平成元）年6月5日、山内一誠氏より松山市来住町534－1における宅地開発に先立ち、埋蔵文化財の確認願いが提出された。試掘調査の結果、遺構と遺物包含層を確認した。協議により、約1ヶ月の予定で事前調査を行うこととなった。

(2) 調査組織

調 査 地　松山市来住町534－1

遺 跡 名　来住町遺跡3次調査

調査期間　1989（平成元）年11月14日～同年12月20日

調査面積　773㎡

調査委託　山内一誠　　調査協力　㈱セキスイハウス

調査担当　藤原敏秀　小笠原善治

2．層　位（第26図）

本調査区の基本層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層明褐色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層灰暗褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒色土、第Ⅶ層茶褐色土、第Ⅷ層黄褐色シルト（地山）である。第Ⅰ層は層厚10～20cmの旧水田耕作土、第Ⅱ層は層厚約5cmの旧水田床土である。第Ⅲ層は層厚約5～10cmで、多量の黄褐色シルト粒を含んでいる。第Ⅳ層は層厚5～10cmで、粘性・しまり共に弱く、多量の赤茶色土粒を含んでいる。この層は須恵器・土師器片を主体とする遺物包含層である。第Ⅴ層は本調査区南半に存在し、層厚10～15cmで、ややしまりがあり、少量の黄褐色シルト粒を含んでいる。第Ⅵ層は層厚20～30cmで、しまりが弱く、少量の黄褐色シルト粒を含んでいる。第Ⅴ・Ⅵ層の両層は弥生土器・土師器・須恵器片を包含している。第Ⅶ層は地山漸移層であり、多量の黄褐色シルト粒を含んでいる。第Ⅷ層はいわゆる地山であり、本層上面は北から南へ緩やかに傾斜している。

3．調査の概要（遺構と遺物）

遺構のプラン確認は第Ⅷ層黄褐色シルト（地山）上面において行った（第27図）。

検出された遺構には、ピット168基、土壙8基、溝3条、掘立柱建物址1棟（ＳＢ１）、竪穴状遺構1基（ＳＸ１）、土壙状遺構1基（ＳＸ２）があり、以下、主要なものについて記すことにしたい。

ＳＰ１は調査区北西やや西寄りにおいて検出された。平面プランは一辺約90cmの隅丸方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、深さ約40cmを測り、覆土中から弥生土器・土師器片が出土した。

ＳＰ２は、調査区北端やや東寄りにおいて検出された。ＳＤ１を切っており、覆土中から土師器片を出土した。Ｐ１と形態が類似しており、両者は掘立柱建物址等の一部である可能性も考えられる。

ＳＰ３は、調査区北端東寄りにおいて検出された。平面プランは直径約95cmの円形を呈し、深さ30～37cmを測る。壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸が見られる。覆土中から弥生土器・土師器片が出土した。

ＳＫ１・２は、調査区北西隅において検出された。ＳＫ１はＳＫ２によって切られており、東西約1.6m、南北約1.0m、深さ36cmを測る。断面形は舟底形を呈し、出土遺物は皆無であった。ＳＫ２は調査区外にまだかなり広がっていると思われ、平面プランは不明であるが、最深47cmを測る。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器片等がある。

ＳＫ６は、調査区南西部において検出された。平面プランは東西約2.4m、南北約1.6mの不整形を呈し、深さ約15cmを測る。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器片・礫がある。

ＳＤ１は、調査区北側において検出された。長さ4.9m、幅50～60cm、深さ約10cmを測り、ほぼ南北に走る。調査区北端においてＰ１によって切られ、さらに調査区の外側へのびている。

ＳＤ２は、調査区中央東側において検出された。その東端部は未調査であるが、平面プランは南北径7.8m、推定東西径約７mの楕円形状を呈し、幅40cm前後、深さ10cm前後を測る。北半部をＳＢ１によって切られる。出土遺物は弥生土器・土師器片がある。

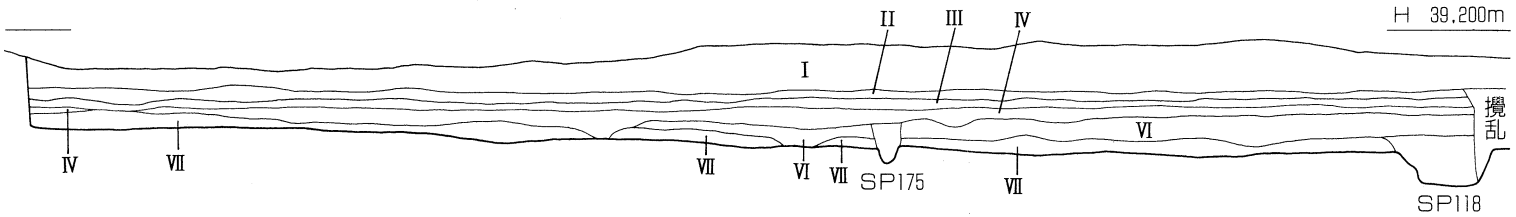
ＳＢ１は、調査区中央東側において検出された。桁行３間（約4.7m）、梁行２間（約3.7m）の東西棟掘立柱建物址で、柱穴の掘方プランは一辺約60～90cmの隅丸方形を呈し、深さ10～25cmを測る。出土遺物には根石に使用したと思われる河原石１点・弥生土器・土師器・須恵器片がある。

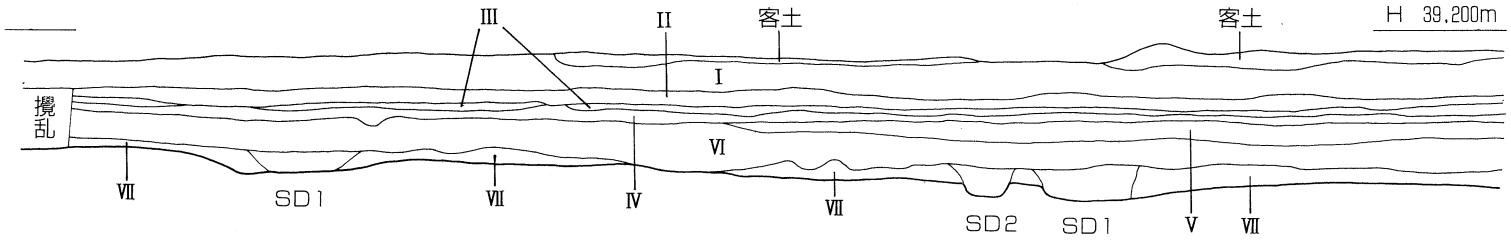
ＳＸ１は、調査区北東隅において検出された。平面プランは東西約3.6m、南北約3.2mの不整隅丸長方形を呈し、深さ約15cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦でなく、凹凸が見られる。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・砥石片などがある。

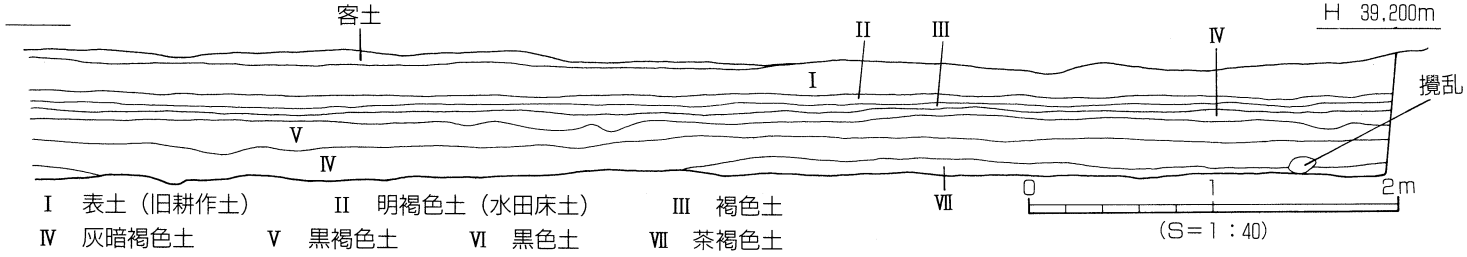
ＳＸ２は、調査区中央東側において検出された。平面プランは長さ4.1m、最大幅1.5mの半月状を呈し、最深85cmを測る。東壁がほぼ垂直であるのに対して、西壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向には緩傾斜するテラス状の部分が両側にあり、底部との段差は23cm前後を測る。覆土上層から弥生土器もしくは土師器と思われる小片が出土した。

４．小　　結

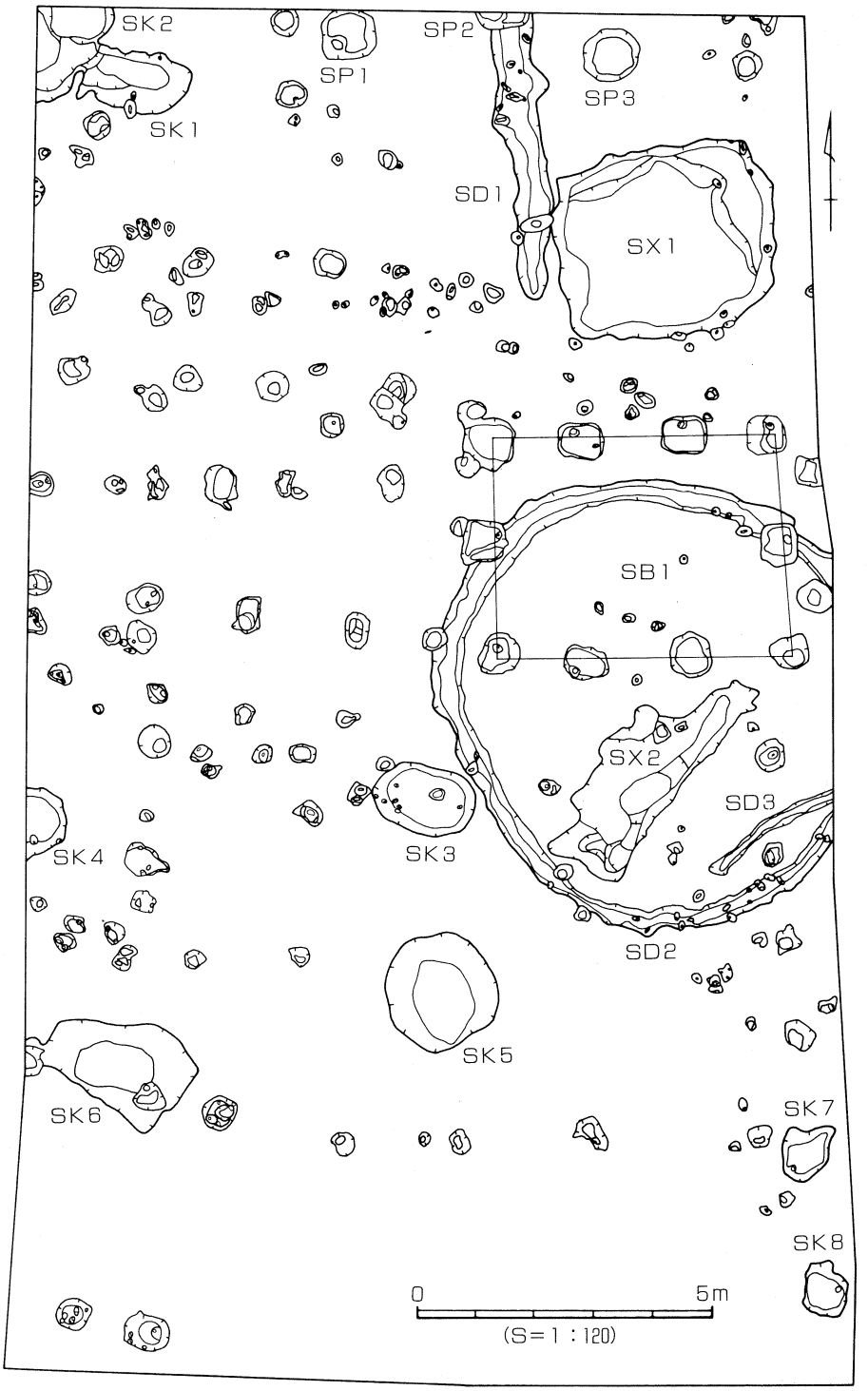
検出された遺構のうち、出土遺物からその所属時期を推測し得るものは非常に少なく、ＳＫ２、ＳＫ６、ＳＸ１の３遺構にすぎない。ＳＫ２は須恵器坏（第28図－11）から７世紀中葉、ＳＫ６は須恵器蓋（第29図－19）、須恵器皿（第29図－24）から７世紀後半、ＳＸ１は須


H 39.200m
II
III
IV
I
VI
IV
VII
VII
VI
VII
SP175
VII
攪乱
SP118

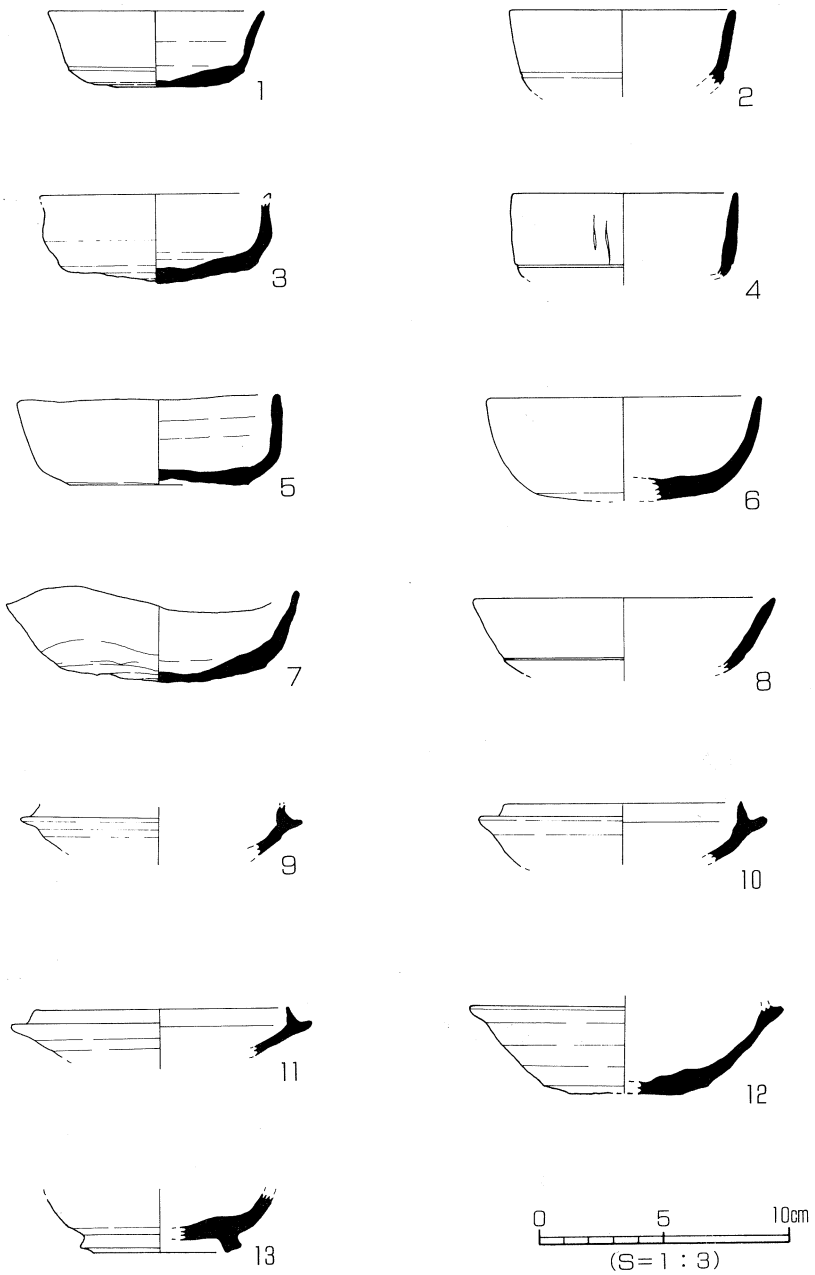

H 39.200m
III
II
客土
客土
I
攪乱
VI
VII
SD1
VII
IV
VII
SD2
SD1
V
VII


客土
H 39.200m
II
III
IV
I
攪乱
V
IV
VII
0
1
2m
(S=1:40)
I 表土（旧耕作土）
II 明褐色土（水田床土）
III 褐色土
IV 灰暗褐色土
V 黒褐色土
VI 黒色土
VII 茶褐色土

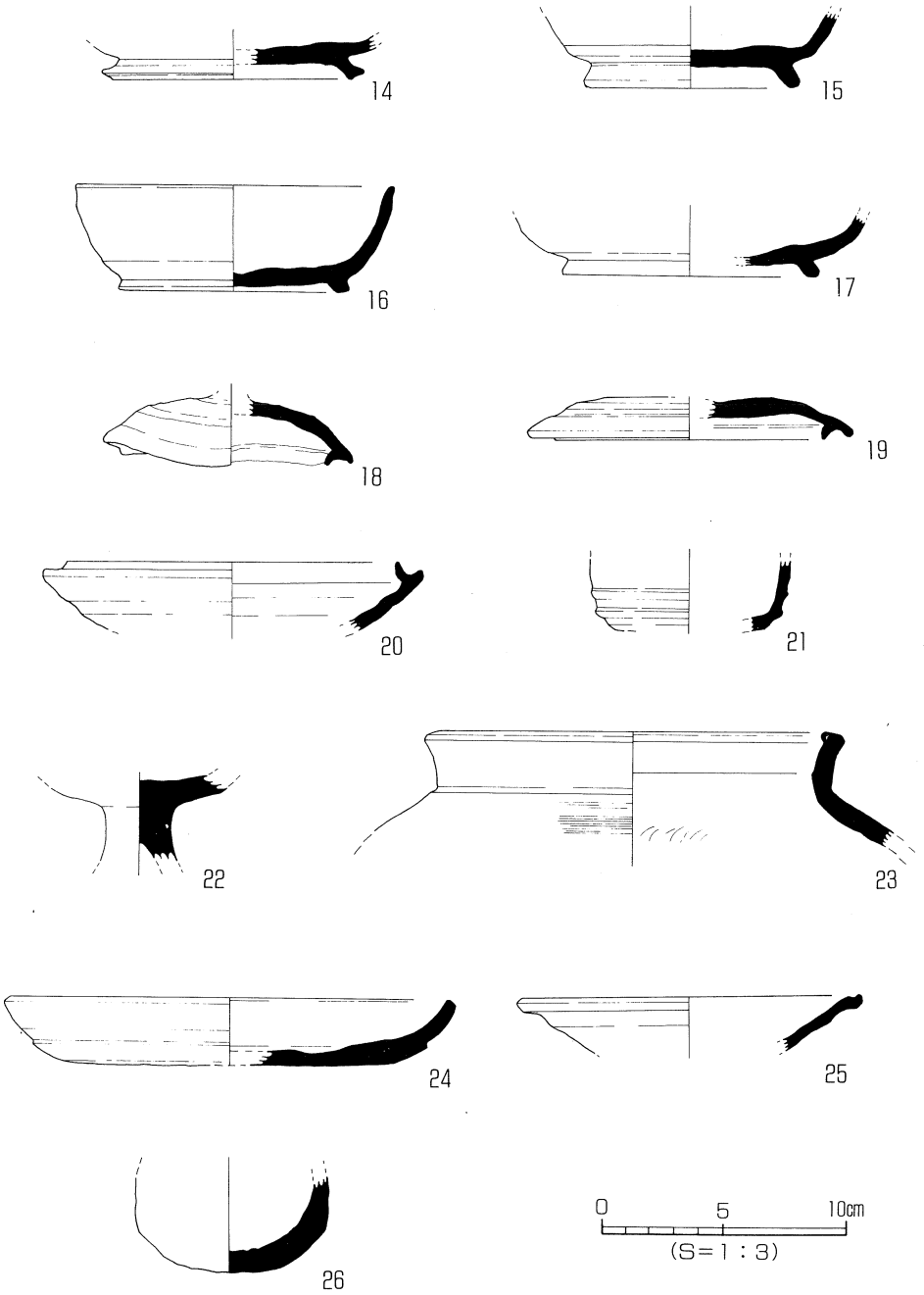
第26図　東壁土層図


SK2
SP2
SP1
SP3
SK1
SD1
SX1
SB1
SX2
SD3
SK4
SK3
SD2
SK5
SK6
SK7
SK8
0
5m
(S=1：120)

第27図　　遺構配置図



第28図　　出土遺物実測図(1)



第29図　　出土遺物実測図(2)

恵器坏（第28図－10）から７世紀中葉にそれぞれ比定され、ほぼ来住廃寺が創建された頃にあたる。

遺物包含層である第Ⅳ～Ⅵ層の調査については、調査期間の制約上、調査区北側約３分の１の第Ⅵ層（黒色土）に限定して行われた。出土土器は弥生土器（前期後半～）が全体の約３分の２を占め、ついで土師器・須恵器という順であった。出土土器量の多寡からみるとピットその他の所属時期不明の遺構には弥生時代のものが多いのではないだろうか。

遺構の分布を見ると、調査区北側から中央部にかけて遺構が多く検出されているが、調査区南端部においては遺構数は少ない。また、本調査区周辺の旧地形は概ね南へ向かって緩やかに傾斜していたと考えられ、本調査区の南西約100mで行われた２次調査において、自然流路址が検出されている。以上のことから、本調査区は遺跡縁辺部の一部にあたるものと推測され、遺跡の中心部は本調査区のさらに北側に存在しているのではないだろうか。

表14　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
1	坏身	口径(8.5)	体部下位外面に１条の浅い凹線を施す。	㊐回転ヨコナデ ㊖回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	密 ○		
2	坏身	口径(9.0)	体部下位外面に１条の凹線を施す。	㊐回転ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ	密 ○		
3	坏身	口径(9.2)		㊐回転ヨコナデ ㊖回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	密 ○		20
4	坏身	口径(9.0)	体部下位外面に１条の沈線を施し、中位外面にヘラ記号を付する。	㊐回転ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ	密 ○		
5	坏身	口径(9.2) 器高　3.5	全体に焼きひずみを生じる。	㊐回転ヨコナデ ㊖回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	密 ○		20
6	坏身	口径(11.0) 器高　4.2	口縁部外面に自然釉が薄くおおう。	㊐回転ヨコナデ ㊖回転ヘラケズリ →ナデ	回転ヨコナデ	密 ○	自然釉	20
7	坏身	口径(11.0)	全体に焼きひずみが著しく、底部外面を自然釉がおおう。	㊐回転ヨコナデ ㊖回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	密 ○	自然釉	20
8	坏身	口径(12.0)	体部下位外面に１条の浅い沈線を施し、ヘラ記号を付する。	㊐回転ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ	密 ○		
9	坏身	口径(11.3)		㊐回転ヨコナデ	㊐回転ヨコナデ	密 ○		

表15　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
10	坏身	口径(11.5)		㊐ 回転ヨコナデ	㊐ 回転ヨコナデ	密 ○		
11	坏身	口径(12.0)		㊐ 回転ヨコナデ	㊐ 回転ヨコナデ	密 ○		
12	坏身	口径(12.4)	底部外面に回転ヘラケズリによる稜が残る。	㊐ 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ヨコナデ	密 ○		
13	高台付坏身	高台径(6.4)	体部下位外面に稜をもち高台端部は「コ」字状を呈する。	㊐ 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ヨコナデ	密 ○		
14	高台付坏身	高台径(10.6)	高台端部は「コ」字状を呈よる。	㊢ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ヨコナデ	密 △		
15	高台付坏身	高台径(8.8)	体部下位外面に弱い稜をもち高台端部は丸味を帯びる。	口 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ヨコナデ	密 ◎		20
16	高台付坏身	器高 4.4 口径(13.0) 高台径(8.8)	高台端部はやや角張り、体部外面を自然釉がおおう。	㊐ 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	密 ◎	自然釉	20
17	高台付坏身	高台径(10.5)	高台端部は丸味を帯びる	㊥ 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	砂 ○		
18	坏蓋	口径(10.0)	焼きひずみを生じる。	蓋上 回転ヘラケズリ 蓋下 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	密 ○		20
19	坏蓋	口径(13.2)		蓋上 回転ヘラケズリ 蓋下 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	密 ○		
20	坏蓋	口径(15.6)		蓋下 回転ヨコナデ	蓋下 回転ヨコナデ	密 ○		
21	高坏	残高 3.0	体部下位外面に２条の凸線を施す。	㊥ 回転ヨコナデ	㊥ 回転ヨコナデ	密 ○		
22	高坏	残高 3.4		磨滅のため不明	磨滅のため不明	砂 △		20
23	甕	口径(17.0)	口唇部を内側につまみ出す。	㊐ 回転ヨコナデ ㊒ カキメ	㊐ 回転ヨコナデ ㊒ 同心円文タタキ	砂 ○		20
24	皿	口径(18.3) 器高 2.8	体部下位外面に小段差を作る。	㊐ 回転ヨコナデ ㊢ 回転ヘラケズリ	㊐ 回転ヨコナデ ㊢ ナデ	密 ○		20
25	皿	口径(14.0)	内面を自然釉がおおい、口縁端部内面に１条の凹線を施す。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	密 ○	自然釉	
26	瑕	残高 3.6		ナデ	板状工具によるカキトリ	密 ○		

第７章

久米高畑遺跡（クメタカバタケ）

――８次調査――

1　調査の経過

(1)　調査に至る経緯

「市道久米21号線」の拡幅工事を行うにあたり、工事予定地（松山市南久米町）の埋蔵文化財の発掘調査依頼が、松山市役所道路維持課（以下、道路維持課）より平成元年２月に松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）にあたった。

当予定地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『126高畑遺物包含地』内にあたり、今までにも周辺地域では多くの調査が実施され周知の遺跡として知られている。同包含地内では、弥生時代から古墳時代にかけての南久米片廻り遺跡〔栗田茂敏　1987〕、北久米遺跡〔西尾幸則　1986，宮崎泰好　1989〕、古代の官衙関連遺構の可能性の高い久米高畑遺跡〔西尾幸則・池田学　1989・1991〕（『久米評』線刻須恵器が出土した久米高畑７次調査など）の集落関連遺構が確認されている。高畑遺物包含地のある来住舌状台地は、来住廃寺跡他、大規模な回廊状遺構や高畑地区に広がる官衙関連遺構があり、古代松山平野の中域地区として存在していたことが、近年の調査で明らかになっている。

これらのことなどから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、文化教育課は道路維持課と協議の結果、予定地の240㎡について発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、弥生時代から古代，中世の当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり1989（平成元）年２月９日に開始した。

(2)　調査組織

調 査 地　　松山市南久米町官有地

遺 跡 名　　久米高畑遺跡８次調査

調査期間　　野外調査　1989（平成元）年２月９日～同年３月15日

調査面積　　240㎡

調査委託　　松山市道路維持課

調査担当　　調　査　員　　松村　　淳

　　梅木　謙一

　　調査補助員　　宮内　慎一

　　山本　健一

　　大森　一成

作 業 員　　森田　真司、谷久　広之、古屋　明寿、工藤　賢稔、亀山　健一、亀山　泰昌

　　安永　浩司、森永　純司、吉田　智宏、久保　浩二、首藤　成吾、中村　猛彦

　　盛山　　守、岡田　浩明、飛田　佳子、相原　洋子、森田　利恵、森田　晶子

　　栗林　千恵、藤沢　真美、丹生谷道代、森　　隆、藤家　厚美、松本　正義

２．層　位（第32図）

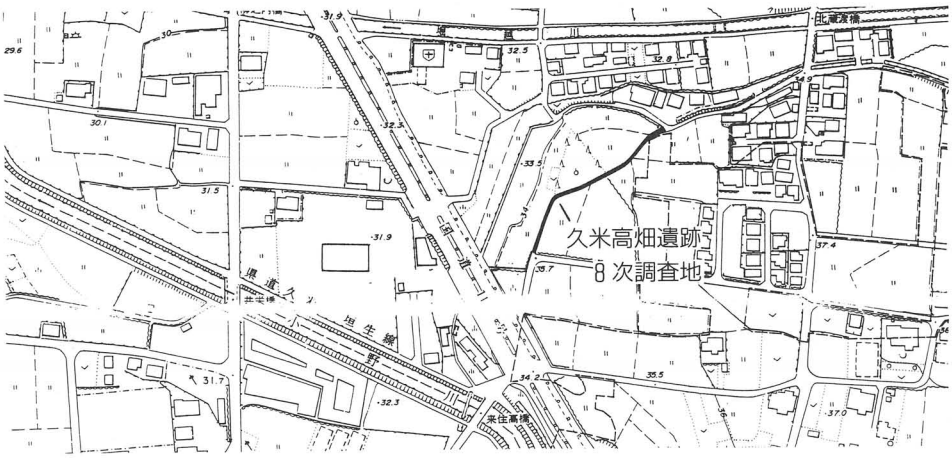
調査地は松山平野北東部、来住舌状台地の西縁部（標高36m）に立地する。

本調査は市道久米12号線拡幅工事予定地に、東西及び南北のトレンチ調査を実施した。東西トレンチは幅４m、長さ48m、南北トレンチは幅１m、長さ34mである。調査の都合上、東西トレンチを東調査区、南北トレンチを西調査区として調査を実施した（第31図）。

基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層淡黄褐色土、第Ⅴ層暗褐色土、第Ⅵ層黒褐色土、第Ⅶ層黄褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～30cmの厚さを測る。第Ⅲ層及び第Ⅳ層は５～10cmの堆積で、現代の遺物を含み、近年の耕作土であると考えられる。第Ⅴ層は西調査区全域と、東調査区の西半分に見られ、５～10cmの堆積であり、中世の遺物を包含する。第Ⅵ層は、東調査区の中央部を除き、ほぼ全域でみられ、５～10cmの堆積であり弥生時代～古墳時代の遺物を包含する。第Ⅶ層は無遺物層であり、地山と呼ばれるものである。東調査区では、東から西に向かって地山が傾斜をなしている。堆積状況は西半分は東から西へ各包含層が緩傾斜を呈するが、中央部は近現代の造成により削平されており、表土下は地山になっている。東半部は第Ⅴ層がみられず、表土下に第Ⅳ層が存在している。西調査区は北から南に向けて幾分緩傾斜を呈する。

遺構は第Ⅵ層及び第Ⅶ層上面で検出した（第33図）。

東調査区では、第Ⅱ層上面にて土壙（ＳＫ６）１基、第Ⅶ層上面では、掘立柱建物址２棟、土壙５基、溝状遺構１条、柱穴106基（掘立柱建物柱穴を含む）他を検出した。西調査区では、第Ⅶ層上面にて土壙（ＳＫ７）１基、第Ⅶ層上面では土壙２基、溝状遺構６条、柱穴59基を検出した。ただし、第Ⅶ層上面検出の遺構は、その深さから考えると、本来は第Ⅵ層以上の層から掘りこまれた可能性が高いものばかりである。

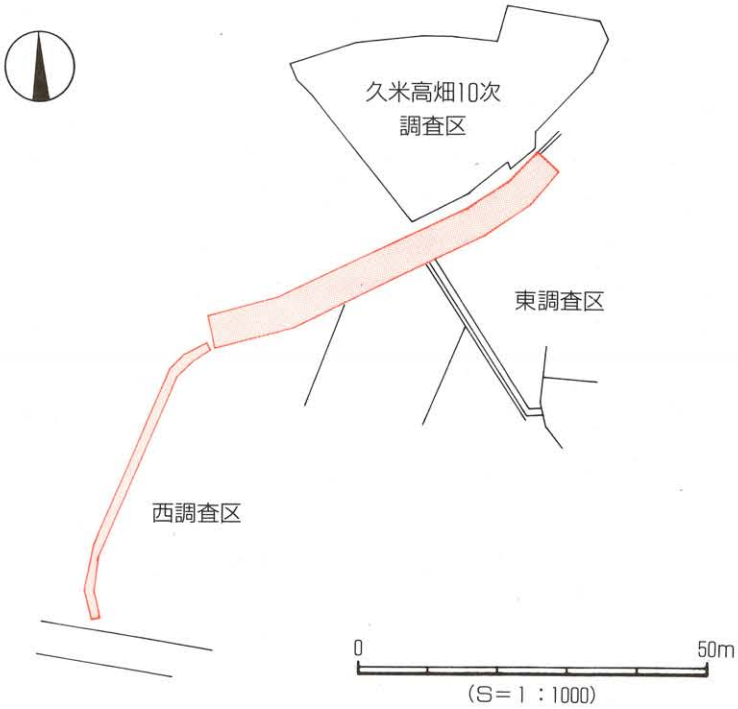


（S＝１：5,000）

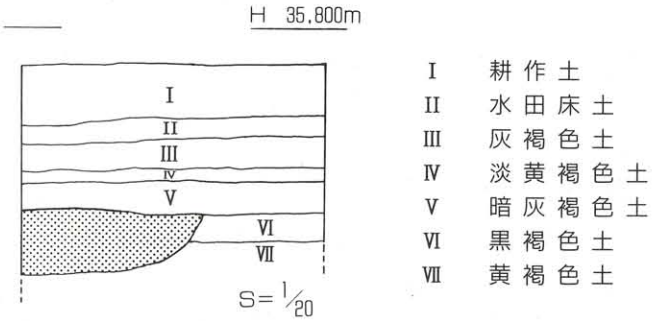
第30図　　調査区位置図

層　　位

遺物は遺構及び包含層中からの出土であり、第Ⅵ層黒褐色土中からは、弥生土器・土師器・須恵器が出土している。石器類は第Ⅶ層上面にて、磨製石庖丁（緑泥片岩）３点及び、柱状片刃石斧１点が出土している。



第31図　　調査地測量図



第32図　　基本層位図

３．調査の概要（遺物と遺構）

本調査において、弥生時代・古墳時代の遺構と遺物、中世の遺物を検出した。検出遺構は掘立柱建物址２棟、土壙９基、溝状遺構７条、柱穴165基（掘立柱建物の柱穴を含む）他である。弥生時代の遺構は溝１条（ＳＤ１）で、古墳時代の遺構は土壙５基（ＳＫ１，３，４，５，７）、溝３条（ＳＤ２，４，５）を検出した。他の遺構は、遺構中からの遺物の出土がほとんどみられず、時期や性格は不明である。

(1)　溝状遺構

本調査において確認された溝は７条である。東調査区においてＳＤ１を、西調査区においてＳＤ２～７を検出した。ＳＤ１～７はすべてⅦ層上面での検出である。ＳＤ１以外は、遺構中からの遺物の出土はわずかであり、時期や性格は判断し難い。本稿では資料性の高いＳＤ１について論述し、他の溝についてはその詳細を表16に記した。

溝ＳＤ１

東調査区西隅において検出された。北西端は攪乱を受けている。溝床面は南東から北西に向けて緩傾斜しており、南西方向に流れていたものと推察される。断面は逆台形状を呈し、上場幅40cm、深さ20～25cm、検出長６ｍを測る。埋土は暗褐色土である。ＳＤ１周辺には柵列状の遺構などは検出されておらず、その性格は防御的なものではなく、集落の範囲や地境のためのものと考える。なお、ＳＤ１に堆積していた遺物は弥生時代後期の資料である（第36図６～11）。

(2)　土壙状遺構

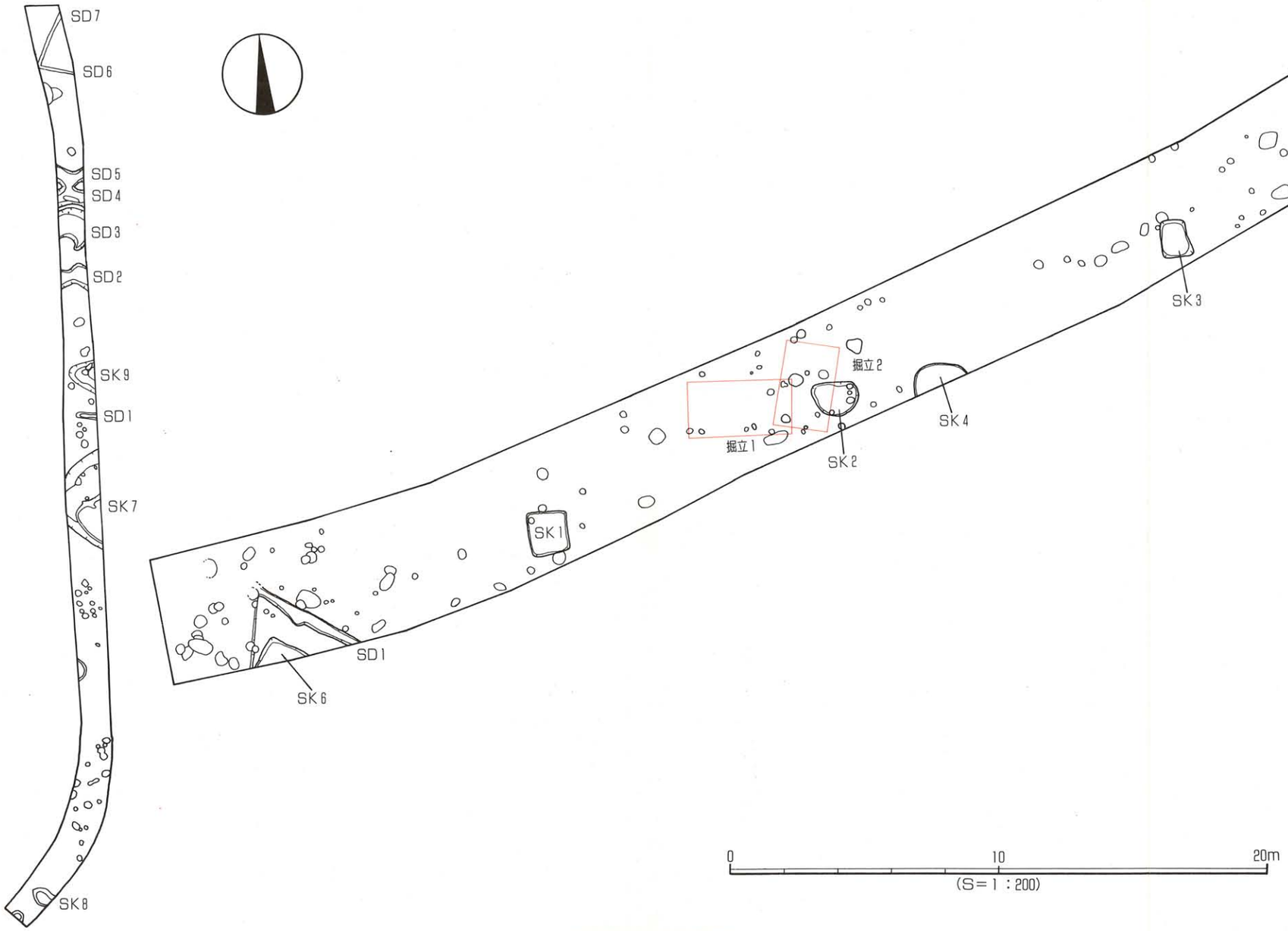
本調査において確認された土壙は９基である。第Ⅵ層上面にてＳＫ６を、他の土壙は第Ⅶ層上面での検出である。東調査区ではＳＫ１～６を、西調査区ではＳＫ７～９を検出した。

平面形と埋土に違いが現れた。ＳＫ１～７は平面形が方形～隅丸方形で、覆土が暗褐色～黒褐色土である。ＳＫ８，９は平面形が円～楕円形で、覆土は黒褐色土である。

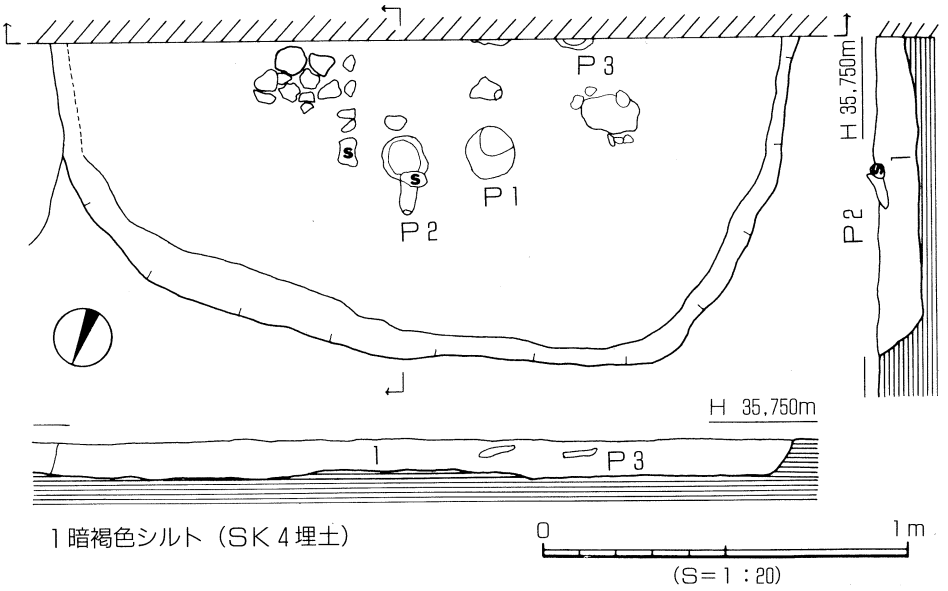
各土壙とも遺構中からの遺物の出土は少なく、わずかにＳＫ４より土師器の高坏形土器片、甑形土器片他が出土している。本稿では、資料性の高いＳＫ４について論述し、他の土壙については、その詳細を表17に記した。

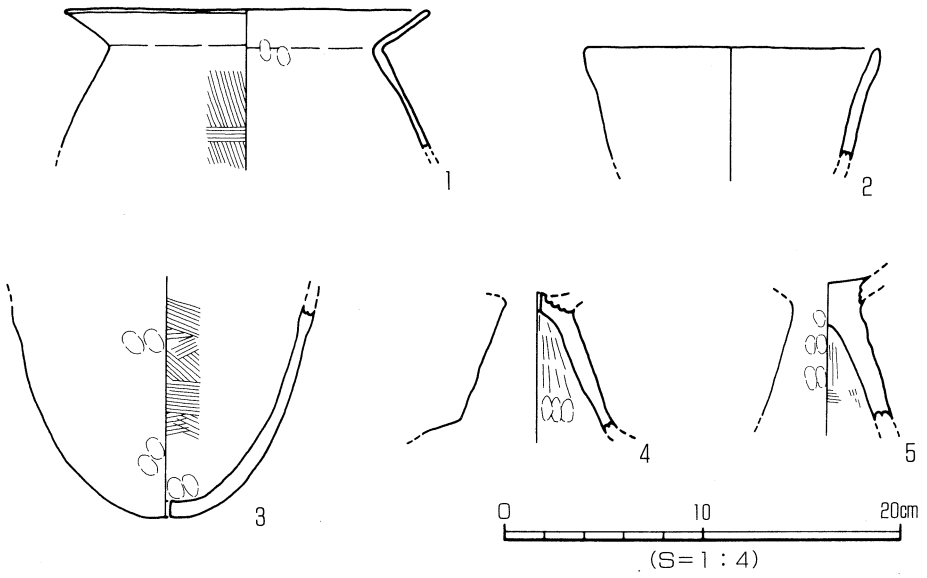
土壙ＳＫ４（第34図）

本土壙は東調査区ほぼ中央に位置する。遺構東隅は攪乱のため削平され、南壁は調査区外へ続く。平面形は遺構の検出状況から隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は現存幅東西200cm、南北90cm、深さ15cm（検出面下）を測る。覆土は暗褐色土の単一層である。床面は、遺構中央部がやや高くなっているが、比較的平坦である。遺物は遺構中央付近に集中し


SD7
SD6
SD5
SD4
SD3
SD2
SK9
SD1
SK7
SK8
SK5
SK3
SK4
SK2
掘立2
掘立1
SK1
SD1
SK6
0
10
20m
(S=1:200)

第33図　遺構配置図





第34図　　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図

ており、検出面付近で高坏を、床面近くの覆土中より甑他が出土している。遺構の性格はわからないが、その時期は出土遺物から５世紀代に形成されたものと判断される。

(3) 掘立柱建物（第35図）

本調査において確認された掘立柱建物址は２棟である。いずれも東調査区ほぼ中央に位置する。重複しているが柱穴埋土は同じ黒褐色土である（新旧関係は不明）。柱穴内からの遺物の出土がほとんどなく、造営時期は判断し難い。

１号掘立建物址

ＳＫ２の西側近くに位置する。６基の柱穴からなる１間×２間の東西棟であり、桁行長383cm、梁行間210cmである。柱掘方は長短20×15cmを最大とし、円～楕円形をなし深さは15cmを測る。

２号掘立建物址

ＳＫ２と切り合う１間×２間の南北棟である。切り合い関係は本建物祉が土壙ＳＫ２を切っている。規模は桁行長318cm、梁行間210cmである。柱掘方は長短50×40cmを最大とし、円～隅丸方形をなし深さは20cmを測る。

(4) その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は165基（掘立柱建物柱穴を含む）である。東調査区は106基、西調査区では59基を検出した。いずれも第Ⅶ層上面での検出である。柱穴は平面形と埋土より３分類できる。埋土では黒褐色土，褐色土のものがあり、造営時期に幅がうかがわれる。他に、東調査区西端において土器溜りを検出した。人工的な掘り方は未検出である。遺物は弥生時代後期～古墳時代のものが出土している。

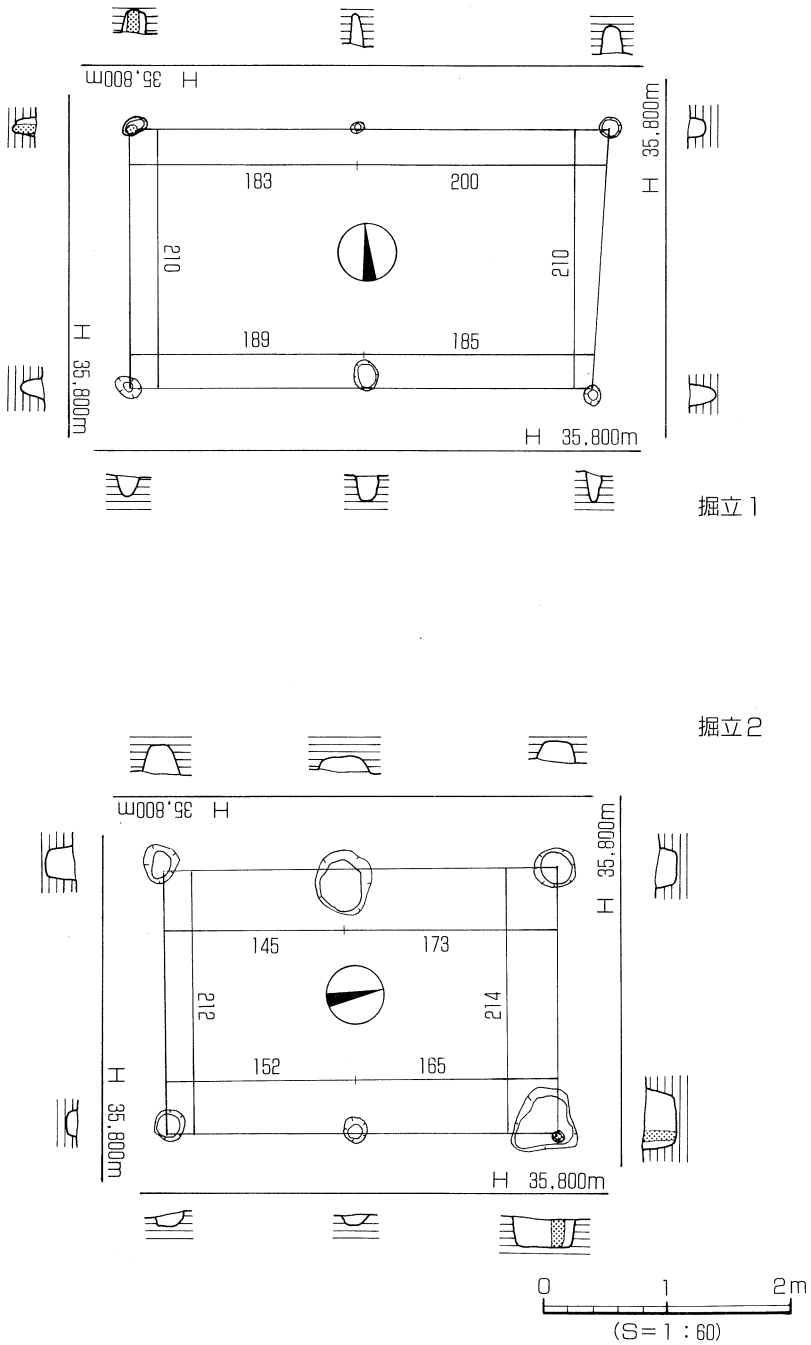
４．小　　結

今回の調査において、弥生時代・古墳時代の遺構と遺物を確認することができた。

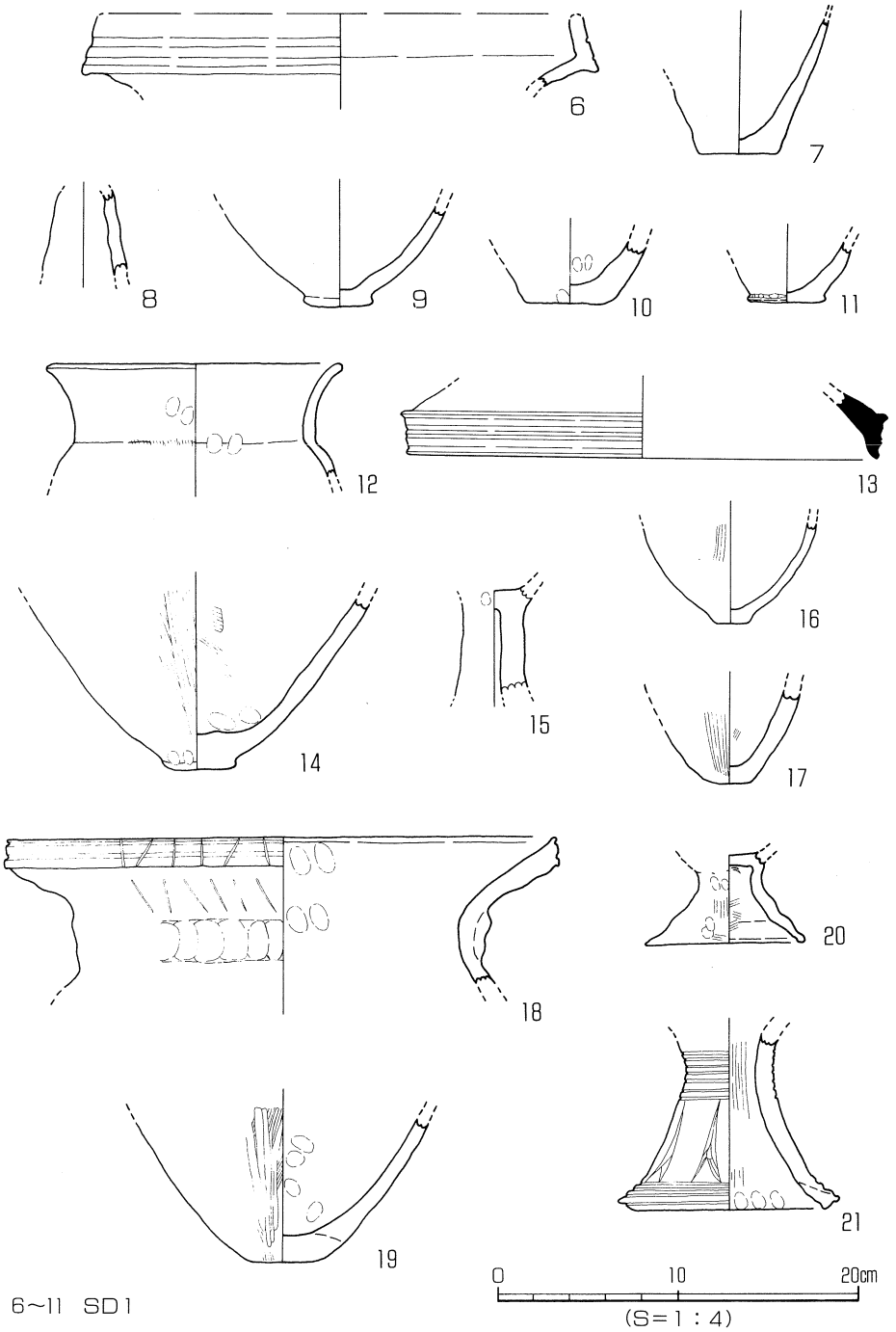
弥生時代の遺構では、後期の資料がまとまって出土したＳＤ１が注目される。東調査区の西端に位置し、検出状況から地域や集落の境界を示す溝の可能性が考えられる。周辺の調査では、ＳＤ１の位置する東調査区の西方約50ｍ、丘陵の段落ち部に南久米片廻り遺跡１次調査地がある。同調査地においては、弥生時代後期と考えられる円形住居址が検出されている。これらのことから、東調査区北西域周辺においては弥生時代中～後期の集落が存在していたものと考えられる。

古墳時代の遺跡では、ＳＫ４，７が注意をひくものである。東調査区中央付近で検出された隅丸方形状のＳＫ４は、その出土遺物から５世紀代に造営されたものと判断される。

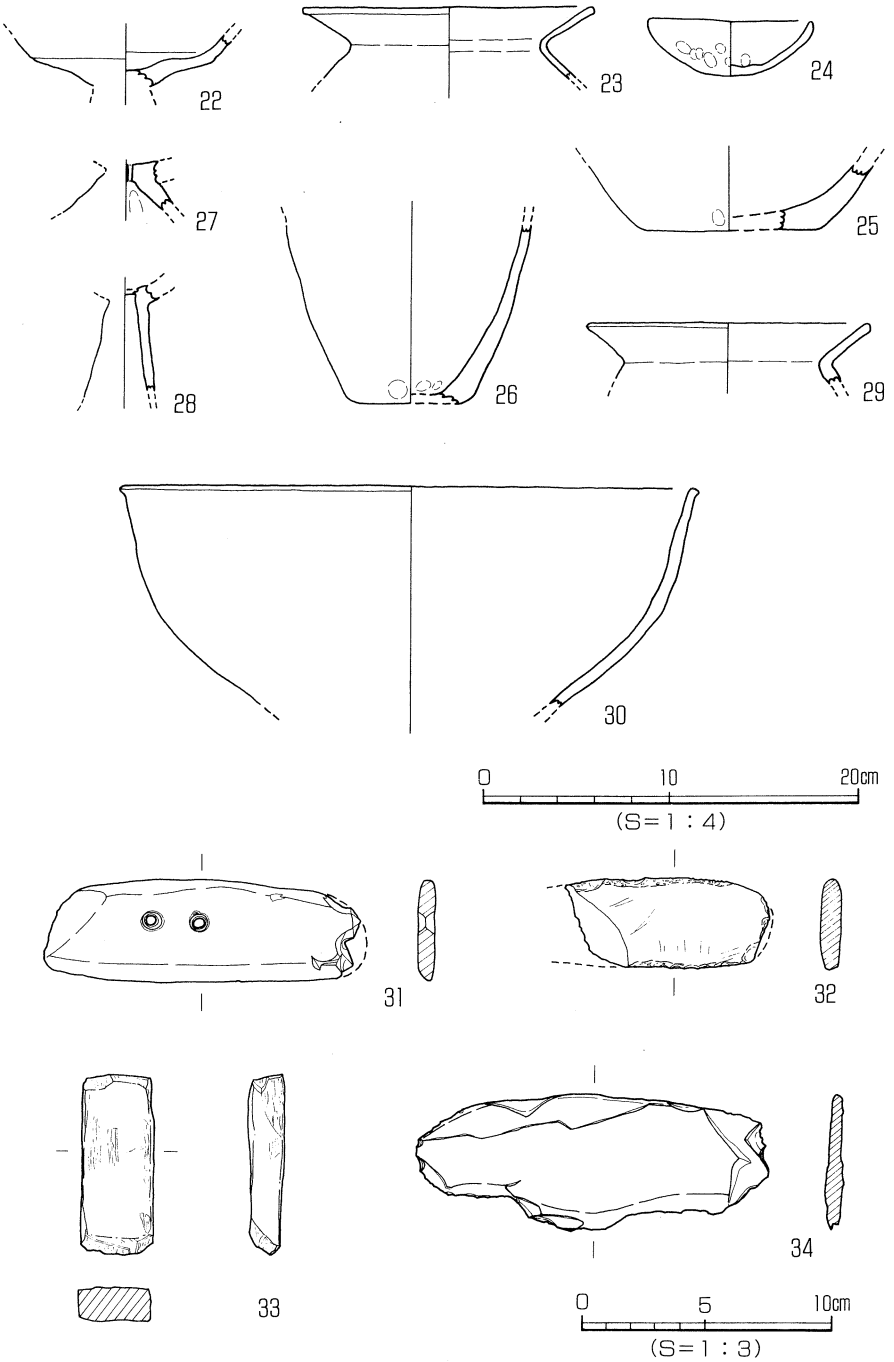
トレンチ調査であるため全様はわからないが、西調査区中央付近で検出された土壙ＳＫ７



第35図　　掘立1・2測量図



第36図　ＳＤ1・包含層出土遺物実測図



第37図　　包含層出土遺物実測図

は住居址である可能性が考えられる。平面形は、隅丸方形を呈すると思われ、床面には幅20㎝、断面Ｕ字状の溝がほぼ周壁にそって検出されている。遺物はわずかに覆土中からの出土であるが、造営時期は古墳時代中期を推測される。

周辺では、東調査区に隣接して北方に久米高畑10次調査地〔西尾幸則・池田学　1991〕がある。同地では、方形周溝墓ないし方墳の可能性のある古墳期の遺構を検出している。

これらのことから本調査区及び周辺地域は古墳時代においては、居住地及び墓域として使用されていたことが判る。

ところで本調査区南方約100ｍの地点には、「久米評」の字が刻まれた須恵器片が出土した久米高畑遺跡７次調査地〔西尾幸則・池田学　1989〕がある。今回の調査では、７世紀の集落関連遺跡や遺物は確認されず「久米評」に直接関連する資料は残念ながら得られなかった。ただし、本調査対象地が狭域であり、かつ、旧地表面が大きく近現代の耕地整理により削平されていることもあり、今回の資料では、当地に７世紀の集落が経営されていなかったことを推進されるものではない。しかしながら、本調査区及び周辺地域において、弥生時代～古墳時代を通して集落が営まれていたことが判明した。これは来住台地西部域における弥生時代～古墳時代の集落構造を考えるうえでは好資料となるものである。加えて、本調査周辺地域（来住廃寺から西方地域）は今後の詳細な調査が必要である地域でもある。

〔文献〕

栗田茂敏	1987	「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』　松山市教育委員会
西尾幸則	1986	「北久米浄蓮寺遺跡」『愛媛県史　資料編』　愛媛県史編纂委員会
西尾幸則・池田　学	1979	「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会
西尾幸則・池田　学	1991	「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』　松山市教育委員会
宮崎泰好	1989	「北久米常堰遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

遺構・遺物一覧

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）　縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3)　遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良、△→不良。

表16　溝　一　覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備考	時　期
1	東B1区	逆台形状	6.00×0.40×0.25	暗褐色土	弥生		弥生後期
2	西　区	皿　状	0.90×0.90×0.13	黒　色	土師		古墳以降
3	西　区	皿　状	1.15×0.90×0.08	黒　色			不　明
4	西　区	皿　状	0.90×0.70×0.08	黒　色	弥生・土師		古墳以降
5	西　区	レンズ状	1.30×0.10×0.05	暗褐色	土師		古墳以降
6	西　区	レンズ状	2.00×0.10×0.05	暗褐色			不　明
7	西　区	皿　状	1.40×0.15×0.08	暗褐色			不　明

表17　土　壙　一　覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土 (シルト)	出土遺物	備考	時　期
1	D1	方　形	皿　状	1.50×1.50×0.05	黒褐色	土師		古墳以降
2	F2	楕円形	舟底状	1.75×1.30×0.07	黒褐色			不　明
3	H3	長方形	舟底状	1.30×1.00×0.25	黒褐色	弥生・土師		古墳以降
4	F2	楕円形	皿　状	2.00×0.90×0.15	暗褐色	土師		古墳以降
5	I3	円　形	皿　状	1.60×0.75×0.06	黒褐色	弥生・土師		古墳以降
6	B1	方　形	舟底状	1.40×1.10×0.15	黒褐色			不　明
7	西区	楕円形	逆台形状	1.20×1.20×0.10	黒褐色	土師		古墳以降
8	西区	円　形	皿　状	0.80×0.30×0.15	黒褐色			不　明
9	西区	円　形	皿　状	0.95×0.40×0.10	黒褐色			不　明

表18　掘立柱建物址一覧

建物番号	規　模 (間)	桁　行 実　長(cm)	桁　行 柱間寸法(尺)	梁　行 実　長(cm)	梁　行 柱間寸法(尺)	床面積 (㎡)	時期	備　考
1	2×1	383(12.8)	6.7・6.1	210(7.0)	7.0	8.04	不明	
2	2×1	318(10.6)	5.7・4.9	210(7.0)	7.0	6.68	不明	SK2と切り合う

表19　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
1	甕	口径(18.8)	わずかに内湾して立ち上がる口縁部。器壁が薄い。	㋺—回転ヨコナデ ㋹—ハケ→ヨコナデ ㋼ ハケ（９本／１cm）	磨滅の為不明	・石・長(1～5)金 ・△		26
2	不明	口径(14.6)	壺の口縁部か。ヨコナデによる丁寧な仕上げ。器壁が薄い。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎		26
3	甑	底径 2.2	丸い底部、底部中央に径3.5㎜の小円孔が穿れる。	磨滅の為不明	㋼—ハケ（９本／１cm） ㋺—ナデ	・密 ・◎		26
4	高坏	残高 7.5	脚柱上面に径４㎜の小円孔が穿たれる。脚柱一裾境の内面に稜をもつ。さし込み式。	磨滅の為不明	㋩—ナデ ㋸—ハケ（７～８本／１cm）	・密 ・△		26
5	高坏	残高 7.0	組み合せ式。器壁厚い。	ヨコナデ	柱下—ケズリ	・砂粒(1～2)金 ・◎		26

表20　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
6	壺	口径(26.2)	複合口縁壺。口縁外面に太沈線文が２条ある。	㋺—ヨコナデ→施文 ㋹—ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒 ・◎		
7	甕	底径 4.2	鉢の可能性もある。小さい平底の底部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒 ・◎		
8	高坏	残高 4.5	さし込み式。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒 ・○		
9	鉢	底径 3.8	小さい突出する底部。底部内面は小さく凹む。	㋼—ハケ ㋺—ナデ	ナデ	・石・長(1～2) ・◎	黒斑	
10	甕	底径 4.5	丸みのある平底の底部。	ナデ	ナデ	・石・長(1～4) ・○		
11	甕	底径 4.0	やや突出する平底の底部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～2)金 ・○		

表21　包含層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
12	甕	口径(15.8)	小片であり、口径に疑問が残る。口頸部境に弱い稜がある。	ハケ目わずかに残る	ナデ	・密（石・長・1） ・◎	土器溜り	
13	器台	底径(26.0)	脚端部外面に凹線が２条施される。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	Ⅵ層	

包含層出遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
14	壺	底径(4.0)	突出する平底の底部。	ハケ（7本／1cm）	胴—ハケ 底—ナデ	・石・長(1～5) ・○	Ⅵ層	
15	高坏	残高 6.2	組み合せ式。器壁は厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂 ・◎	Ⅵ層	
16	甕	底径 1.6	小さく、突出する平底の底部。内面調整が丁寧。	ハケ	ナデ	・密 ・◎	Ⅵ層	
17	甕	底径 2.2	小さい、丸みある平底の底部。	ハケ (10～12本／1cm)	ナデ	・石・長(1～8) ・◎	黒斑 Ⅵ層	
18	壺	口径(32.0)	口縁端はやや上方に拡張。口縁端面に2条の凹線文。凸帯上は指頭圧痕。	口端—ヨコナデ→施文 頸—ヨコナデ→ハケか	口端—ヨコナデ 頸—ナデ	・石・長(1～2) ・◎	黒斑 Ⅵ層	
19	壺	底径 4.5	丸みのある平底。	ハケ→ヘラミガキ	ハケ→ナデ	・石・長(1～5) ・◎	黒斑 SP 101	
20	高坏	底径 8.8	組み合せ式。脚端はやや内側にはり出す。	ハケ→ナデ	脚—ナデ 柱—ヘラケズリ	・密 ・◎	黒斑 SP 33	
21	高坏	底径(11.8)	矢羽根透し8ケ。脚端面沈線2条。柱上部細沈線8条。	磨滅しているが施文は明確である。	ナデ	・石・長(1～3) ・◎	黒斑 SP 80	
22	高坏	残高 2.3	組み合せ式。坏底部外面に5mm大の円孔が穿たれる。	磨滅の為不明	ハケ→ナデ	・砂粒 ・○	SK 1	
23	甕	口径(15.4)	口縁部は内湾して立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。端部は丸く、やや厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・○	SK 3	
24	椀	口径 2.7 器高 3.1	指頭圧痕が顕著に残る。	指頭圧痕顕著	指頭圧痕顕著	・砂粒 ・△	SK 3 黒斑	
25	壺	底径(9.2)	やや凹む平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～3) ・◎	黒斑 SK 3	
26	壺	底径(5.0)	やや厚い器壁。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・石・長(1～5) ・◎	SK 5	
27	高坏	残高 3.3	組み合せ式。脚柱上部に径2mm大の小円孔を穿つ。器壁厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎	SK 7	
28	高坏	残高 7.0	内面にシボリ痕が残る。器壁が薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・砂粒（石・長・1） ・◎	SK 7	
29	甕	口径(14.6)	わずかに内湾する口縁部。口縁端部は丸く、やや厚い。	ヨコナデ	ヨコナデ	・砂粒(石・1) ・○	SD 5	
30	高坏	口径(34.0)	大きく開く坏部片。口縁端部は丸く、やや厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	・密 ・◎	SD 5	

表22　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
31	石庖丁	ほぼ完形	緑泥片岩	12.2	4.2	0.7	72.8		26
32	石庖丁		緑泥片岩	7.9	3.6	0.8	46.5		26
33	石斧	ほぼ完形	緑泥片岩	7.2	3.0	1.4	67.9		26
34	石庖丁		緑泥片岩	14.2	5.4	0.7	80.7		26

第８章　小野川水系における旧石器文化

重松　佳久

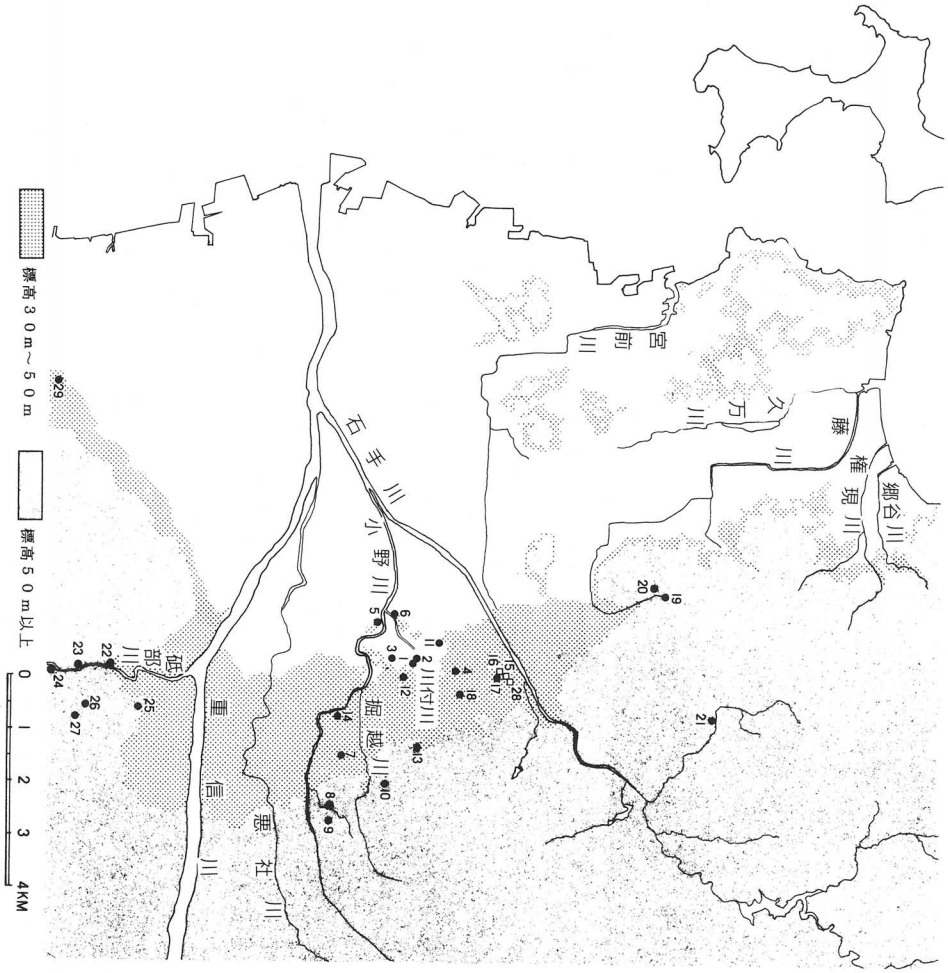
はじめに

松山平野において、現存する水系軸の多くは、後世の河川改修や扇状地形形成過程により流路変更が余儀なくされ旧石器時代の流路復元を遺物分布や現地形に置き換え想定する事は、多くの問題を内存している。しかしながら、火山灰研究の進展・地質・地理学からのアプローチを受けて古環境の復元作業とともに考古学的視点からもおのずと松山平野を貫流する各水系軸に対する社会的基盤認識作業の必要性が問われる事となっている。こうした中で抽出される水系軸の不変性の論議を前提とした蓄積作業が不可欠と考えるが、あえてここでは、不勉強のため現小野川筋に位置し比較的遺物検出がなされている中流域を総轄して小野川水系と仮称し旧石器時代遺物の概観にふれることとしたい。

１．遺跡立地

近年、小野川流域の旧石器時代遺物が検出されている背景として、国道11号線の路線変更整備とあいまって急速に宅地化がすすむとともに小野川右岸河岸段丘上に広がる史跡来住廃寺跡周辺の関連遺構群の確認作業の中で縄文晩期から続く遺跡群の存在が検出されることとなった。これらの遺跡群の調査が進展すると同時に微高地・低位段丘において旧石器時代の遺物が散発的に検出されている。また、同水系における独立丘陵・山塊から延びる舌状台地端部等の高位段丘上においても古墳群の造成埋土及び貯水池の堰堤において地元収集家等の手により資料蓄積がなされている。従来、当地域の旧石器時代の遺跡分布から後者の独立丘陵・舌状台地など山塊縁部に集中するとされた遺跡立地は、様相を異とし微高地・低位段丘・埋没丘陵を含めた海抜約30M～50Mの平坦地位置（第38図）に中心的な立地の成立を見ることとし、遺跡立地の選択に際し立地環境を含めた意図的な相違を持つことが窺い知れる。また、現在までに検出されている愛媛県内の旧石器時代遺跡の分布は、島諸部を除けば松山平野中央を縦断する小野川水系にその集中を見ることができるが、こうした状況は、旧石器文化研究不在の当地においても中流域における発掘調査密度の高さや洪積台地の残存度にのみ比例するだけともいいがたいものと考えられる。水系軸の中で残される遺跡群の立地に係わる選択は、ワークエリア内の活動拠点としての空間の占有を前提としているとともに安定した生活維持基盤の保証の上に成り立つものであり、そうした人類を取り囲む環境的保証を持つ立地の理解にあってはじめて意図された人類の痕跡を理解しうるものと考えられる。

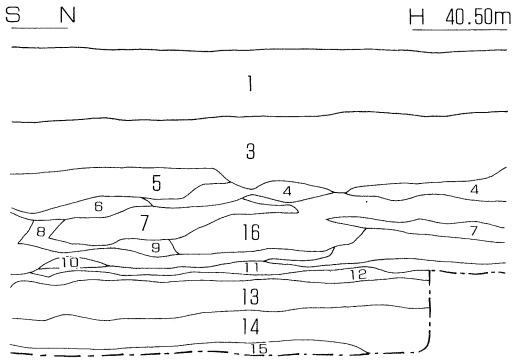
さらに、標高約30M～50Mの平坦地遺跡の土層観察から、旧石器時代遺物の検出される立地条件として段丘礫層（時期不明）上位に被覆する黄色シルト層が比較的遺存する地域において後世の攪乱と同時に確認されていることが報告されており、黄色シルト層等関連層成因・年代の科学的な検討を要している。今後、遺物出土に係わる基本層位の認識もふまえ、現



第38図　松山平野の旧石器時代遺跡

番号	遺跡名	水系名	標高	立地環境	遺物図版番号及び器種
1	筋違遺跡　H区	小野川右岸	29.5m	平坦地	第40図2
2	筋違遺跡　F区	小野川右岸	28.5m	平坦地	第40図1
3	星岡登立遺跡　二次調査区	小野川右岸	24.3m	平坦地	第40図4
4	桑原田中遺跡	小野川右岸 石手川左岸	33.0m	平坦地	第42図12
5	東山鳶ケ森遺跡	小野川左岸	43.0m	山頂	第40図3
6	天山天王ケ森遺跡	小野川右岸	30.0m	山頂	第41図9
7	久米小学校遺跡二次調査区	小野川右岸	約44.0m	平坦地	第40図5
8	久米窪田遺跡　Ⅳ区	小野川右岸	49.0m	平坦地	第41図6
9	久米窪田遺跡　Ⅴ区	小野川右岸	50.0m	平坦地	第42図10・11
10	五郎衞谷遺跡	小野川右岸	73.0m	山頂	第41図7・8
11	釜ノ口遺跡　一次調査区	小野川右岸	28.0m	平坦地	有舌尖頭器
12	福音寺小学校構内遺跡	小野川右岸	約30.0m	平坦地	楔形石核・剝片
13	久米山田池遺跡	小野川右岸	87.0m	山頂斜面	ナイフ形石器
14	久米高畑遺跡　五次調査区	小野川右岸	35.0m	平坦地	楔形石核・剝片
15	樽味四反地遺跡	石手川左岸	39.5m	平坦地	ＡＴ火山灰
16	西稲葉遺跡一次調査区	石手川左岸	38.0m	平坦地	ＡＴ火山灰
17	西稲葉遺跡二次調査区	石手川左岸	38.0m	平坦地	角錐状石器
18	経石山古墳遺跡　一次調査	石手川左岸	39.6m	平坦地	楔形石核・剝片
19	祝谷丸山遺跡	石手川右岸	90.0m	斜面	楔形石核・剝片
20	祝谷六丁場遺跡	石手川右岸	60.0m	斜面	楔形石核・剝片 横長剝片石核
21	伊台惣部遺跡	石手川右岸	140～150m	斜面	第42図13
22	長田遺跡	砥部川左岸	50.0m	斜面	楔形石核・剝片 台形様石器
23	城ノ向遺跡	砥部川左岸	50.0m	斜面	楔形石核・剝片 スクレイパー・尖頭器
24	宮内大畑遺跡	砥部川右岸	58.0m	平坦地	細石核・楔形石核・剝片
25	土壇原遺跡　Ⅵ区	重信川左岸 砥部川右岸	60.0m	平坦地	ナイフ形石器
26	谷田池遺跡	重信川左岸 砥部川右岸	75.0m	斜面	楔形石核・剝片
27	西大池遺跡	重信川左岸 砥部川右岸	67.0m	斜面	楔形石核・剝片
28	樽味遺跡	石手川左岸	約43.0m	平坦地	ＡＴ火山灰
29	上三谷岩崎遺跡	重信川左岸	36.0m	斜面	ナイフ形石器

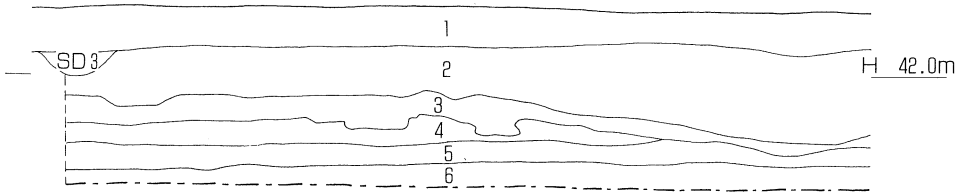
樽味四反地遺跡西壁土層図



1 Ⅰ耕作土 Ⅱ床土(ミンチ状の土器含む)
3 濃黒褐色シルト(炭・鉄分含む)
4 淡黄色シルト
5 灰色砂
6 濃黄色シルト＋砂礫土
7 黄灰色砂(微砂・炭含む)
8 淡黄色砂質土(微砂・鉄分含む)
9 淡茶褐色砂質土(微砂) (微砂・
10 淡黄灰色シルト
11 灰色砂
12 淡黄灰色砂(微粒子)
13 淡茶褐色粘土(鉄分含む)
14 黄灰色砂(7よりやや明るい)
15 黄灰色砂(5～10cm大の礫多し)
16 火山灰

0 1 2m
(S＝1：40)

樽味遺跡北壁土層図



1 表 土　2 褐色粘質土　3 角礫混じり黄色粘質土
4 褐色粘質土　5 茶褐色砂質土　6 暗褐色砂礫

0 1 2m
(S＝1：40)

第39図　樽味四反地・樽味遺跡ＡＴ検出状況

〔解説〕姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ火山灰）について

鹿児島湾北部を占める姶良カルデラより噴出した姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）は、噴出年代を^{14}Ｃ資料等により約2.1万～2.2万年前とされている。この降下テフラの分布は、日本列島をごく短時間で広く覆い、町田・新井（1976）によって関東地方から新潟・福島県の東北地方まで、広範囲にその存在が追跡されている。これにより、考古学・土壌学・火山学・年代学研究を確立する上で広域的時間示標層として最重要な鍵層とされ、多方面からその研究がなされている。

近畿・中国・四国地方に於ても、ＡＴ火山灰の検出例が報告されており近畿地方では、ＡＴ火山灰は約10cm～20cm（町田・新井　1976）程度の厚さがあると推定され、奈良県二上山遺跡・高槻市郡家今城遺跡等からＡＴ火山灰が旧石器文化層中に縦長剝片を中心とした遺物とともに検出されている。

中国地方では、岡山県の野原遺跡早風Ａ地点からＡＴ火山灰が確認され、瀬戸内地方に分布する多くのナイフ形石器と共通するとされる遺物の検出があり、注目されている。

四国地方では、ＡＴ火山灰は約40cm～50cm（町田・新井　1978）の厚いテフラ層として堆積したと推定されるが、これまでに遺物と関連した明瞭かつ積極的な報告例は見られない。

近年、これら広域火山灰を層序へ利用される例は多いが、その示標テフラ層が一次的なものなのか二次的なものなのかという判定が重要な課題となっている。

（小笠原善治）

在確認されている樽味・樽味四反地遺跡（宮本　1988・梅木　1989）のＡＴ火山灰等（第39図）の広域火山灰の当地域におけるあり方を詳細に検討し、旧石器時代遺物の出土層位に係わる基礎資料の理解と蓄積が急務と考えられる。

２．遺物観察

小野川流域の旧石器時代遺物群は、瀬戸内を代表する国府期の遺物を含め瀬戸内技法を逸脱したと考えられるナイフをはじめ小形ナイフ形石器・角錘状石器・有舌尖頭器等の後期旧石器時代遺跡群が、十亀・長井両氏によって精力的に報告されている。こうした資料と一部重複するものであるが、同流域の石器群の中でナイフ形石器の範疇として捉えることが可能な資料を提示し、検討を加えることとしたい。

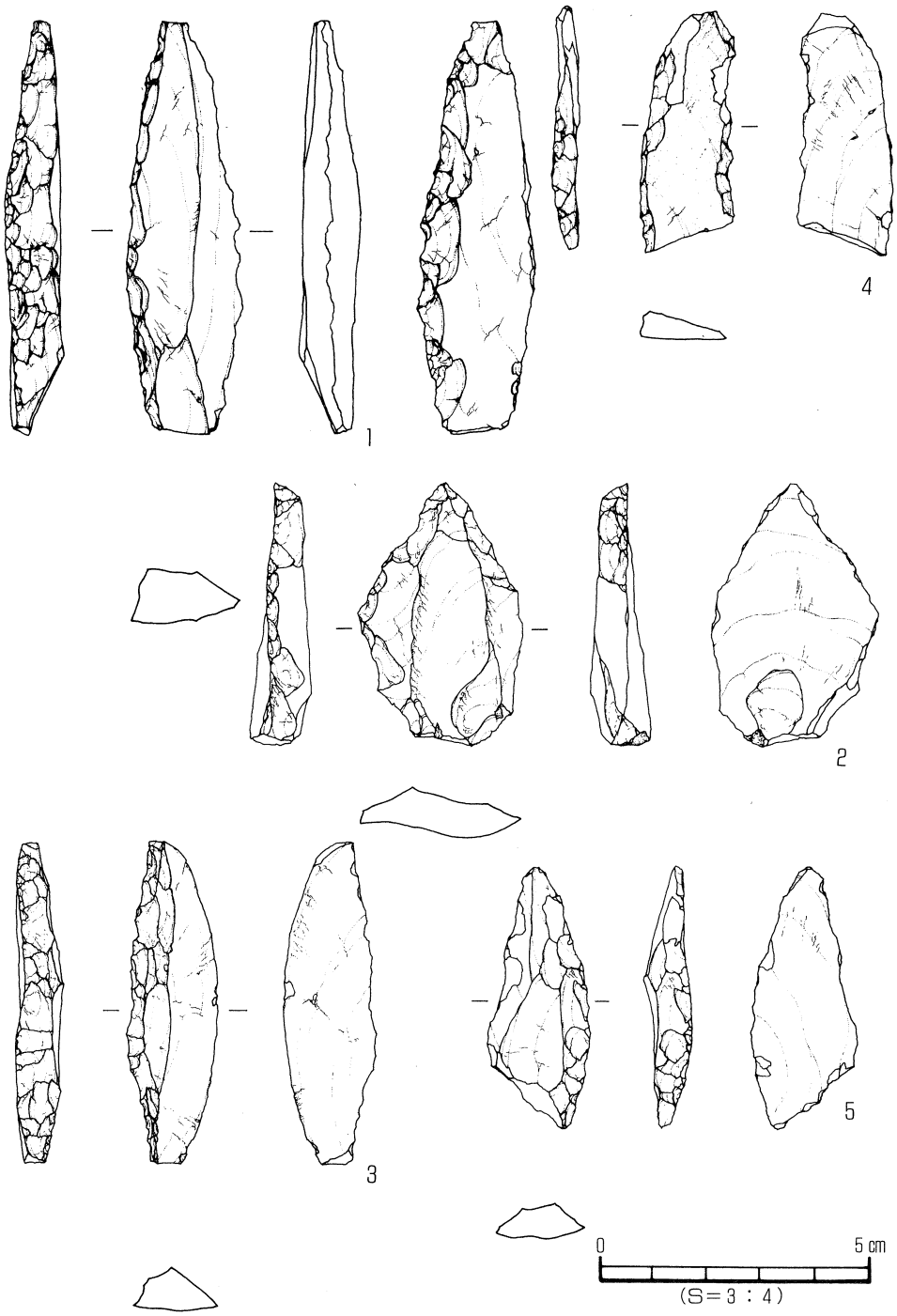
第40図１・２どちらもサヌカイト製資料であり、隣接する調査区より検出された資料である。１は、横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティヴ面で左側にはネガティヴ面よりの比較的甘い整形加工痕が見られる。整形調整部位は、左側縁の調整に終始し、一部先端部に意識的な作り出しの加工痕を有する。左面は、素材剥片のネガティヴ面２枚を留める。左側側縁は、ポジティヴ面からのブランティングが入念に施されている。底面・ネガティヴ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

２は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面はポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。背面は、右刻調整時のネガティヴ面を残し、剥離方向は一定の方向を定めない。剥離調整部は、両側縁に認められ先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティヴ面から比較的粗雑な整形加工が施されている。

３は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティヴ面で両側部が欠損している。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり整形加工による剥離面で入念な整形加工が認められる。左側側縁は、ポジティヴ面からのブランティングが入念に施されて打面がカットされている。一部基部の作り出しにおいては背面よりの整形加工が見られる。底面・ネガティヴ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

４は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、風化が比較的進んでいる。右面は、ポジティヴ面で両側部が欠損している。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり右側縁上端に小さく底部を留める。左側側縁は、ポジティヴ面からのブランティングが入念に施されて打面がカットされているネガティヴ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

５は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められ端部が欠損している。左面は、素材剥



第40図　　松山平野の旧石器時代遺物(1)

片のネガティヴ面であり整形加工による剥離面でポジティヴ面剥離方向と同一方向の整形加工が認められる。素材剥片のネガティヴ面2枚を留める。右側側縁は、ポジティヴ面からのブランティングが施されて打面がカットされている。左側縁に底面を残す。底面・ネガティヴ面・主要剥離面が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

6は、赤色チャート製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器で、下部欠損状況と観察される。左面の右側縁はポジティヴ面からの入念なブランティングが施されて打面がカットされている。背面・主要剥離面の剥離方向が逆転することから翼状剥片のそれとは異なる剥片生産過程を経て採取された剥片素材に整形加工されたナイフ形石器と考えられる。

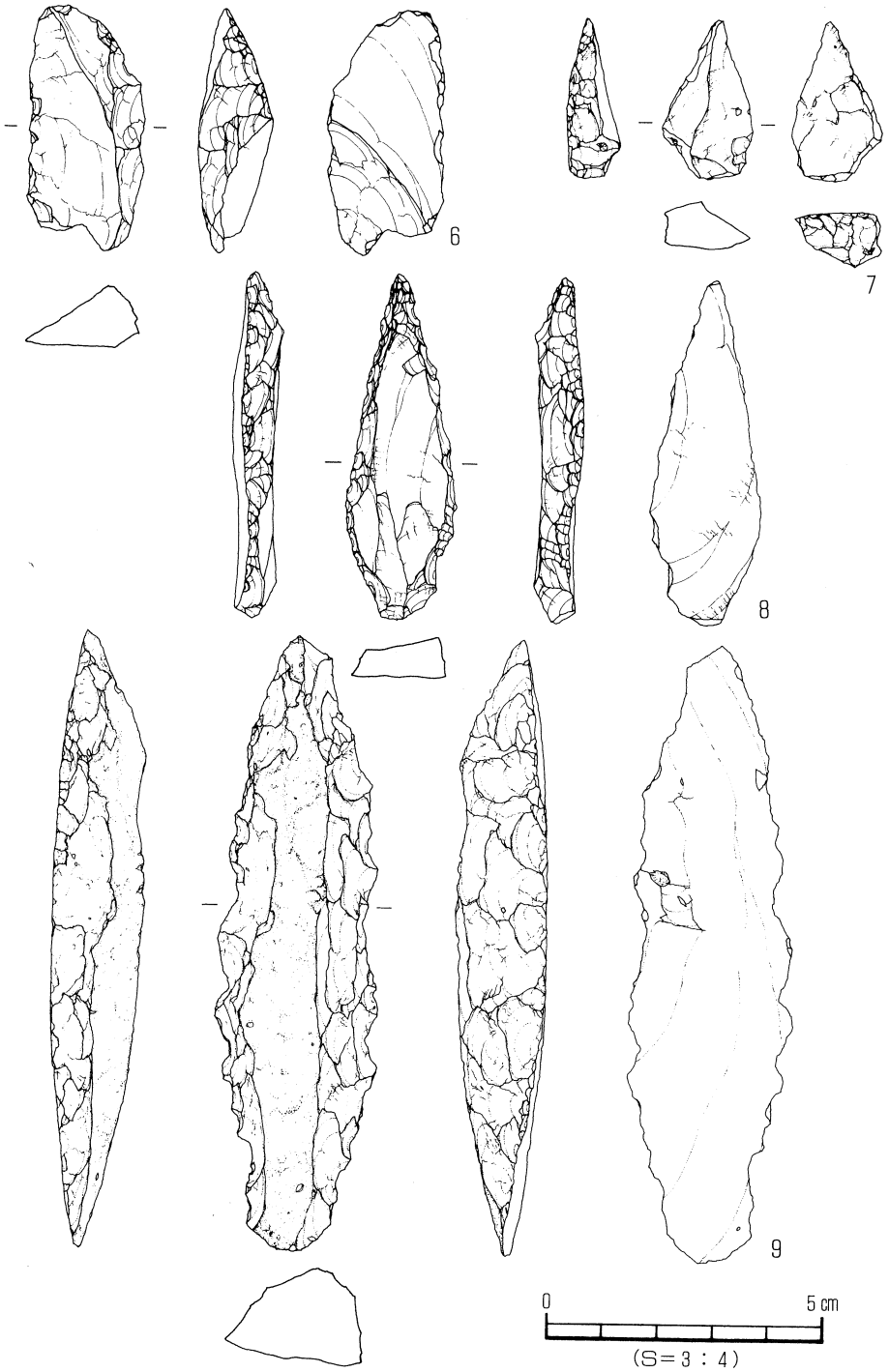
7は、サヌカイト製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面は、ポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり左側に石核の底面を留める。左側側縁から基部にかけては、ポジティヴ面からのブランティングが入念に施されて打面がカットされ、整形加工により小形ナイフ形石器を呈する。背面ネガティヴ面・主要剥離面の剥離方向は、同一であり打点位置の移動が観察される。

8は、ホルンフェルス製の横長剥片を素材としたナイフ形石器である。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり整形加工による剥離面でポジティヴ面剥離方向と同一方向の整形加工が認められる。左側縁下位に底面を残す。両側縁は、ポジティヴ面から（先端部は一部陵上剥離）のブランティングが施されて特に先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、断面台形状の角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

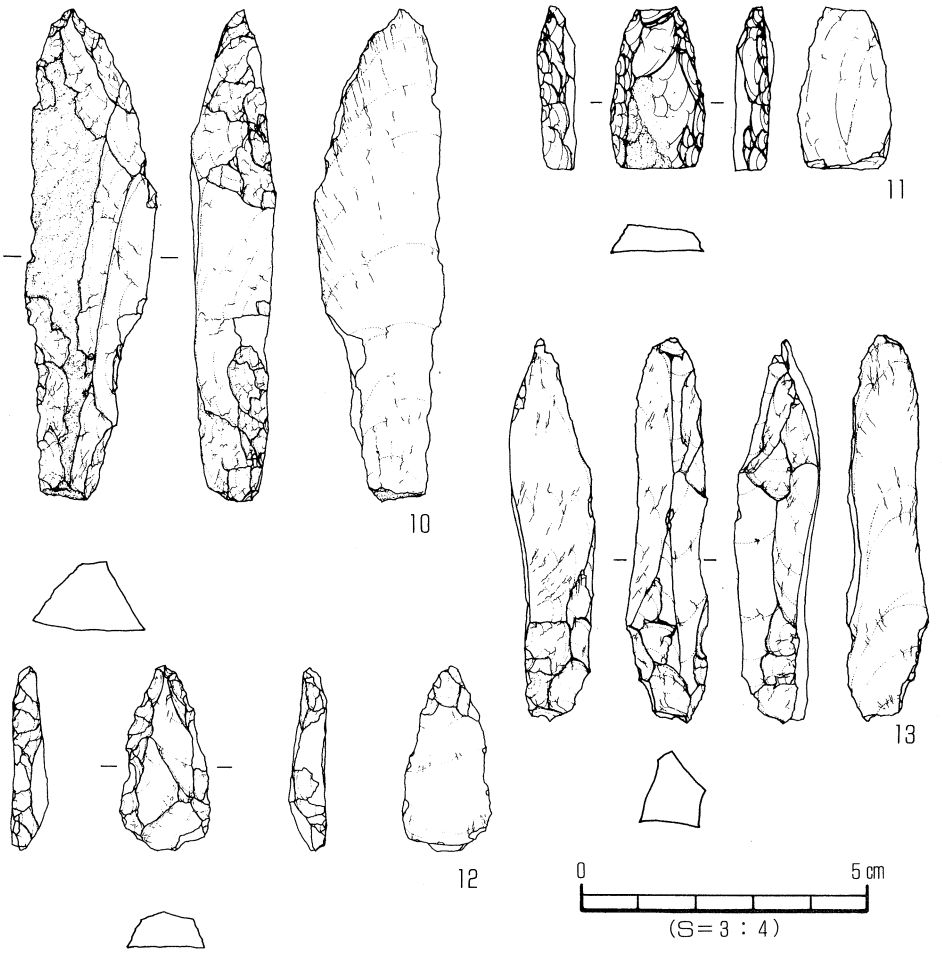
9は、サヌカイト製の礫面を残す大型幅広剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。意識的に素材剥片の剥離方向に対して垂直（横長）に素材を取りポジティヴ面からの角度の比較的粗雑な整形加工が施されて打面がカットされている。背面中央には、礫面を留める。両側縁は、ポジティヴ面からのブランティングが施されて断面台形状の大形角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

10は、サヌカイト製の礫面を残す不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達している。背面は、石核調整時のネガティヴ面を残し、礫面を留める。整形調整部は、先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティヴ面から比較的粗雑な整形加工が施されて角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

11は、赤色チャート製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面はポジティヴ面であり整形加工により打面がカットされている。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり整形調整部は、両側縁に認められポジティヴ面から比較的入念な整形加工が施され断面三角形状の角錘状石器（舟底形石器）を呈する。



第41図　松山平野の旧石器時代遺物(2)



第42図　　松山平野の旧石器時代遺物(3)

12は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティヴ面であり基部の作り出しによる整形加工により打面がカットされている。左面は、素材剥片のネガティヴ面であり剥離方向は一定の方向を定めない。整形調整部は、部分的に両側縁に認められ先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティヴ面から比較的粗雑な整形加工が施され断面台形状の角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

13は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティヴ面でポジティヴ・バルブが発達している。背面は、素材剥片のネガティヴ面を残し先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティヴ面から比較的粗雑な整形加工が施されて角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

ま　と　め

以上、現在までに検出された流域の一部ナイフ形石器の観察を行った。これらの遺物群の特長として次の点に留意することができる。近畿・西瀬戸地方のサヌカイト原産地を中心として西日本一帯に検出される瀬戸内技法を主体とした国府期のナイフ形石器文化の直接的影響を受けた資料として翼状剥片素材の国府型ナイフ形石器第40図１・３・４・５、さらに石材・素材剥片の違いは認められるものの比較的国府文化期の剥片剥離技術の影響を受け横長剥片素材に規制されたと認められる第41図６、石材・素材剥片の違いは認められるものの小形ナイフ形石器として第41図７・第42図11・12、尖頭器的機能を有すると考えられる角錘状石器として第41図９・第42図10・13、剥片尖頭器的様相を持ち先端部と基部に意識的な整形加工が施された第40図２など、近畿・西瀬戸地域にみられる後期旧石器文化のナイフ形石器の形式変化に大きくは、差異が認められない。しかしながら、一般的な後期旧石器時代の瀬戸内的様相を呈するものの今後、石器組成や剥片剥離技術において十分な検討を要している。

まとめ

小野川流域に見られるナイフ形石器の一部資料を概観すると多彩な剥片剥離技術の存在を考慮することができ、従来言われている国府期の瀬戸内技法関連資料が主体を占めるとされた概念は捨てざるをえない。また、形態的にもバリエーションを持つことからかなりの時間差を前提とした資料操作の必要性を持つものと考えられる。調査時におけるこれらのナイフ形石器に伴う石核・剥片類の資料的価値認識の重要性とともに構造的理解の不足からユニット・ブロック認識がなされないままで放置されている石器群の位置づけがなされはじめて流域の旧石器時代様相の研究・解明が緒につくものと期待される。

また、サヌカイト原産地から遠く離れた当地域においての特長として石核・剥片の検出量が激減する状況にあり、在地の石材選択に際し石器製作に係る何らかの集団間の規制を考慮することもでき本地域の旧石器文化様相は、石材消費地として瀬戸内の旧石器文化研究の重要な位置を占めているものと考えられる。

現在のところ、こうしたナイフ形石器以外にも楔形石器と呼ばれる石器群の存在が解明されつつあり、共伴する土器を持たないことから旧石器的様相を持つものとして取り扱われている。現段階においてまだ石器群の詳細な状況を把握するには至っていないが、バイボラー・テクニックによる剥片剥離技術の存在は、確実に当地域の中で継続し縄文前期の段階まで山間部において継承されている。さらに、有舌尖頭器も平野部において検出されつつあり今後、微高地・低位段丘・埋没丘陵を含めた海抜約30M～50M平坦地位置において有舌尖頭器を石器組成とするユニット群の検出も近いものと考えられる。

小野川流域の旧石器文化と題して、筆者の不勉強から流域のナイフ形石器の資料紹介に終始し流域の旧石器時代に十分な検討を与えることができなかった事をお詫び申し上げるとともに資料提供にあたり梅木・山之内両氏に十分なご配慮頂きお礼申し上げます。また、特に小笠原氏には、作図・資料検討・執筆に渡り労を煩わし、深く謝意を表します。

〔参考文献〕

木崎　康弘　1988　「九州ナイフ形石器文化の研究　－その編年と展開－」『旧石器考古学』37　旧石器文化談話会　PP.25-43
松藤　和人・柳田　俊雄・佐藤　良二・久保　弘幸・中川　和哉
1989　「座談会：近畿・瀬戸内地方における旧石器編年研究の回顧と展望」『旧石器考古学〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉』38　旧石器文化談話会　PP.3-18
柴田喜太郎　1989　「大阪府八尾南遺跡の堆積物の検討」『旧石器考古学〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉』38　旧石器文化談話会　PP.58-60
森本　晋・岡本　勝行・清水　和明
1989　「長原遺跡88－４次調査地出土の旧石器」『旧石器考古学〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉』38
松藤　和人　1974　「国府型ナイフ形石器をめぐる諸問題」『プレリュード』19　旧石器文化談話会　PP.35-49
奈良県立橿原考古学研究所編
1984　「二上山北麓石器製作遺跡の調査　－清風荘第３地点遺跡・滝ヶ谷遺跡－」『奈良県文化財報告書』第42集
㈶広島県埋蔵文化財調査センター
1989　「冠遺跡群〈Ｄ地点の調査〉」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』第80集
加藤　晋平　1990　「東アジアの旧石器文化」『東アジアと日本〈特別考古学講座講演集〉』市制百周年記念　福岡市埋蔵文化財センター　PP.4-21
萩原　博文　1978　「ナイフ形石器　－統計処理による機能の推定－」『中山遺跡の研究(I)　〈遺物篇１〉』　平戸市教育委員会　PP.1-26
大分県教育委員会
1982　「津留遺跡発掘調査概報　－国道326号改良工事に伴う発掘調査－」
広島大学統合移転地理埋蔵文化財調査委員会
1990　「広島大学統合移転地理埋蔵文化財発掘調査年報Ⅷ」
絹川　一徳　1989　「徳島県土柱周辺の旧石器」『旧石器考古学』39　旧石器文化談話会　PP.55-63
飯島　正明　1989　「大阪府箕面市宮ノ原遺跡採集の角錘状石器」『旧石器考古学』39　旧石器文化談話会　PP.63-66
有本　雅己・有本　昭子
1989　「鶴峯荘第２地点東の新資料」『旧石器考古学』39　旧石器文化談話会　PP.75-76
吉村　公男・深瀬　早人・佐藤　良二
1989　「馬見丘陵におけるナイフ形石器の一例　－奈良県河合町フジ山古墳付近採集－」『旧石器考古学』39　旧石器文化談話会　PP.77-76
八木　浩司　1987　「西八木層中の火山灰の起源」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集　国立歴史民俗博物館　PP.95-102
八木　浩司　1987　「明石海岸の地形学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集　国立歴史民俗博物館　PP.103-115
松藤　和人　1987　「西日本におけるＡＴ以下の石器群」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集　国立歴史民俗博物館　PP.205-232
岡村　道雄　1987　「日本前期旧石器研究の到達点」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集　国立歴史民俗博物館
十亀　幸雄　「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剝離技術」『古代学研究』第88号　PP.1-10
橋　昌信　1978　「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1)　－今峠遺跡－」『別府大学博物館報告№２』　PP.15-22
井関弘太郎　1988　「沖積層・沖積平野の形成環境（総括）」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』　PP.1-5
大森　博雄　1988　「日本島河川の縦断面曲線の関数形と沖積平野の類型との関係」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』PP.6-15
斉藤　亨治　1988　「第四紀末期における日本の扇状地礫層の堆積期」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』

第９章　来住台地周縁の遺跡調査の成果と課題

本書は、地方では希な古代の大規模な官衙遺構と寺院跡を確認した久米高畑遺跡、来住廃寺跡の歴史的環境や古代における来住台地の集落形態を明らかにすることを大目的とした。本章では鷹子町遺跡１次調査、久米窪田古屋敷Ｃ遺跡、来住町遺跡１次調査、同３次調査、久米高畑遺跡８次調査の調査成果を中心に来住台地上に立地した集落の様相を概観する。

旧石器時代～縄文時代

台地及び台地周辺で出土（表採を含む）した旧石器時代遺物の量は、平野でも有数の地域である。今回、第８章で重松佳久氏は、来住台地を含む小野川流域の旧石器時代遺物の資料収集と遺物の検討を行った。松山平野での旧石器遺跡の存在は想定されてはいるが、未だ調査に恵まれず、資料集成と断片資料による技法分析に留まらざるを得ないのが状況である。しかし、数少ない資料の観察から、微差ではあるが松山平野固有の技法の提唱が可能であることを提示したことは松山平野の同時代の研究にとっては一石を投じたものとして評価されよう。

弥生時代

来住台地上では、集落を区画したと考えられる溝状遺構（環濠状遺構）が、台地南部の来住Ｖ遺跡より検出されている。来住Ｖ遺跡からは、幅2.3～2.9ｍ、深さ70㎝、断面「Ｕ」字状をした溝状遺構が２条検出された。２条の溝は、18ｍの間隔を測る。時期は、両遺構とも前期末～中期初頭に比定されている。また、台地の北西約１㎞にある福音小学校遺跡からは、後期の溝状遺構（幅約0.7～1.0ｍ、深さ約70㎝、断面「Ｖ」字状）が180ｍに渡り検出されている。今回報告した久米窪田古屋敷Ｃ遺跡の中期末～後期初頭に比定されるＳＤ４は、検出長は充分でないものの、規模や形態より、その性格は先述の二遺跡と同様、集落区画の施設と考えられる可能性は高い。これ等の資料は、来住台地を含めた地域には、断続的（現時点で）ながらも集落区画に溝を設置する集落が存在することを裏付けるものである。ただし、検出例や検出面積が少なく、その全様は不明であることより、集落形態までは想定できない。今後は、検出事例の特に延長上にあたる地域は確認調査においても注意を要し、溝状遺構検出と集落範囲の確定に努力しなければならない。

この他、注意を要する遺構として、来住町遺跡３次調査地より検出された平面形が三日月形をした土壙ＳＫ２があげられる。同様なものは、市内小坂釜ノ口遺跡１次調査（２基）、同遺跡２次調査（１基か）、同遺跡４次調査（２基か）で検出例がみられる。土壙の詳細は不明であるが、全てのものが弥生後期の集落址内より検出されていることは、その性格や時期を考えるうえで、重要な資料となるものであろう。

古墳時代

今回の報告では、古墳時代と特定できる遺構の検出は少数であった。

久米高畑遺跡８次調査ＳＫ４からは、５世紀代の遺物が出土している。底部に焼成前の小円孔をもつ甑形土器は、５世紀代のものとしては平野でも例が少なく、希少な資料として注目されるものである。

来住台地上の古墳時代は、弥生時代や古代に比べ検出される遺構や遺物が少ない感がある。この事象については、具体的に資料による裏付けは現時点においては難しいが、既存の調査資料の整理と分析、さらには今後の調査により解決しなければならない大きな課題である。

飛鳥・奈良時代

来住台地では白鳳時代寺院址の来住廃寺跡、100ｍを越える方形区画を有する回廊状遺構が少なくとも三棟が確認され、さらに「久米評」の線刻をもつ須恵器が出土している。よって来住台地は、松山平野の７世紀代の中核地として機能していたと考えられている。久米高畑遺跡８次調査地は、方形区画遺構に隣接し、かつ「久米評」線刻の土器出土地点とは50ｍの距離の地点にある。しかし、調査では、これ等に直接関係する資料は得られなかった。それは、近現代の造成により弥生時代以降の包含層と遺構が削平され消滅したことや、遺構・遺物がわずかに残存するに過ぎなかったためである。そして、調査面積が狭いこともひとつにあげられる。今回の調査では、一辺１ｍに近い掘り方と径20㎝におよぶ柱痕をもつ柱穴痕は確認されなかった。ただし、当地における一連の官衙関連構築物の有無は未調査地である隣接地の調査を待ち判断しなければならないだろう。

次に、久米高畑遺跡と来住廃寺跡に東隣する来住町遺跡の調査を取り上げる。１～３次の調査が行われた（２次調査は未報告）。来住廃寺の東側に位置する１・２次調査では、溝状遺構が多数検出され、掘立柱建物址は未検出であった。遺物は７世紀代の須恵器が少量、包含層中より出土している。１・２次調査地では住居に関する資料は得られなかった。３次調査地は、１・２次調査地の北250ｍにあり、久米高畑遺跡内の北にある方形区画遺構の東400ｍにあたる。同地では、７世紀代と考えられる遺構が検出されている。特に、ＳＢ１は（調査者は７世紀と特定していない）一辺60～90㎝の隅丸方形の柱穴で、桁行３間・梁間２間で構築される掘立柱建物である。これは、久米高畑遺跡内で検出される遺構と同様な規模と形態を示す。３次調査地は、１・２次調査地とは様相を異にしており、その内容は久米高畑遺跡に類似している。このことは、久米高畑遺跡の東域が３次調査地以東に求められる可能性を示唆するものであり、３次調査地ＳＢ１の検出は久米高畑遺跡の集落構造範囲を知る上で貴重な資料となるものと考える。

平安時代

鷹ノ子町遺跡１次調査地より平安後期に比定される土壙墓が検出された。松山平野では平安時代墳墓の確認事例は少なく、かつ木棺墓で鏡を副葬していた墓の確認は初例である。また、墓からは土師器の坏身と釜形土器が出土しているが、出土状況より棺内に置かれた可能性が高く、当時の祭祀形態の一つが知れる資料として注目されるものであろう。

図　　版

図版例言

1．遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カ　メ　ラ	アサヒペンタックス67
	ニコンニューＦＭ２　他
レ　ン　ズ	ペンタックス67　75㎜Ｆ4.5　他
	ズームニッコール28～85㎜　他
フィルム	ネオパンＳＳ

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨ／ビュー45Ｇ
レ　ン　ズ	ジンマーＳ240㎜Ｆ5.6　他
ストロボ	コメット／ＣＡ－32　２灯・ＣＢ2400　２灯（バンク使用）
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白　黒　　プラスＸパン４×５
	カラー　　エクタクロームＥＰＰ４×５

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。（白黒に限る。）

使用機材：

引　伸　機	ラッキー450ＭＤ
	ラッキー90ＭＳ
レ　ン　ズ	エル・ニッコール135㎜Ｆ5.6Ａ
	エル・ニッコール50㎜Ｆ2.8Ｎ
印　画　紙	イルフォードマルチグレードⅢＲＣ

〔参考〕『埋文写真研究』Ｖol．１　1990、Ｖol．２　1991

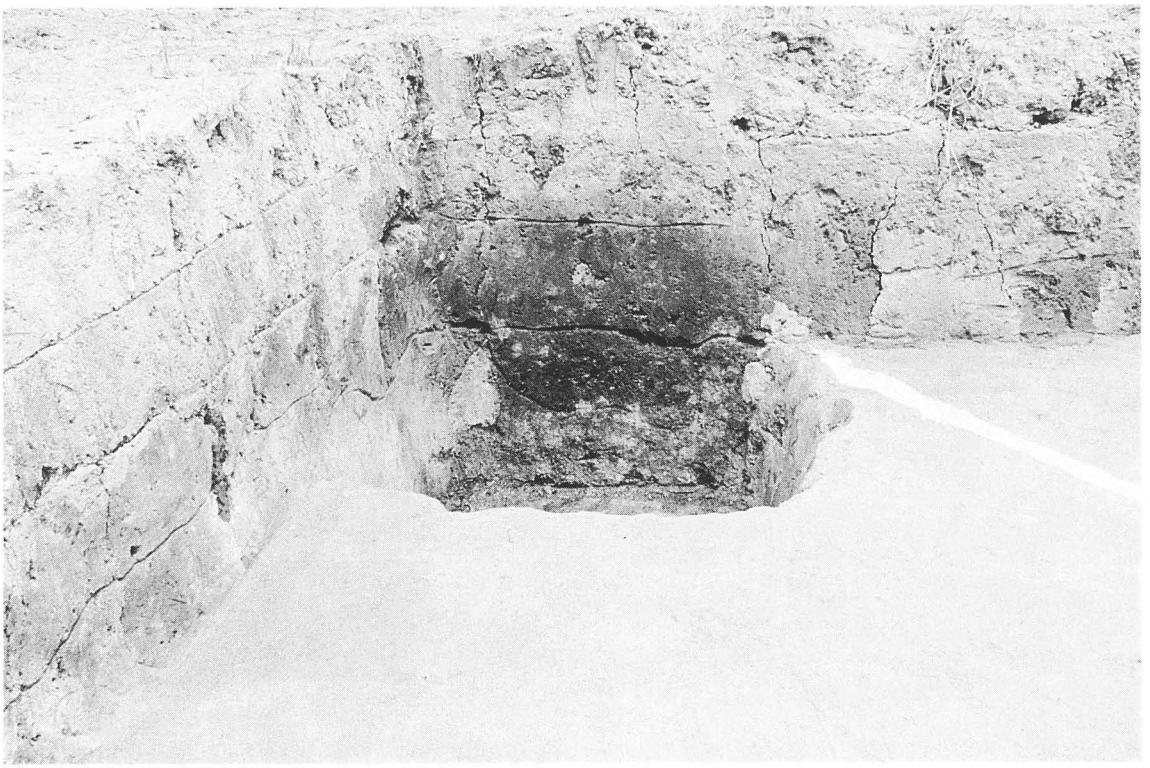
〔大西朋子〕

1．調査地全景〔調査前〕（南東より）

2．調査地全景〔現在〕（南東より）

図版二

1．北東隅土層（南より）

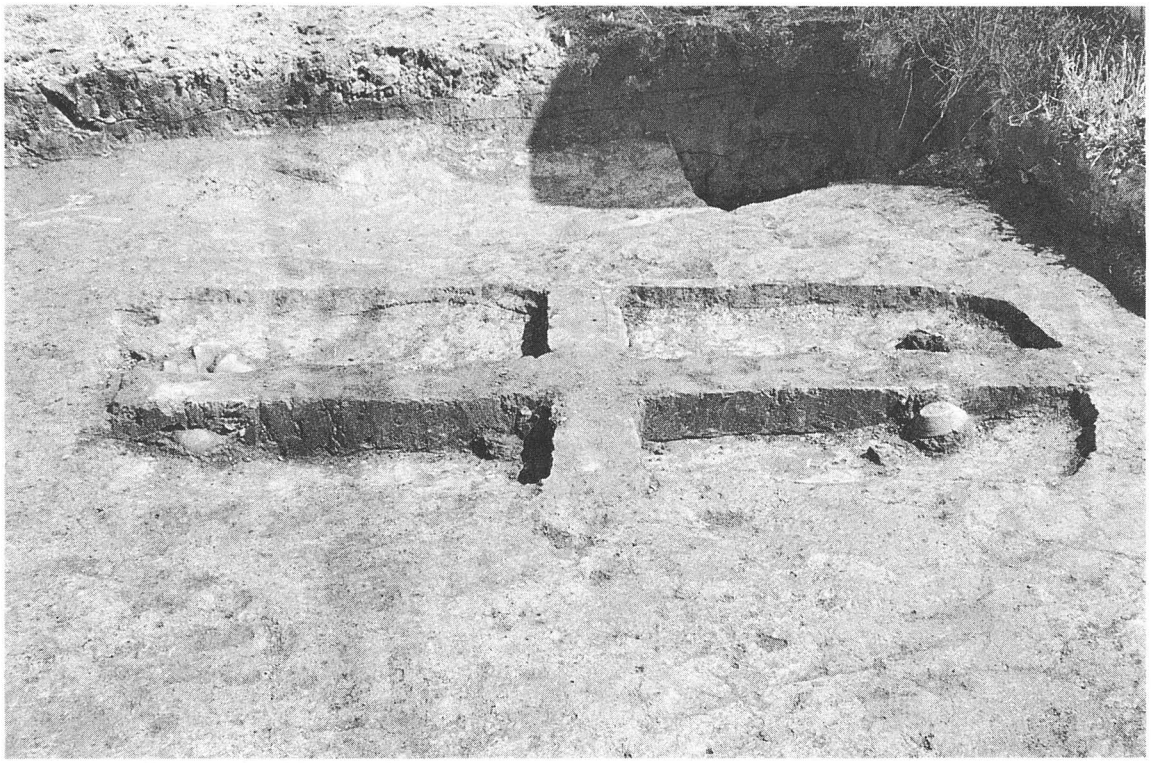


2．北西隅土層（南より）

1．西半区遺構検出状況（東より）

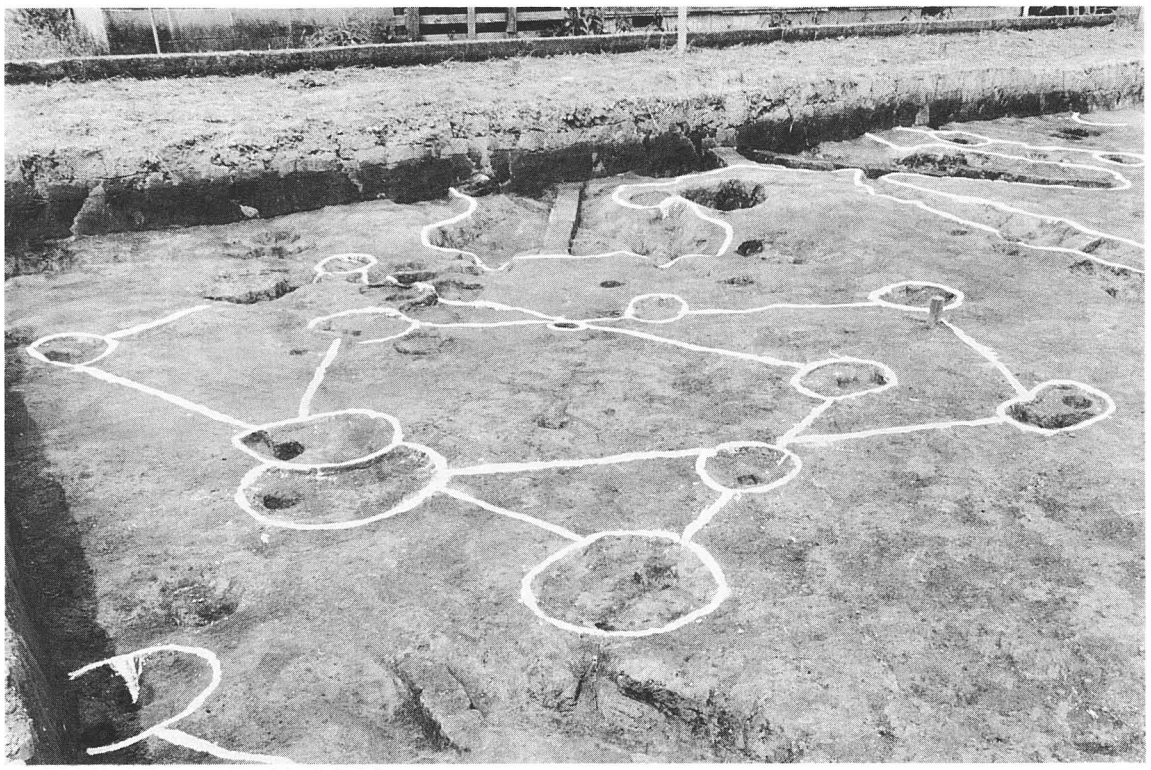
2．東半区遺構検出状況（西より）

図版四



１．ＳＫ3 遺物出土状況（南西より）

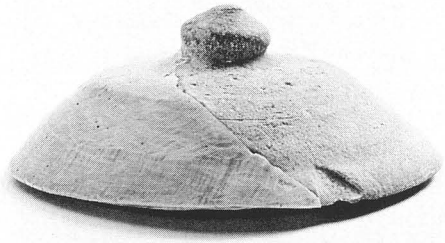
2．ＳＫ3（南西より）



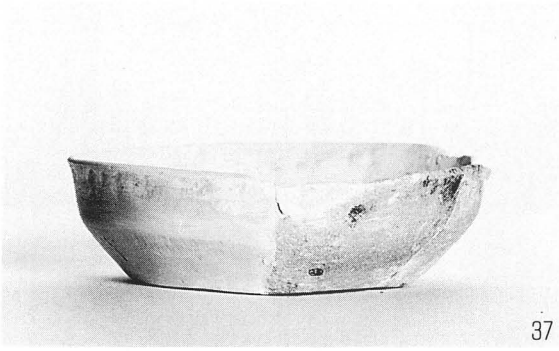
1．掘立柱建物１・２号（南東より）

2．土師器小皿出土状況（南より）

1

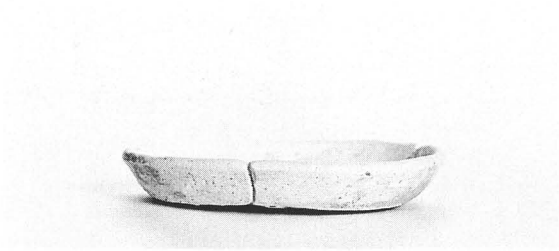


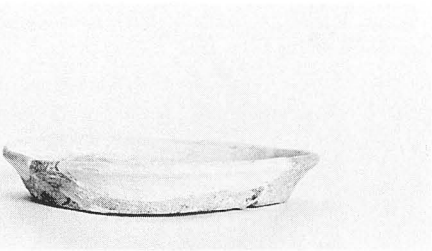
8

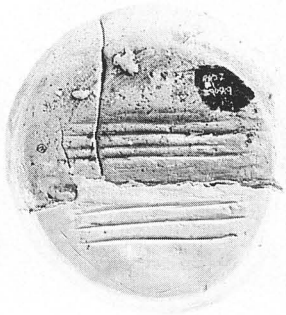


37

14







21

31

1．ＳＫ3 出土遺物(1)　　2．包含層出土遺物(8･14･21･31･37)

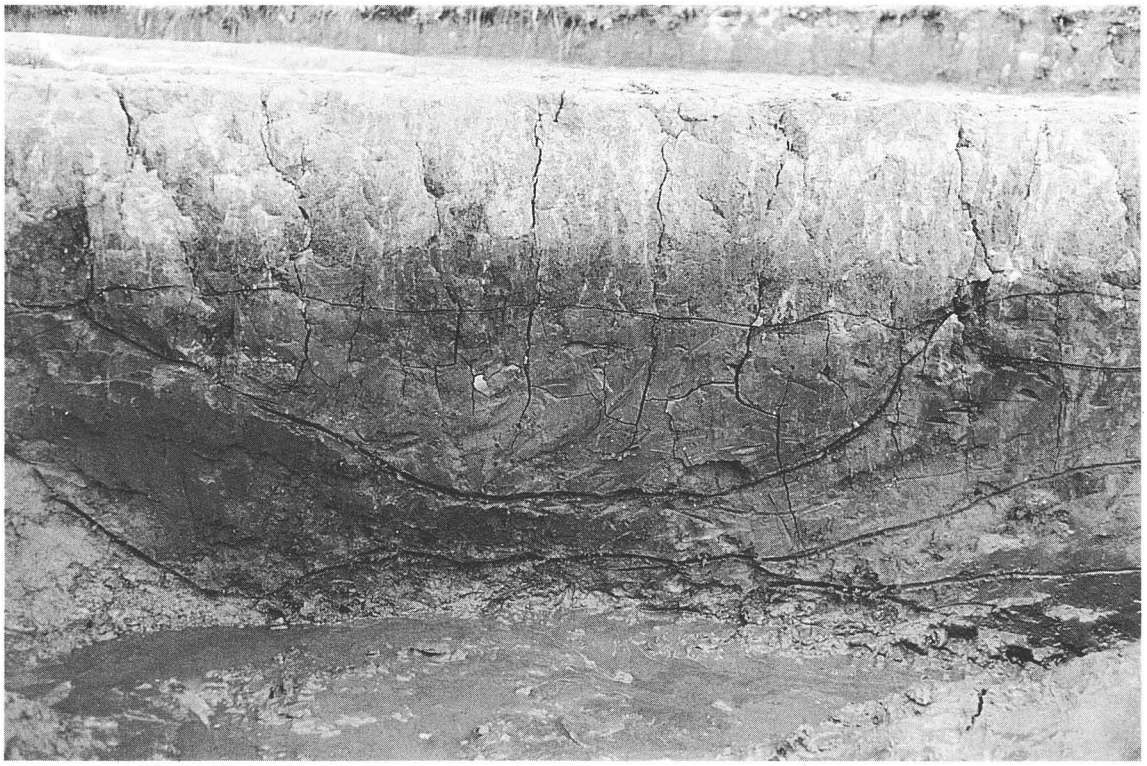
1．調査地全景〔現在〕（南東より）

2．北壁土層〔基本層位〕（南より）

1．遺構検出状況①（北より）

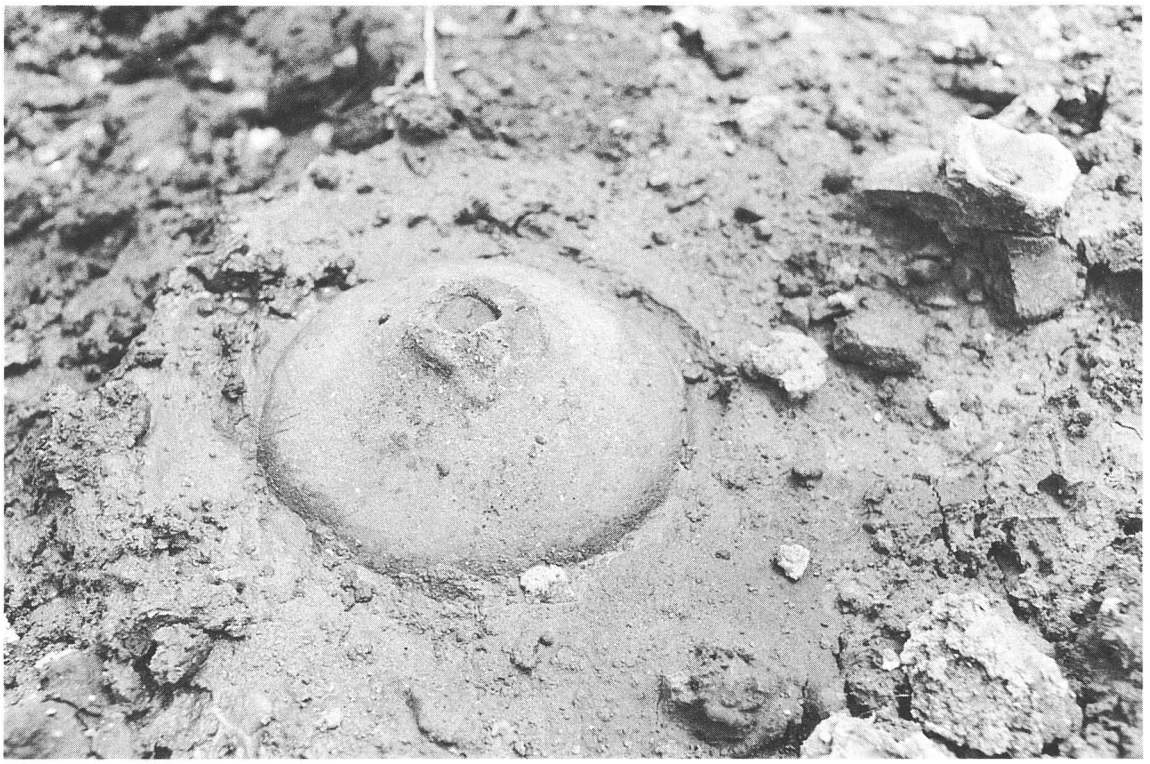
2．遺構検出状況②（北東より）

１．ＳＤ4（北西より）

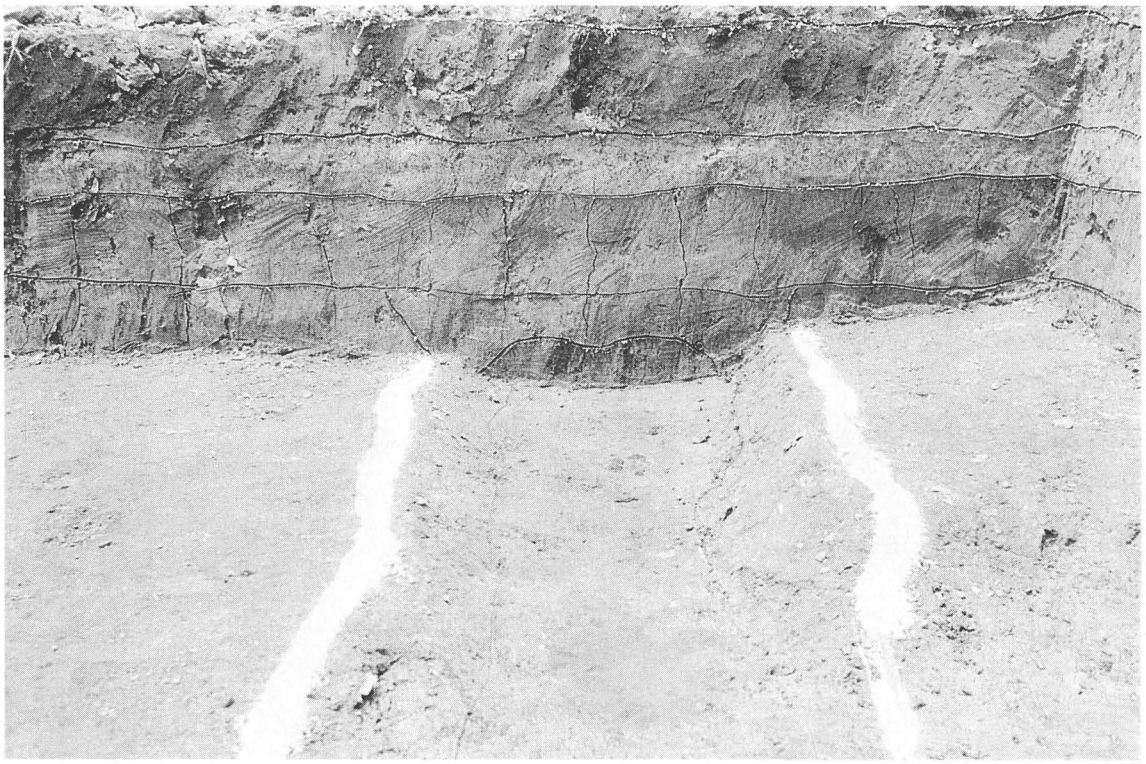


2．ＳＤ4 土層（北西より）

1．ＳＤ4 遺物出土状況（南より）

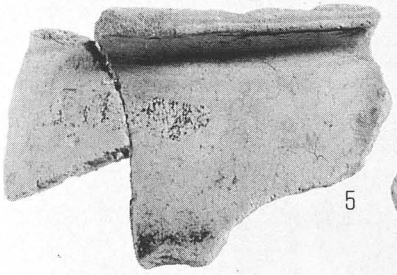


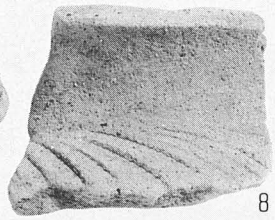
2．ＳＤ4 溝床出土品（南より）

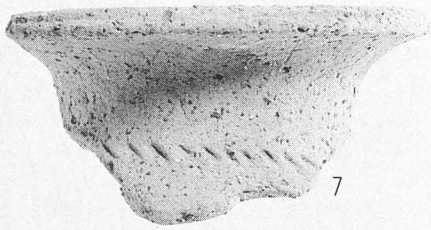


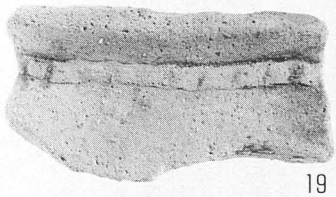
1．ＳＤ2 断面（南より）

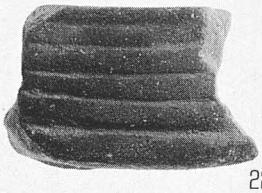
2．作業状況（西より）


5


8


7


19


22

25

16

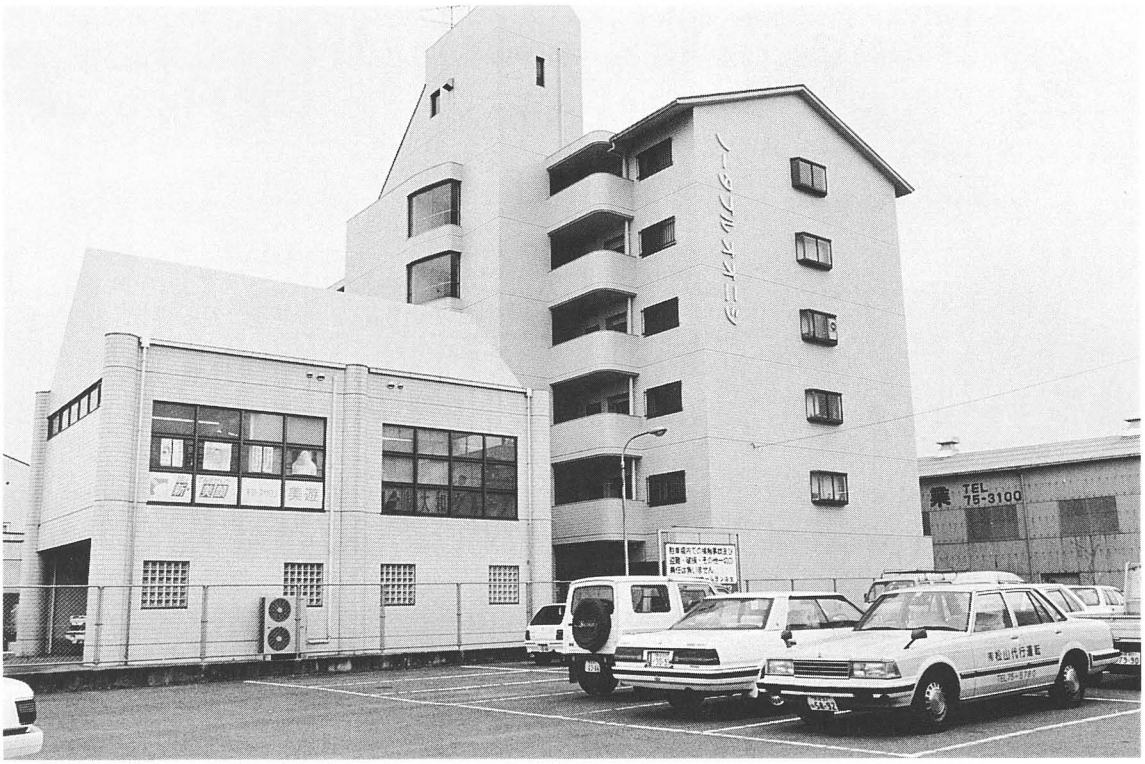
16

17

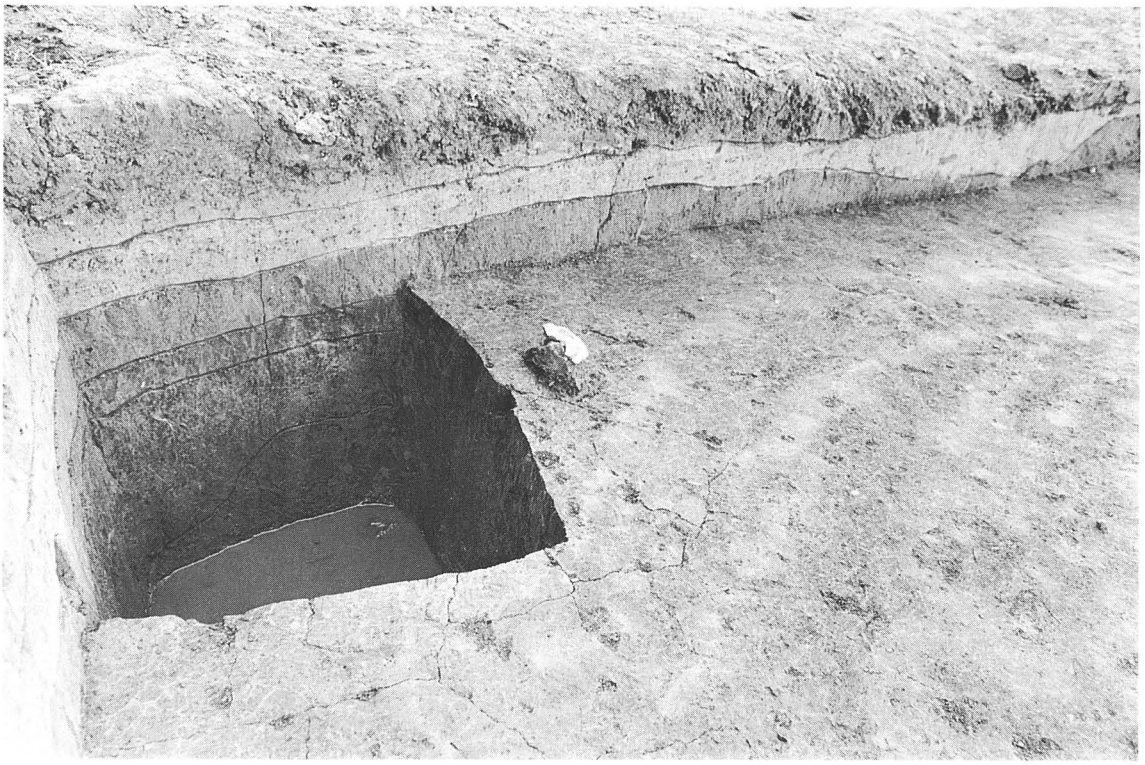
18

１．ＳＤ4 出土遺物

1．調査地全景〔調査前〕（南西より）

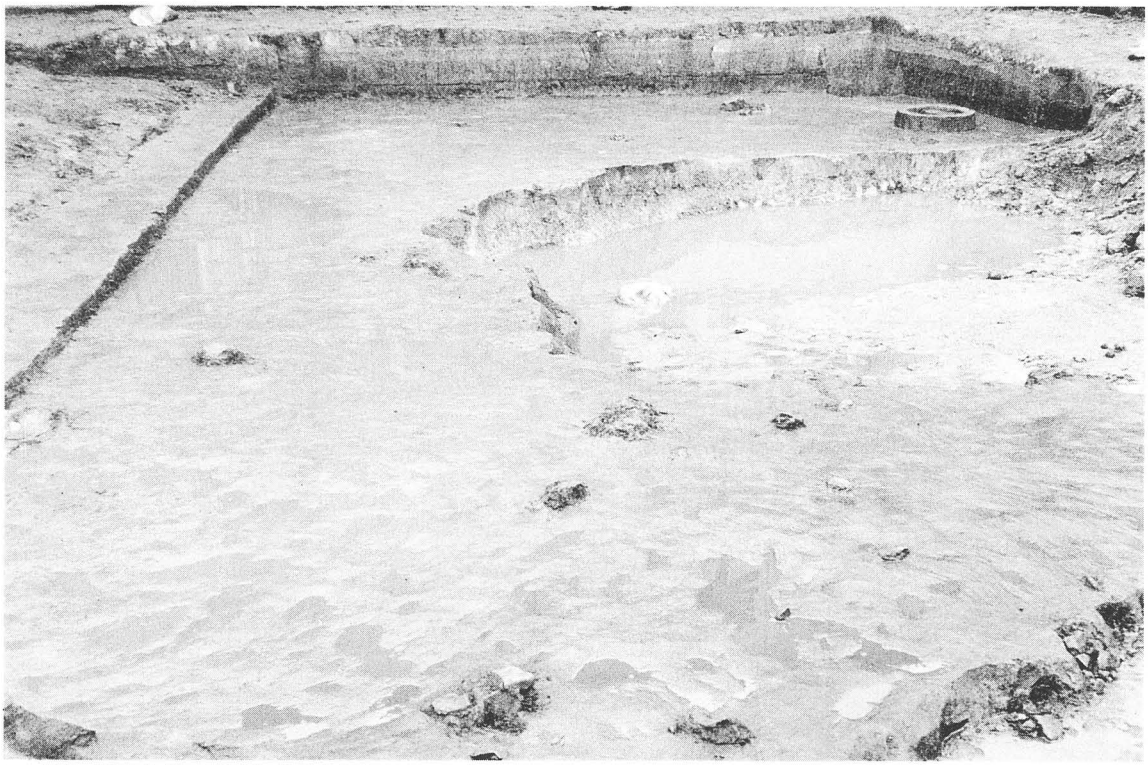


2．調査地全景〔調査後〕（南西より）



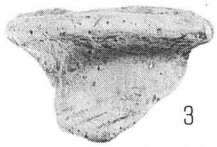
1．南東隅土層（北より）

2．第Ⅳ層遺物出土状況（北より）



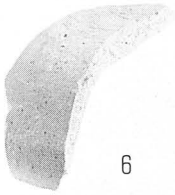
1．第Ⅴ層遺物出土状況（西より）

2．作業状況（西より）


3

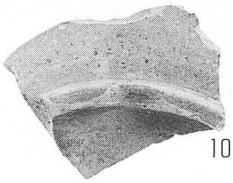
4

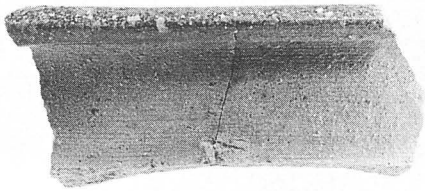
5

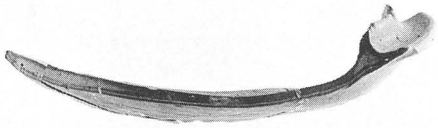

6

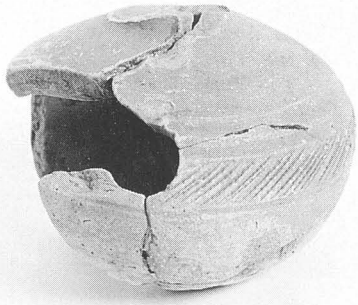
8

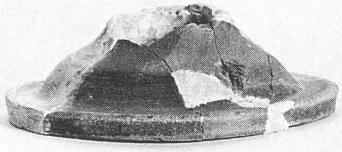
9


10


12

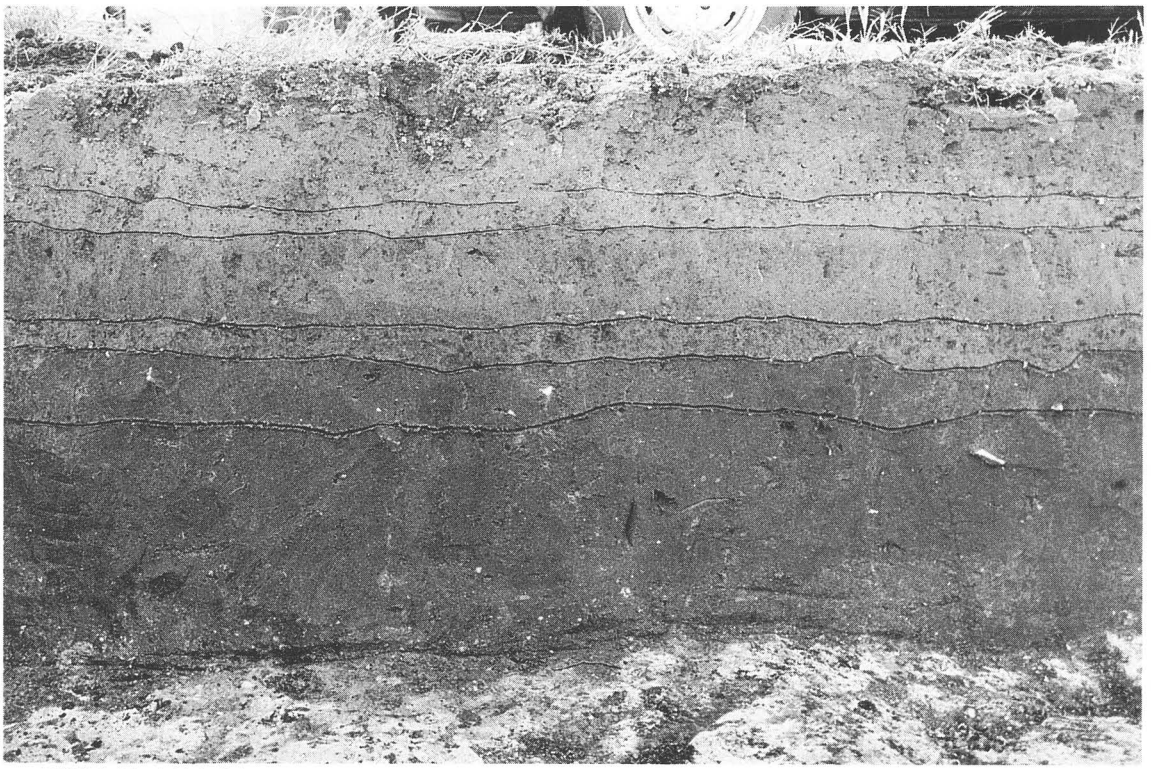

7


13


11

1．出土遺物

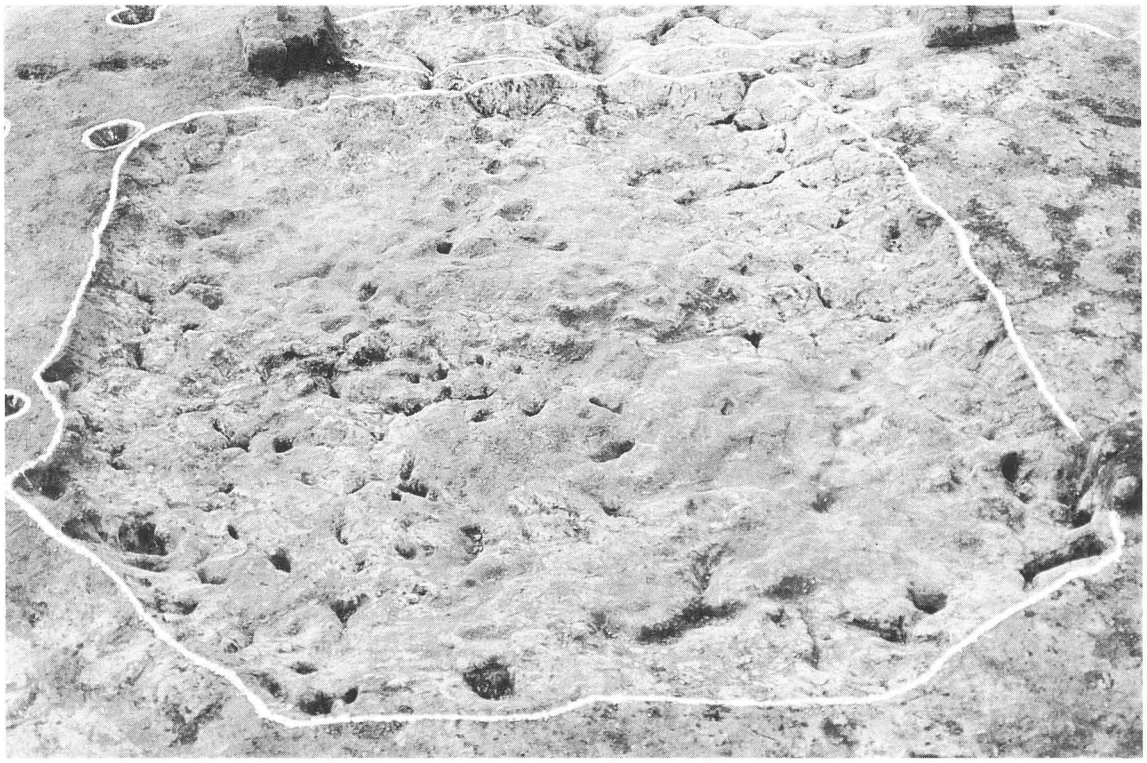
1．遺構プラン確認状況（東南より）



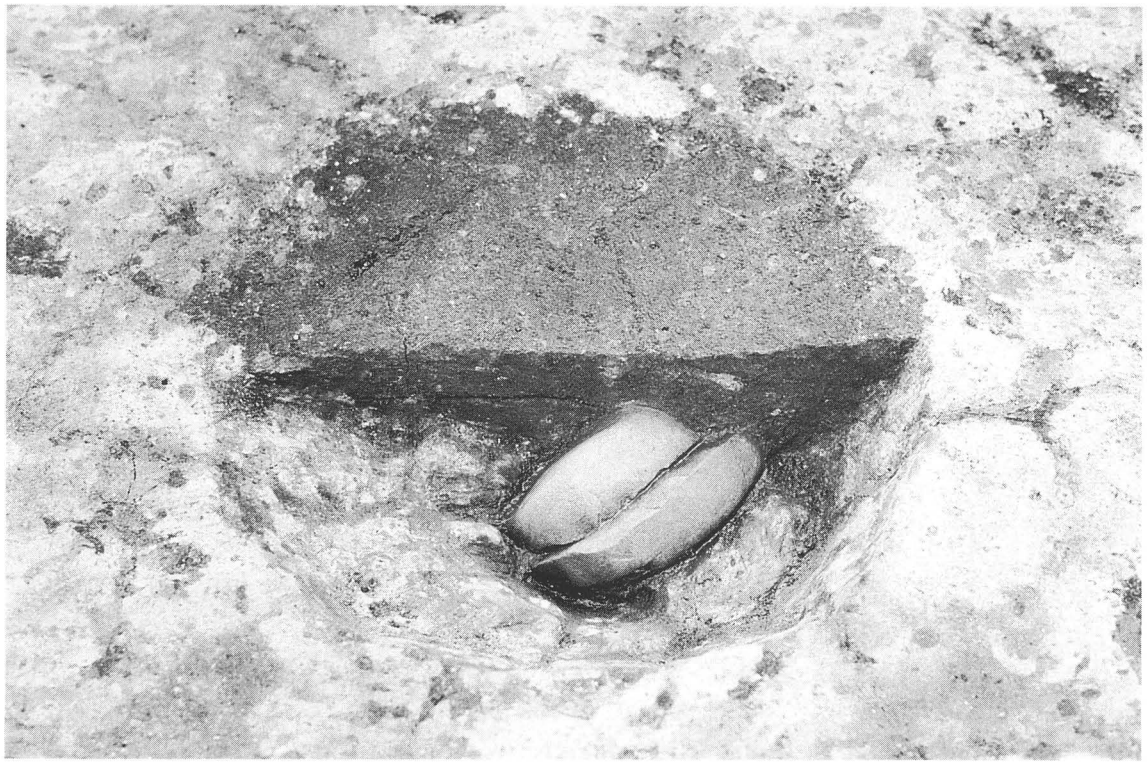
2．西壁土層（東より）

1．遺構検出状況①（北より）

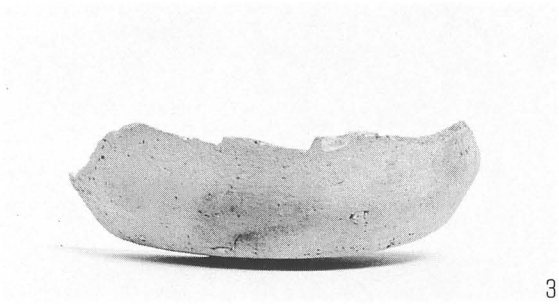
2．遺構検出状況②（北より）

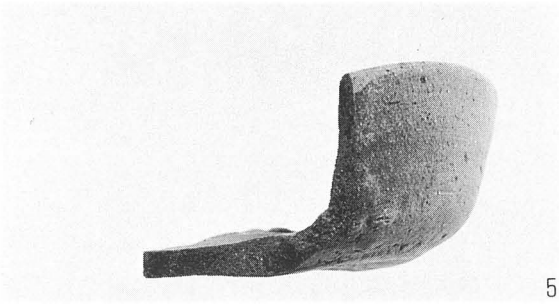


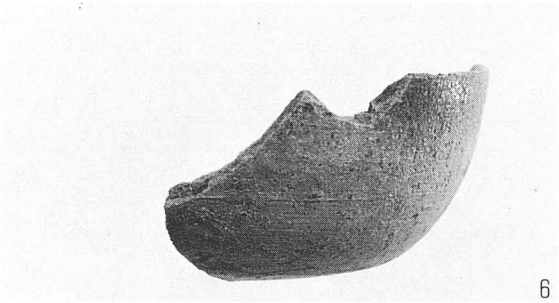
1．ＳＸ１（東より）



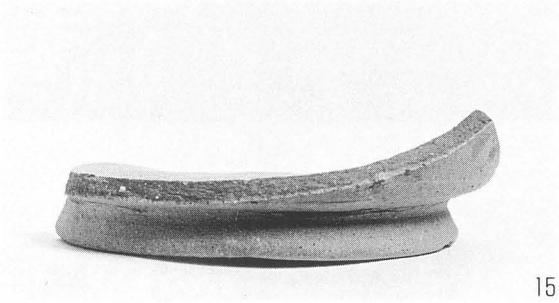
2．ＳＰ３（南より）

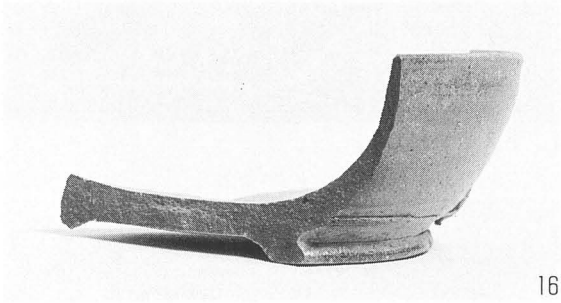

3

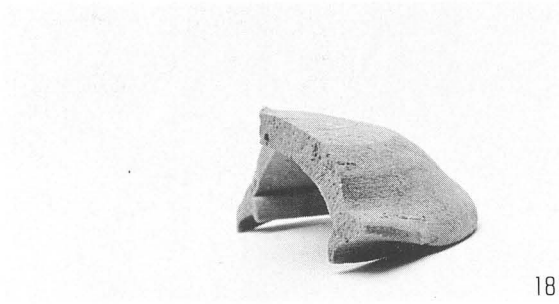

5


6

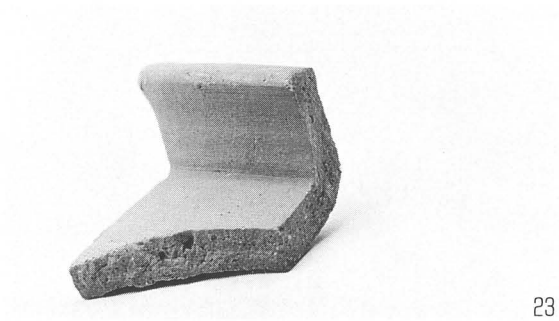
7

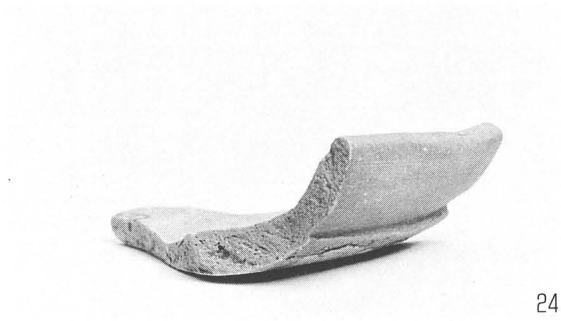

15


16


18

22


23


24

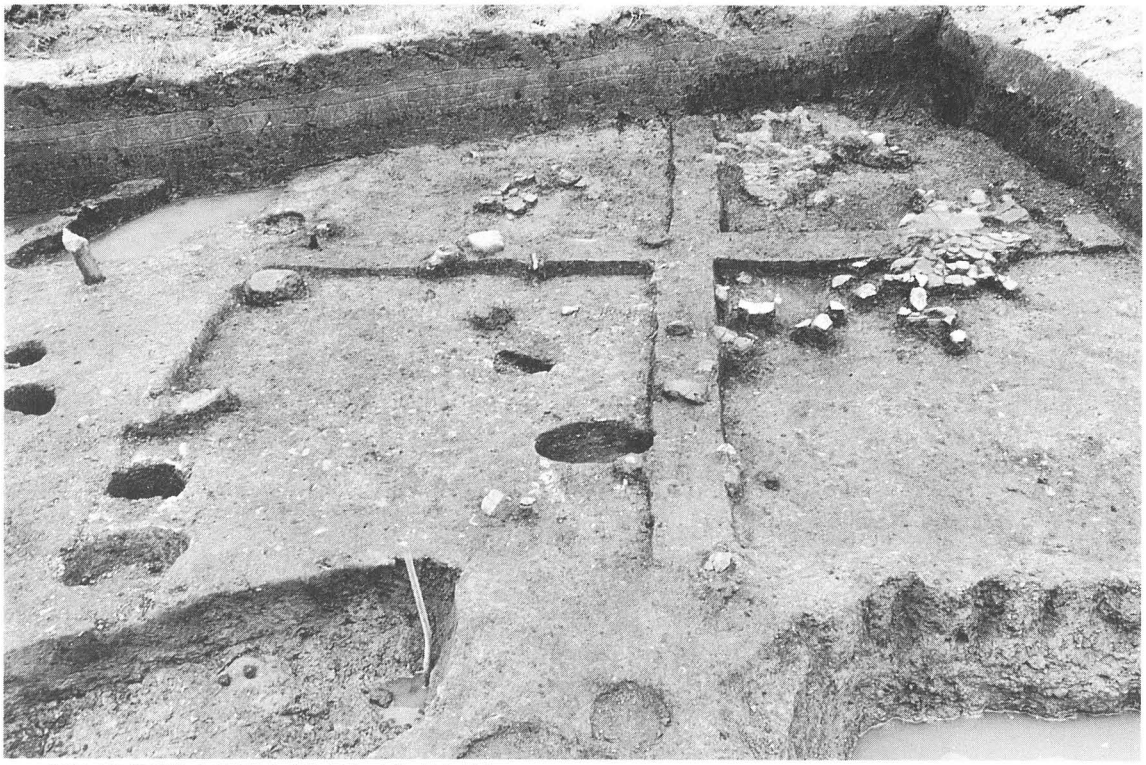
1．出土遺物

1．東調査区遺構検出状況（東より）

2．調査地全景〔現在〕（南より）

1．ＳＫ4（北より）

2．ＳＤ1・ＳＫ6（西より）



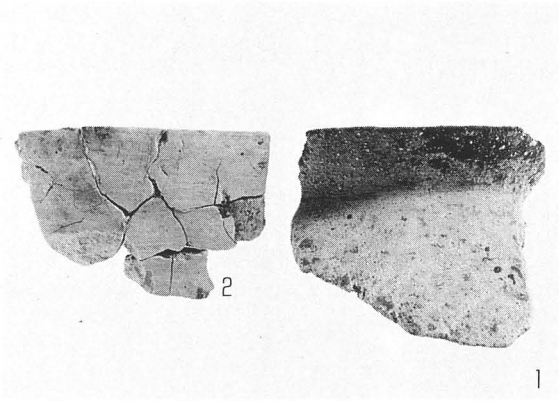
1．東調査区西端土器溜り〔遠景〕（北東より）

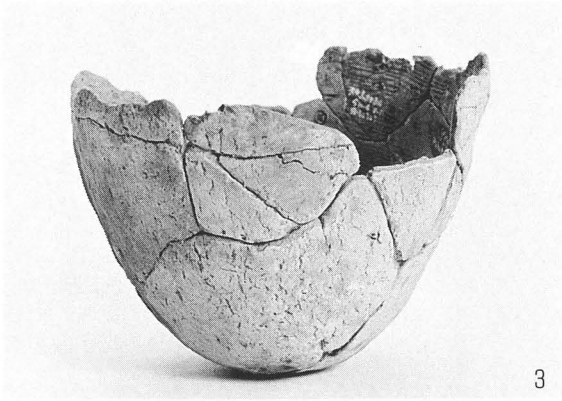
2．東調査区西端土器溜り〔近景〕（北東より）

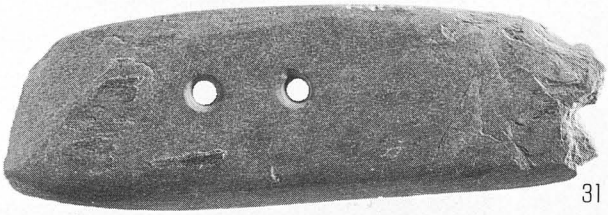
１．西調査区遺構検出状況（北より）

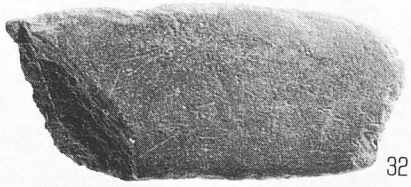
1．ＳＫ9（西より）

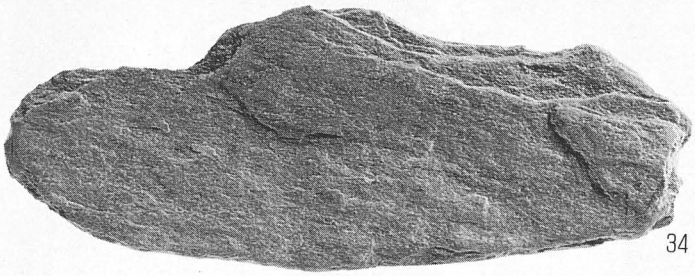
2．ＳＫ7（西より）











1．ＳＫ4 出土遺物（１～５）　包含層出土遺物（31～34）

松山市文化財調査報告書　第27集

来住・久米地区の遺跡

平成４年３月31日　発行

編　集　財団法人　松山市生涯学習振興財団
発　行　埋蔵文化財センター
〒791　松山市南斎院町乙67番地６
TEL（0899）２３-６３６３
印　刷　平和印刷工業株式会社
〒790　松山市福音寺町728番地
TEL（0899）４７-９１５５